
皇帝と眠り姫の運命論

深縁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

皇帝と眠り姫の運命論

【著者名】

ZZマーク

【作者名】
深縁

【あらすじ】

今日から高校生活2年目が始まる。いつもどおりだと思った日常は、入学式を境に非日常へと変わっていく。心の赴くままに動く生徒会長に、意味深に微笑む先輩。極めつけは入学してきたばかりの新1年生で…。俺の振り回され人生の幕が上がるっ！？暇つぶしに読んでいただけたらと思います！

幼馴染。

彼女とは生まれてからずっとの腐れ縁。

昼夜も食事もお風呂もいつも一緒にいた。

血が繋がっているわけでもないのに毎日彼女の顔を見ない日はなかった。

それは彼女の両親が2人してとても多忙な人たちだったからだ。

うちの両親と昔からの親友同士で、とっても仲がよかつたことから、ほぼ1年中うちに預けられたような状態だつたらしい。

昔のおれはそんな事情を知らなかつた。

彼女がいつも傍にいるのが当たり前で、隣にいないことが想像できないくらい彼女は俺の傍にいた。

愛しいとか好きとかうつとおしいとかいう様々な感情は、一切俺の中にはなく、全てを受け入れていた。

そう、彼女が突然自分の隣から居なくなるまでは…。

両親は言った。

「仕事の都合で引っ越しすんですって」

突然の別れ。

今までの日常がたやすく無くなる現実をおれは小学校2年生があと少しで終わるという時期に味わったのだ。

彼女がいなくなつた日のことをおれは一度たりとも忘れたことはない。

あの喪失感

そしてなんともいえないあの感情は…。

それから年月は過ぎ、俺は16歳になつていた。

高校生活も2年目に突入しようとしていた。

「皇紀へそろそろ下りてきてござい飯食べないと間に合わないわよ~」

清々とした青空の広がる空の下、青い屋根が田立つ一軒家で、ある日常が始まりつつとしていた。

風薫る4月。

年度始まりである。

「分かった!」

俺、富ノ内皇紀。

今年で17歳になる（まだ誕生日が来ていないので16歳だが）高校2年生だ。

入学したばかりの時は四苦八苦したネクタイも今は軽々と結べる。

俺は部屋の窓から空を見上げていた。

「いい天気だな…入学式にはもつてこいか

高校2年の俺には特別という日ではないのに、身だしなみになぜか力が入る。

いたくも無いのに。

どうしてかと言つと、友人が生徒会長に1年のとき立候補して確實といわれた奴を蹴落として当選したことによつて、勝手に副会長に任命させられたせいなのである。

会長以下は全て指名制だ。

さすがに副会長が、新入生の前でだらける訳にもいかず、しつかりと第一ボタンまで留めてネクタイを締めているわけであった。

「よし、完璧」

姿見でチェックを入れて出来栄えに満足し、俺は階下に降りていった。

鞄を忘れることもなく完璧だ。

「母さん、『ご飯』

鞄を居間のソファーアに置き、テーブルの席に着く。

待つていましたといわんばかりのタイミングで目の前に置かれる朝食の数々。

うちは父親の希望で毎朝和食。

ご飯、味噌汁、焼き魚、卵に海苔。そして漬物といった定番メニューがテーブルに並ぶ。

「いただきます」

手を合わせて挨拶。

これを言わないと母さんが「ひなたー」。

きちんと挨拶しないで食べようとしたら、即座に朝食がなくなるだ
れい。

まあ、もひばかりの習慣で忘れる」とせぬけれど。

「はー、じいちゃん」

母さんの声を待たずして朝食にありつけるは許されてるので、早
々にあります。

そんな俺の行動に被せるよひに母さんの応えがかえつてくれるのだ。

「今日は遅いのかしら?」

「今日は入学式だけだから早く帰れると懇ひ。少しだけ生徒会の方
で会議があるかもだけれど」

すずーっと味噌汁を飲んで答える。

これといって誘われているわけではないので、いつもよりは断然早
く帰れるはずだと踏んで。

「そう。もしお友達に誘われたとしても今日は断つて帰つてきてね
「なんで?」

いつもは突然誘われて遅くなつても、連絡さえすれば許してくれる
母さんが今日はきつちと念を押してくれる。

「用があるから」

はつきりとした返事が返つてこなくて、余計に訳が分からず首を傾

げた。

「返事は？」

にっこりと笑つて母さんは返事を待つていた。
富ノ内家では母親が一番強い。
逆らう必要性も感じなかつたので、頷いた。

「分かつた」

母さんは返事に満足して、流しのほうに戻つていつた。
俺はただただ、首を傾げるだけだつた。
後で起きる出来事も知らず。

「よつよつ」

人の通りもまばらな学校に続く桜並木の途中で、俺は聞きなれた声に呼び止められた。

今日は入学式しかないため、用のない生徒は休みだ。うらやましいことだ。

とこうことで、人は数えられるくらいしか見受けられない。

「高知」

振り向いた先には、案の定といつが、俺を生徒会に巻き込んだ張本人が、爽やかな笑顔を振りまいて立っていた。

こいつの名前は高知たかち 奏そう。

今年度の生徒会長にしてかなりのワンマン…だと俺は思っている。

確実といわれていた生徒会長候補以下数名を蹴散らして、見事生徒会長になつた男である。

「いや～今日はいい天気に恵まれたものだよな～」

爽やかに笑っている姿は、一見好青年に見える。
が、実際はかなり違うと俺は知っている。

「はよ…」

朝っぱらから無駄に体力を使つ氣も無かつたので、無難に挨拶を返
しておぐ。

「さてさて…桜も満開で、新しい門出にはもつてここの天氣で喜ば
しこひつた」

俺の隣にやつてきて横に並んできたので、一緒に学校に否応無しに
向かう。

高知はよく喋る。

これぞ生徒会長たる能力の1つだと叫わんばかりに喋る。
なので、適当に頷いてやつておけば、勝手に喋つてくれるので、あ
る意味助かつたりする。

たまに適当に返事しそぎて、変な事件や計画に巻き込まれると
いう失態を起こすこともあるが…。
一応、気を付けてはいるんだぞ！
まあ、それでもちよこちよこ巻き込まれたりするんだが。

「やつだな

いつものように高知の話に相槌を打ちながら校舎へ続く道を進む。

「今年の新入生の中に、可愛い子たくさんいるといいな」「知るか」

爽やかな笑顔を一転、含みのある笑みに変えた高知に賛同する必要性も感じず、そっけなく返す。

賛同した暁には何が起こるか予想がつくからな。

「おやおや。皇は^じの重要なことを知るかの一言で切って捨てるのか?」「…」

始まった。

こいつは真剣そうな顔をして語りだす。
絶対に心の中で笑ったまま。

こいつはとても器用なのだ。

先生たちがこぞって騙されるほどに。

これに何度も書をこじついたか。

俺は高知の浪々とした声を右から左へと聞き流しながら、学校への道を黙々と歩くのだった。

学校を目前にして急に高知は立ち止まつた。
横を歩いていた俺はそれにすぐには気付かず、数歩先に行つてから
声が聞こえなくなつたことによつて気付いた。
大概に俺もやつの言葉を流しきつていたようだ。
慌てて後ろを振り返つた。

「高知？」
「…あれは」

高知はある方面を見たまま止まつっていた。

視線の先には、この桜並木で一番見事な桜。
そして、その桜の木の下で佇む一人の少女。

腰まである栗色の柔らかそうな髪が背中でさらりと揺れており、それと共に桜の花びらが上から舞つていく図は幻想的で、美しかつた。高知がおもわず立ち止まつてしまつたのが分かるほどに。

どれほどの間立ち止まつて見ていたことだらう。

強風が舞い、視界を花びらに遮られる。

おもわず閉じた目を開けたときには、もう桜の木の下に少女の姿は無かつた。

一瞬の出来事だった。

いち早く現実に立ち戻った俺は、先ほどまで少女がいた桜の木の下を見たまま動かない高知に声をかける。

「おい、遅れるぞ」

「…」

「おい」

「…ああ」

上の空のような聲音と共に高知は頷いた。

俺は溜息をついた。

こちらが喋らなくてもお構いなしに喋りまくる高知が、今は意味を為さない言葉を呴き、何かに捕らわれたような瞳で一点を見つめたまま突っ立っている。

いつにない様子の高知に戸惑いながら、このまま式の間も使い物にならなくなつてしまわれると非常に困ると思い、容赦なく後ろからどついた。

「テヒッ！？」「

前のめりに倒れそつになりながらも、かろうじて堪えてこちらを向いた。

高知の目は正気に戻っていた。
若干涙目だったが…。

「田は覚めたようだな

「…」

俺が叩いたところがよほど痛かったのか、田じりに涙をためたまま無言で睨んでくる。

「お前がいくら色ボケしようとまわないが、俺に迷惑をかけるな

辛辣に吐き捨ててやる。

高知は俺の言葉に反応した。

「色ボケ…か…？」

一瞬呆けた顔をした後、豪快に笑い出した。

「皇ーーっ…言つてくれるじゃねえか！！」

「本当のことことだろ。あれを色ボケといわずになんていうんだ」「このおれ様がそんなはずあるかよ…なんとも幻想的な光景について思考が止まつしまつただけさね」

一笑に付して、高知は歩きだした。

その足取りは俺の言葉に動搖しているかのよつに多少早足に見えた。不安は残るが、先ほどの光景を見る前の高知に戻つたことに安堵を覚えながら、やつの後姿を少しの間眺める。

その後、俺も高知の後を追つべく歩みを再開させた。

「副会長～。これって何処に配置するんですか？」

「それはあそ～だ」

「～は体育館。

今日の主役はまだ登校もしていない。

今は、生徒会役員や放送部などの部員等が入学式の準備に追われていた。

「富ノ内。高知を知らないか？」

「高知なら教頭先生に呼ばれて出て行きましたよ」

近寄ってきた教師に知っている情報を教え、俺は絶えずマイクや椅子の配置などの細々としたことで質問に来る生徒たちを捌いていた。

「分かつた。助かつた」

「富ノ内！荷物運んでいたやつが階段で足滑らせちゃった」

教師と入れ違いにやつてきたのは、俺と一緒に高知に巻き込まれて生徒会に入つた3年の先輩、遠山トオヤマ一哉だつた。

役職は書記である。

外見的には書記など似合わないほどにがつしりとした体育会系の男

だ。

運動部長と紹介されたらきっとみんな納得すると思われる。

「怪我とかは？」

「ああ、幸いにしてといつか、荷物を放り出したおかげで怪我無し
だ」

「それはよかったです。それで、荷物の中身は壊れたんですか？代えの
きかないものですか？」

「どうだろ？先生に聞いてみる」

「分かりました。お願ひします」

遠山先輩と俺は軽く挨拶をして、また仕事に戻つていった。
体育館の中の大半を占める椅子の配置を先に準備していたが、まだ
まだ仕事は沢山あるのだった。

入学式

新入生たちが座る舞台に向けて正面といふ場所の右側に教師と、生
徒会の面々が座つていた。

ちなみに、反対側は来賓席になつていてる。

そして、新入生座席後方には保護者席があり、そこはほぼ、埋め尽
くされていた。

「後は式が終れば行事の一つが終るな」

俺の隣に座っている遠山先輩が、やり遂げたといった顔をして吐息をつく。

「まだ式は始まつてもこませんよ」

俺は遠山先輩に釘を刺し、反対側に座っている高知の方に視線を向けた。

「後はお前のスピーチと斤付けだけだ。しつかりやつてくれよ
「おう！まかしとけ…」といふか、おれはいつでも完璧だぜ」

自信満々に高知は言つ。

何処からその自信は出るのだろうか。

まあ、それぐらいではないと会長職は務まらないのだろうが。

本日の司会進行役の教頭がマイクの前に立つ。
体育館が静かになり、静寂が辺りを包む。

「始まるな

高知の辺りを憚つて抑えた声が、隣に座る俺にしつかり聞こえた。
その直後、教頭がマイクに向かつて口を開いた。

「新入生、入場」

新入生の入場である。

ここは桜ヶ丘高校。

少々小高い場所に建つており、校舎に続く通学路には見事な桜並木が続いている。

桜が散った後が少々大変だつたりするのだが、ここでは端折つておくことにする。

桜ヶ丘高校は在籍生徒人数600人くらいの中型高校で、共学である。

生徒の自主性を重んじているが、偏差値もそれなりに高いため、学生生活を快適に過ごすためには、よい成績を保つ必要があった。しかし、それさえ保つておけば様々な行事をさせてくれたりと融通のきく、かなりのお祭り高校である。

高知が生徒会長に相応しい学校だ。

俺的には高校選びを間違えた感がややあつたりする…。

桜ヶ丘高校を受けたのはただ自宅から通うのに楽だったのが理由だ。

俺の意見は置いておいて、桜ヶ丘高校は近年とても人気があり、年々倍率が高くなりつつある。

倍率がどうして年々上がっているかに関しては知らない。
…知らないから、聞かないように！

新たな出発に相応しい音楽に合わせて、Aクラスから順次入場していく。

クラスは学年ごとにFクラスまである。

みな一様に幼さの残る顔つきで、やや緊張気味に歩いてくる。入場してくる新入生の顔は、皆一様にこれからの中学校生活への多大なる期待と少しの不安に輝いていた。

去年の自分もこんな表情をしていたのかと思うと感慨深いものがあった。

「俺たちもこんな顔してたのかねえ……」

新入生の顔を眺めていたから、俺は隣の様子に気付かなかった。次々に入場してくる新1年生を眺めながらることに気付く。高知のことだ。

きっとこんな時は冗談で（いや、本気なのか？）女子生徒のことを話題にしているはずだ。

教師に分からぬように巧みに隠れて。

なのに、奴は何も言わず、新入生の列をくいいのように見つめているのに、俺は気付いてしまった。

体育館の中が少しざわついたのはそんな時だった。

入場行進も早いもので、今は最後のFクラスが入つてこよつとしている最中だ。

その前に入場したEクラスに、周囲をざわつかせるほどいの生徒がいたようだ。

なんとはなしにそちらに視線をやり、俺は目を瞠つた。

視線の先に、今朝見かけた少女がいたからだ。

あの時遠くから見かけたのにもかかわらず、綺麗な少女だと思った。しかし、今はあの時よりも近い分、その綺麗さは周囲の視線を釘付けにするほどだつた。

遠くて判別するには難しかつた瞳はヘーゼルナッツの色合いで、瑞々しさを湛えている。

つい周囲が見入つてしまつのも分かる気がした。

ハツと我にかえり、慌てて高知を見る。

朝と同様にまたしてもその少女に魅入られており、他に目がいかなくなつてゐるようだつた。

そんな中、ざわめきを残しながらも新入生たちは全員席に着いた。

「 これより、第 一期入学式を始めます」

高らかに始まりの言葉を体育館中に響かせる教頭の声を遠くで聞きながら、俺は背中に冷たい汗が流れるのを感じた。
悪い予感つきで。

「おい」
「…」
「おい、高知」
「…」

式を妨害しない範囲の音量で先ほどから声をかけているが、一向に高知は反応を返さない。彼女が座っている場所から視線が固定されている。

(やつぱり一目惚れじゃねえかよ…)

すっかり恋する男に成り果てた、生徒会長をどうしたらいののか皆目見当がつかなかつた。

「富ノ内」

反対側から声を掛けられて、ハッと意識を戻す。

「遠山先輩…」

遠山先輩の席は俺の横だ。

ずっと俺が高知に声をかけていた様子に、異変に気付いたようだつた。

心配した顔の遠山先輩がこちちらに視線で問い合わせていた。

「どうした、問題か？」

「ええ…かなりやばい状況かもしません」

「冗談など言える気分でもなく、藁にでもすがるよつて遠山先輩を見て搔い摘んで事情を話す。

一応？高知のプライドを潰さないように遠山に話しあると、遠山が開いた口がふさがらないといった表情とぶつかる。

俺と同じような心境になつて頂けたようで、喜ばしい限りだ。しかし、そうしていいる場合でもない。

「思ひつくり叩いてみたらどうだ？」

「効果ありそうですが、それでは式を妨害するかと」

「つづつ…つねつてみたらどうだ！」

名案だとばかりに遠山の顔が輝いた。

確かにそれなら式を妨害せずに何とかなるか？

いや、最悪痛みに呼ばれたらどうするか…。

グラグラとその後の展開を考えてみたが、つねる以外の選択肢が出てこなかつた。

「はあ…じゃあ、やつてみます」

呼ばれそうになつた時のために口を塞ぐ手を用意して反対の手を高知の腕に近づける。

ギュ――――――

腕の肉を力いつぱいひねる。

しかし、期待した反応は無い。
… どんだけ見惚れんだよ。

「駄目です」

もつお手上げだという風に俺は遠山先輩を見る。
遠山は眉を寄せて困り顔だ。

「高知は外に出しましょ！」

思わぬ助けの声は、遠山先輩の隣から聞こえてきた。

「星埜先輩…」

「星埜」

遠山先輩の隣には、これまた3年の星埜^{ホシノ} 慧士^{ケイシ}先輩が座っていた。
役職は会計である。

生徒会に入った理由は俺たちと同じだ。

外見的には遠山先輩と反対な感じ。

遠山先輩が体育部長なら、星埜先輩は文化部長の方がしつくつくる。
まあ、会計も似合つてるが。

一つ付け加えておけば、ひょろりとした体躯ではない。
つくとこにはちゃんと筋肉はついている。

いつ見たんだとかそういう突っ込みは無しで頼む。

「もう今日は役に立たないでしょ」

「…」

「しかしだな、星埜」

「それが、外には出さないけど在校生挨拶は代理を立てるとか、…誰がやるんですか？」

嫌な予感が最高潮まで高まっていた。

恐る恐る聞く。

「そりゃあ、会長が駄目なら副会長の君でしょう。富ノ内？」

上品な笑顔付きで言われてしまえばもづ自分に選択肢は無い。

相手は3年。

俺は2年だ。

こんな時は、役職名より年功序列の方が、力がある。
がっくりと肩を落とす。

「富ノ内…」

唯一の救い？は、自分を慰めるように肩に置かれた遠山先輩の手と、同情的な目だつた。

…同情的な目は余分か。

「井川先生」

進んでいく入学式。

俺たちの前に座り、舞台に立つた校長先生の話を聞いている生徒会顧問の井川先生に声をかける。

「どうした？」

「ちょっと…ハグニングがありまして…」

「うん」

「会長がするはずだった在校生挨拶ですが、副会長の俺がすること

になりました「

「！？」

井川先生が目を瞠る。

それはそうだろう。

今は式の真っ最中なのだ。

前を気遣いながらも後ろを向いてくる。

どうしてか問おうと口を開こうとしたので、高知を指差してやる。
見てもらつた方が早い。

指差す方にいる高知を見て、井川先生も絶句し、俺を見る。

「こんな状況で…。何とかならないかいいくつかの方法を試したのですが、この状態のままです」

フォローも浮かばなくなり、俺は苦笑った。

その笑いに何かを感じ取ってくれたのか、井川先生は力強く頷いてくれた。

「よろしく頼む

これで了承は取れたんだが…。

はあ～。

もう溜息しか出でこない。

高知の作った挨拶の原稿を握り締めながら、重い溜息を俺は吐くの
だった。

途中で視点変わります。

適度な長さで校長先生の話が終わり、他の来賓の方々の話も問題無く終わる。

現在は、今年の新入生代表者が挨拶を述べている。

これが終われば次は自分だなあとそれほど緊張という緊張もせずに待つ。

ここまでできたらもう一つ、腹を括るしかない。

人前で話すのは好きではないが、苦手というわけではないので、なんとかなるだろつ。

そうこうしている内に、新入生挨拶も終る。

教頭先生にも顧問の井川先生が話を通してくれているので問題は無い。

式は後少しで終る。

さつと終わらじて帰りたいと思つた。

「在校生挨拶。在校生代表、富ノ内皇紀
「はい」

やつてきますか。

腹を括れば堂々としたもので、皇紀は遅くもなく早くもない速度で前に進み出た。

来賓、保護者、教師といった場所に視線と体を向け、お手本のよつな礼をする。

舞台横の階段を上がり、国旗と校旗にも挨拶をすませ、壇上に立つ。

皇紀が前を向いた瞬間、少々新入生と保護者席からざわめきが起つた。

大抵、生徒会長の派手な外見に隠されがちだが、整つていて落ち着きもある皇紀は、会長と同じくらい生徒たちに人気があった。

それも、本当は生徒会長がやるはずだった在校生挨拶を彼がすることになり、新入生にとつて一番最初の印象に残る先輩が皇紀になつたのである。

その後の影響などは露とも知らずに、皇紀は淡々と祝辞を述べていく。

それがまた一層皇紀のオーラを引き立たせ、新入生たちの視線を釘付けにしていた。

「うわあ…さつと後で、高知は悔しがるだろうね」

はんなりと笑つて、星埜は席から全ての様子を見ていた。

「おーおー…笑い事じやないんだが」

「ふふふ…あれ？」

「どうした？」

「せ、あの一番田立っている新入生の子」

入場の際、やわめきと共に体育館に入ってきた少女に遠山の視線を誘導する。

「ああ、どうした？」

「…君はまつたく。見てみなよ。あの真剣な目」

星埜の言葉に従つて注視する。

「あ」

「なにやう意味深だよね。」 彼女の富ノ内を見る田井

「知り合いか? いや、しかし富ノ内はそんなことじれつぽつとも…」

…

首を傾げる遠山を他所に、星埜は意味ありげな笑みを見せる。だが、式に意識を戻せようと星埜はひとたび声をかける。

「ほら、そろそろ祝辞も終つて、式も終わる。あと少しだから他ことは後、後」

「あ、ああ」

自分がうるさい話をふつておきながら、それをおぐびにも出でず遠山を定し、自分も式に意識を戻す星埜であった。

無事式も終わり、俺はほっと一息ついた。

後は新入生が退場するだけ。

教頭先生がマイクの前に立つ。

「新入生退場」

ぞろぞろと新入生が入場してきた順で退場していく。

「富ノ内、お疲れ様」

「いえ、無事終わって本当によかったです」

拍手を送りながら、俺たち生徒会役員の面々は苦労を互いにねぎら
いあつた。

年度替わってそういうのハプニングに、今年一年を思つて涙が出る
かと思つたのだ。

「まあ、まだ片づけがありますけどね」

「それは会長に率先して動いてもらいましょう」

「そうしましょう」

俺と星埜先輩は互いに共犯者の笑みを顔に上らせる。

その近くで居た遠山先輩は何故か固まってしまった。
なんか怖い物でも見たのだろうか？

そんな時である。

ガツタ――――ンツツ―――?

けたたましい椅子の倒れる音がして、新入生の退場していく列が止まる。

慌てて、俺たちは音の発生場所に視線をやつた。
それは新入生が座っていたところだった。

「いつたい何が…！」

「会長！」

俺が把握する前に、高知が先程までの間抜け面はなんだつたのかといつほどの凜々しい顔で、走つていくのが見えた。

音の発生源のところに走つていく高知のスピードに唖然とする。

「富ノ内。どうやら彼女が関係しているようだよ」

冷静な星埜先輩の声に現状を思い出し、自分も輪になつてゐる場所に近づいていく。
近づいて分かつた。

どうも例の彼女が椅子から立ち上がる際に倒れてしまつたらしい。
状況を把握しようとする俺をよそに、高知は素早いもので、もう輪の中心におり、例の彼女に声をかけていた。

クラスの担当となる教師も事態に気付いたのか先頭を離れてその場

に戻ってきており、それを囲ひよひと同じクラスらしき生徒たちがいた。

「大丈夫かい？ 気分でも悪くなつたのかな？」

常以上の優しい声で、高知が話しかけている。

そして、彼女が立つのを手助けしようと手をさし出していた。だが、彼女はその手を取ろうとはせず、自分であぶなかしいながらも立ち上がる。

しかしそくに膝をついてしまうのが見えた。

教師も何かしら話しかけ、手を差し出しが、彼女は一向にその手を取ろうとはしない。

「どうして手を取らない？」

「嫌なんだろ？ ね」

無意識にでた疑問の声に返事が返つてくるとは思わず、ギョッと声のした方を見る。

そこには星埜先輩と遠山先輩。

星埜先輩はなんだか分かつてている様子で平然とその様子を見ている。

「嫌つー・触らないでーー！」

突如、切羽詰まつた声が響き驚いた。

そこには例の彼女に近づき、起き上がらせよつとして拒否された高知がいた。

「おいおい…無理じいか？」

無理に触ろうとした高知に気付き、眉間にしわがよる。

「まあ、いつまでも退場の列を止めておけないしねえ……」

星埜先輩の声が後ろから聞こえてくる。

「しかし星埜先輩、嫌だつて言つてはいるし……」

「でも自分では動けないんだよ。仕方がないじやない」

「……」

星埜先輩の言い分も分かる。

けれども何故か全てを納得できなかつた。

教師も高知も彼女を扱いかねて困つていた。

「富ノ内」

「はい?」

「君が運んであげなさい」

「は?...」

もやもやと胸に湧き起る感情も忘れ、勢いよく星埜先輩の方を向く。

星埜先輩は今なんと言つた?

「君が運んであげなさい」

「高知も先生方も拒否られたのに...無理ですよ」

「いや、僕は大丈夫だと思つていいんだけどね」

意味深な笑みでこちらを見てくる星埜先輩に、俺の頭の中はこんながらがる一方だ。

「... そうだな、物は試しだ。富ノ内行つて来い!」

何故か遠山先輩までもが俺に行つて来いと囁く。
本当にわけが分からん。

「遠山先輩まで...」

「ま、先輩命令」

先輩命令とまで言われてしまえば断れない。

俺はあからさまに肩を落とした。

俺のこの気持ちが2人に伝わってくれればと思いながらのパフォーマンスだが、きっとスルーされるんだろうな…。全てが虚しくなりそうだ。

「…じゃあ、駄目もとで行つてきますよ」

「おは

先輩2人に見守られて、輪の中心に入つていいく。彼女を取り囲んでいた外側の生徒たちが俺に気付いたのか、道を開けてくれる。

なかなか気がきいている1年生たちだと感心する。どうも今年の1年生たちは当たりのようだ。

そんな場合じゃないと思いつがらも、ついつい見定めようとしてしまつ。悪い癖だ。

「高知」

「皇。お前も来たのか？彼女が触れられたくないらしくて…な」

「…うよつといいか？」

彼女に近づこうとする俺を何故か高知が邪魔をするように前を塞ぐ。

「無理だつて」

俺を彼女に近づけさせたくないよつだ。

俺はだれかれ構わぬナンパすることもないし、触ったからといって
感染しないぞ。

俺は女たらしではないし、そして、ばい菌でもない。
高知の俺への認識はどうなつていいんだ?
高知に物申したい気持ちでいっぱいになつたが、こんな人が沢山いるところでする話でもない。
諦めよ!…。

(…今はそんなところじゃないだらう。それもお前の彼女じゃない
だろが…)

そうはいつても、心の中の声までは抑えることは出来なかつた。
彼女に近づけず、どうしたもんかと悩んでいると、それを見かねた
星埜先輩が高知にどくよつと囁つてくれた。

ナイスですよ!先輩!—
さつまのはチャラにしておきます!

「星埜先輩なんで…」

「はいはい、いい一からいから。これ以上時間を延ばすのは得策
じゃないでしょ」

「…」

高知が押し黙る。

星埜先輩は苦笑して、俺を促す。
俺は頷いて、彼女に近づいた。

「…大丈夫か？動けないなら手を貸してもらつか、運んでもらえ」

彼女の前にしゃがみ込みながら言つ。

これといって普通の調子で。

俺の声を聞いたとたん、彼女は俯けていた顔を上げた。

「！」

急に顔を上げるから驚いた。

彼女の視線と俺の視線が交わる。

「誰か女の子にでも手を貸してもらつか？」

彼女は無言で首を振る。

「動けるまでここにいるのか？」

頷くのかと思えば、意外なことに彼女はまた首を振った。

「じゃあ…どうしたい？どうして欲しい？」

「…」

「…」

「…」

無言が続く。

「皇、お前じや無理だつて」

高知が割り込んできた。

何をこいつはそんなに焦つているんだ?
いつもと違つて、余裕の『よ』の字もない。
しかし、確かに彼女の反応もこれといって芳しくないので、高知の
言葉を区切りにして、立ち上がろうとした。

「…ツ」

「うわっ」

立ち上がろうとした瞬間、彼女に縋られてしまつた。
倒れこみそうになるのをからうじて耐える。
さすがに予想外の動きには簡単には対処できない。
倒れなかつたことことを褒めて欲しい。

「「「」」」

そんなことを悠長に考えた俺を他所に、周囲はそれどころではなかつたようだ。

教師も高知もその光景に睡然とした顔をしていた。
無言の空気が俺に重くのしかかってくる。
あからさまな視線は出来ればご遠慮したいのだが。

「あ～…」

「…」

ギュッと制服を掴まれたまま、俺は周囲を見る。

高知の固い表情や教師の呆けたような表情。

そして最後に星埜先輩と遠山先輩に行き着いた。

星埜先輩は笑っていた。

そして入り口を指す。

それをみて俺は冷静に戻った。

うん？俺もちょっと動搖していたらしい。

「俺が保健室まで運ぶ…OK？」

彼女に確認をとる。

彼女の頭が縦に揺れた。

それを了承と受け取り、彼女を抱き上げた。

いわゆるお姫様抱っこと呼ばれるしなものだ。

この時点で、周囲の視線はあらかた意識からシャットダウンする。認識しても疲れるだけだからな。

「うわ…軽いな」

予想以上に軽く、驚きのまま口から言葉が出てくる。
すぐさま体重のことに関しては女性にはタブーかと思い直し、口をつぐむ。

しかし、彼女からは非難の声はあがらなかつたので、こいつぞりと吐息を吐いた。

「彼女は保健室に運んでおきます。後はよろしくお願ひします」

顧問の井川先生に声を掛けて入り口に向かう。
これ以上ここに留まるのは得策ではないから、みんなの視線を背中
に受けながら体育館を出て行つた。

「…なんとも楽しくなりそうだねえ」

この時、ポツリと星埜先輩が声を零したのだが、誰にも聞こえてはいなかつた。

ガラガラガラ…。

保健室。

沈黙のまま、保健室までたどり着き、腕に彼女を抱き上げたまま保健室のドアを器用に開ける。

保健室には誰もいなかつた。

当たり前である。

今さつきまで入学式だったのだ。

養護の先生もばっかり入学式に参加だ。

「あ～…とりあえずベットに寝るか?」

ここまで運んでなんだが、どうしたらいいのか首をひねる。たが、立っていられないのなら寝かせてしまえと結論を出し、彼女をベッドに運ぶ。

「…」

彼女は無言。
俺も無言。

途方に暮れた。

「富ノ内君、『めんなさい』ね」

勢いよく保健室の出入口が開き、先生が駆けつけてきた。先生の勢いをみると、廊下を走ってきたような気がしたが、気付かなかつた振りをする。

ここは空氣を読むべきだ！

「……え。じゃあ、体育館の片付けあるんでおれはこれで……え？」

先生が来たことにほつと吐息を漏らし、体育館に戻ろうとした。……だが、それは阻止される。制服の端を握つたまま離さない彼女に。

「……どうした？」

「……」

振り向いて、問いかけても返事なし。

ただ、ギュッと制服の端を握つて離さない。

「……どうして欲しいんだ？自分の口で言え」

さすがに彼女のだんまりに疲弊し、そつけない言葉が口をついて出る。

無言の言葉を拾えるほど察しのいい人間ではない。

「……」

「言わないのなら俺は行くぞ」

「み、宮ノ内君」

戸惑つたような先生の声が背中の方から聞こえてきたが、あえて無視する。

申し訳ないが、これは俺と彼女の問題（？）だからだ。

「…側に」

「なんだ？」

「側にいて」

微かな声。

普通だつたら搔き消されてしまつほどに小さな声だったが、あいにく保健室は静寂に満ちていた。

ポトリと言葉は保健室に落ち、俺の耳に入ってきた。

「…最初からはつたり言え」

ベッドの横にある丸椅子に座り、彼女の頭をクシャリとなでた。彼女の手はまだ俺の制服を握つたまま。

「逃げやしないから離してくれないか」

「…」

緩慢な動作と共に制服から彼女の手が離れる。

「よし」

ついつい犬を褒めるような言い方になつてしまつた。満足して、背後に立つてゐる先生を振り返り、俺は言つた。

「と、言つことなので、彼女には俺がついています。先生、申し訳ありませんが、井川先生に伝えてくれませんか？」

「え…ええ、分かつたわ。」

俺たちのやりとりをボウッと見ていた先生は、我にかえり、頷くと保健室を出て行つた。

「…」

「寝てな」

じつとじつと見つめている彼女に言つが、目を閉じようとしなかつた。まだ何があるのだろうか？

いや、この視線は、俺が出て行かないか見張つているのか？

「…」

「…」

「…手を」

「…」

手を差し出してきた理由を察し、固まつた。

そんなに俺が目をつぶつたら出て行くと思つてこるのか…。

そこまで薄情に見えるのか。

ついつい彼女を凝視する。

しかし彼女もこちらを静かな…いや、揺れる瞳で見ていた。逸らすことなく。

「手を握つていて」

もう一度彼女から、今度ははつきりと言葉にかえた願いが聞こえた。声に促されるように俺は手を差し出す。

彼女はその手を握り、そつと目を閉じた。

「はあああああ

特大の溜息。

発生源は俺自身。

片方の手は自分以外のぬくもりと共に。
もう片方の手で、俺は頭をガシガシとかいていた。

「なんだってんだ…」

自分の手だけ、拒まない少女。

そして、それをなんだかんだ言いながら愛密している自分。

分からぬことだらけで、溜息しか出でこない。

寝ている少女を見る。

見覚えはない。

…多分。

言い切れるほど自信がないことにがっくりだ。

保健室に遠い喧騒が微かに聞こえる。

保健室だけ切り取られた空間のように静寂が支配していた。

ガララ…

「…ッ」

どれくらい寝ている彼女を見ていたのだろうか。

保健室のドアを開ける音にハツと現実に引き戻される。

「富ノ内いるか？」

「は、はい」

遠山先輩の声。

白いカーテンに隔離された空間から返事を返す。

室内を歩いてくる音が響く。

少ししてカーテンが揺れ、遠山が顔を出す。

「…」ちは無事終つたぞ。またこれからのお予定についてはまた明日話しえつてことになつた

「あ、はい。ありがとうございました。お疲れ様です」

「…」

「遠山先輩？」

一通りの段取りなどの話は終つたのだが、遠山先輩は動かず、ある一点を凝視している。

遠山先輩の視線を辿ると、そこにはオレと彼女の手が…。

「…」これは…

ずっと握っていたのを忘れていた。

不覚！

慌てて外そうとするが、遠山先輩に無言で止められる。
以心伝心じゃない。

ただ、遠山先輩が頭を振ったからだ。

「その子が起きてしまうだらうが

「…」

居心地悪が悪くて体を揺すつた。

外そうとした手をそのままに、遠山先輩を複雑な目で見つめた。

「高知が荒れてるぞ」

ニヤリと少々意地の悪い笑顔と共に爆弾を落とされる。

遠山先輩にしては珍しく意地悪な言葉だ。
たかが知れてはいるが。

「…だと思いました」

そうだろうなとは思っていた反応を高知が案の定していると聞かされて、余計に疲れを感じる。

「大丈夫だ。星埜もついてる」

そうだろうか？

余計に煽っているような気がして気持ちも晴れない。

ガララ…

遠山先輩と話しているうちに、保健の先生が帰ってきた。

「あら、遠山君來ていたの？ 富ノ内君、井川先生に伝えといたわよ。今日はもう生徒会の方はいいからそのまま帰るようになって」

「ありがとうございます。お手数おかけしました」

「いいのよ。それよりもその子の親御さんに連絡を入れたから、もうちょっとしたら迎えが来ると思つわ」

「そうですか」

寝ている彼女を起こさないよう、出来るだけ小さな声で話をした。

「富ノ内。俺は生徒会の方に戻る」

「あ、はい。わざわざありがとうございます」

片手を振つて保健室を後にする遠山先輩に軽く頭を下げ、視線をベッドのほうへ戻す。

俺は眠つている少女の顔をなんとはなしに見る。

見れば見るほどに緻密な造作に、ついつい魅入つてしまつていた。

ガララッ…

「すいませーん。宮ノ内います?」

「…」

聞きなれた声が聞こえて、とつさに後ろを振り向くが、カーテンに遮られて見えない。

分かつっていたことなのに、動搖してしまったようだ。

「あら、高知君。宮ノ内君なら奥のベッドの方にいるわよ。でも、あの娘が寝ているから静かにしてあげてちょうだいね」

「はい」

高知が何でここに。

生徒会のことで何かあったのか。

それとも…。

いろいろなことが頭の中でめぐり、混乱する。

混乱している間に目の前のカーテンが開き、高知が顔を覗かせる。

高知は先程先生と話していた時とは違い、少し固い表情をしていた。

「…よつ」

「お、おつ。お疲れ

なんとなく気まずくて、皇紀は視線を少しそらした。
高知の視線を感じる。

男に見られて喜ぶ趣味なんて無いので、やめて欲しい。

「…」

沈黙が支配する。

「…」

「片付けでなんかあつたのか？」

いつまで待つても高知が口を開こうとしないので、仕方無しに口を開く。

何故に俺がここまで俺が気を使わないといけないんだ…。

「いいや、万事つつがなく。俺がいて問題なんて起しせせるか
よ」

不遜だ。

やつと口を開いたと思えば、いつもどおりのふてぶてしさ。
いつもどおりの高知の口調に、力が抜けた。

「じゃあどうしたんだ？…彼女が寝ているから、その枕元に居られたらさしあたりがあるんだが」「…お前はいるのにか？」「…手を掴まれているんでな」「…」

また無言。

高知にばれないようひびつそりと溜息をつく。
面倒だな、本当に。

「俺は…」

高知は椅子に座つてこむ」とこなり田線より下にいた俺を強いて田で睨みつけて言った。
何故睨みつけられなければならぬんだ！

「…」

「負けないからな」

いきなりの宣言。

高知の言葉は唐突で、意味が理解できない。

「はあ？」

思いつきり疑問が口をついて出でてしまった。
素直なんで…疑いの目で見ないでくれよ。

高知はそれにより一層鬭争心を刺激されたのか鼻息も荒く、俺を睨みつけてきた。

友に睨みつけられるつてどうよ、本当に。

「だから…」

次の発言はさすがに大きい声で、ベッドで寝ている彼女が緩慢な動作で身動きする。

「高知君…静かにしてちょうどいいって先生言つたわよね」

カーテンの向こう側から先生の非難の声。

高知は口を開けたまま何かを言おうとして数回口を開けたり閉じたりしていたが、最後は自分を何とか諒めて口を閉じた。思いつきり不満そうではあつたが。

そんな時、保健室のドアが開いた。

「失礼します。」迷惑おかげしました。先程「連絡もらいました、
筒井です」

「ああ、どうも。今、ベッドの方で寝ているんですよ」

朗らかな可愛いらしい声をした女性の声が聞こえてきた。
彼女のお迎えが来たらしい。
だが、俺にとつてそんなことさせうでもよことだった。

この声。

いつも聞いている声だから間違えるはずがない。

彼女の手を振りほどいてカーテンを開ける。

「おー、皇ー」

俺の唐突な行動に驚いたのか、高知の呼びかける声が後ろからかかる。

しかし、今はそれに答える余裕は無かった。

「富ノ内君ー？」

ギヨックと先生がこちらを振り向いた。

けれど、全てを無視して先程の声の主に近づいていった。

多分後で振り返れば余裕無む過ぎだらつて落ち込みそつなほびに体裁構わず、ずかずかと。

「なんで…」

田の前にいるのは間違いなく、数時間前に見た顔だった。黙つてなんていられなくて、声が俺の口から零れ落ちる。

「なんで母さんが来てるんだよー」

動搖しまくりだ。

学校で使つてゐる冷静な仮面をかなぐり捨てて、田の前にいる人物に詰め寄つた。

「母さん?!」

高知と先生は交互に俺と彼女を迎えて来た女性 僕の母親を見ているのが視界の隅に見えた。

「まあまあ、皇紀。」これは保健室でしょつ。騒いではいけないわ

俺の驚きなんてなんのその。

母さんはにこりと上品に微笑んだ。

「…どうしてここに」

「お迎えに来たのよ」

「誰をつ」

「それは…あら、皇紀がつるといから起きたやつたわ。おまよつ、

珠姫ちゃん」

母さんの言葉に、ハツと後ろを振り向くと、やけに寝てこたはずの彼女がいた。

「気分はどうかしら、珠姫ちゃん」

「…大丈夫」

固まつた俺を放置したまま、母さんは彼女に近づいてこく。彼女も母さんに普通に返事を返す。

「か…母さん。珠姫つて」

珠姫といつ母さんの呼びかけに、固まつていた俺は反応した。だつて珠姫といえば…。

「あらま、嫌だわ。うちの愚息は珠姫ちゃんのことを忘れちやつたのかしら。小さなときからずっと一緒にいたの」「…」「忘れるわけがない！…ってか、珠姫なのか？」

おやむおやむ彼女に声をかけた。

彼女は首を縦に振る。

信じられない面持ちで彼女の…珠姫の動きを見ていた。

「そんな…」

「本当は帰つてきてからのお楽しみだったのよー。都けりやんたちのお仕事が一段落したから戻つてきたのよ」

母さんはケラケラと笑いながら叫ぶ。俺の動搖も氣にせず。とても母さんらしげが…。

「…」

一瞬殺氣を宿した目で母さんを見たが、すぐに肩を落とした。

母親にはかなわない。

そんなもんだ。

逆らうだけ無駄だと血のことを嫌と嘗つほど体験しているので、こうつとせは早めに諦めることが肝要だ。

「… 皇ひやん」

「珠姫…」

いつの間にやら…こや、俺が動搖している間に、近寄ってきた彼女が、俺をすぐ側で見上げていた。

先程までの彼女の行動が、珠姫だと分かれば全て納得できてしまつ自分がいることに少なからず驚く。

俺の心はもう彼女を珠姫だと認識してしまつてこりのだ。

「皇ひやん」

腕に絡んでくる珠姫の腕を享受しながら、母さんの方を向く。心が納得しても、やはつすぐには珠姫にじつ対応したらじよこのかと思つてしまつたから。

「 ところで、なんで母さんが迎えに来ているんだ」

「 それがね、都ちゃんたちすぐには帰つてこれなくなつちやつたのよ~」

片手を頬にあてて溜息をつく。

母さんのそんな仕草を見ていたら、その後にさりと爆弾を落とさ

れた。

「だから珠姫ちゃんを自分の間つちで預かる」とこなつたから

「は？」

「都ちゃんたちもそうしてくれると助かるって言つていたから。皇紀によろしくって」

「な…」

俺は銅像のよつこ固まつてしまつた。

「皇ちやんと一緒に

ギュッと手を握つてくる珠姫を、ギギッと首を動かして見る。
珠姫は心なしか…。

「珠姫ちゃん嬉しそうね。嬉しい？」

「嬉しい」

止めを刺された…。

「… そうですか」

額ぐ以外に何が出来ただろう。

「珠姫ちゃんは連れて帰ります。お世話になりました」

驚きを隠せない保健室の先生に母さんは挨拶をする。
かるうじて先生も職務を思い出したのか、慌てて頭を下げる。
どれだけ驚いてるんだろうな…。
かくいうオレも、人のことは言えないけど。

「じゃあ、行きましょう。皇紀も一緒に帰るでしょ」
「…ああ。でも抱取つてこないと。先、行つといてくれよ」
「分かつたわ。さて、珠姫ちゃん行くわよ」
「皇ちゃんと行く」
「あら、皇紀に付いていってくれるの？~ありがとうね~」
「おい、ちょっと待て…」
「じゃあ、先に行つて待つているわね」

わざと話を済ませて去つていつてしまつた。
相変わらずマイペースな人だ。

「…」

気付けば珠姫を置いていかれた。
…迎えに来たんじゃないのか？

いや、車で待つていいのだらうが、納得いかないのは何故だらうか。

「でさ、珠姫ちゃん」

「…」

「俺さ、生徒会長だし、困つたことあつたら力になるから」

「…」

生徒会室においてあるカバンを取りに行く道なりで高知の声だけがやたらと響いていた。話しかけても珠姫は何も返事をしないのに、話が途切れないのだ。

俺は感心していた。

珠姫は珠姫で俺の腕にベッタリだつた。

気まずいのは俺だけか？

「…高知」

「でさ」

「高知」

「なんだよ、邪魔するなよ」

「…」いつ、さつきまで保健室で寝てたんだ。今日はそれくらいに

しとけ

「…すまん」

「分かってくれたならいいんだ。それに着いたしな」

それが俺たち生徒会メンバーの根城だった。

「珠姫ちゃん…『じめんな。疲れているのに。…何かあつたらほんと何でもいいから言つてな』」
…」

やはり無言。

さすがに高知が可哀想になつたから、珠姫に声をかける。

「珠姫。高知が何かあれば力になつてくれるってさ。礼言つとけよ」
「…ありがとうございます。」
「…お、おう。まかしておけつて」

珠姫が視線を初めて向けたことに高知は興奮したのか、どもりながらも嬉しそうであつた。
よし、任務は完了した。
変な達成感を感じた。

ホッとしたのもつかの間、珠姫は更に言葉を続けた。

「でも、私には皇ちゃんがいるからいいです…」

ピキン

その場の空氣が一瞬にして凍つた。

(珠姫)~~~~~!~

心の中で悲鳴を上げる。

「た、高知…」

「…じや、じやあ俺用事思い出したから行くな！珠姫ちやん、皇ま
たなつ…」

クルリと180度まわって逆走していく高知の背を痛々しい田で見
送る。

どつぱりと疲れを感じた。

ため息が出るのを止められない。
いや、止めてくれるな。

「皇ちやん？」

「ああ…急がないと母さんが怒るな」

なんとか珠姫に笑いかけて、オレは、生徒会室ドアを開けるのだつ
た。

高校生活2年目に突入した初日。

俺のところに変化をのせた春風が飛び込んできた。

珠姫といつ名の春風が。

ついで、俺の2年目の高校生活は騒がしく、幕を開けたのだった。

「亜紀恵ちゃん、本当にじめんね～」

夕食が終わって、就寝するまでの間の時間。夫と共にテレビを見ていた富ノ内家の最強と名高い富ノ内 亜紀恵は一本の電話を受けていた。

亜紀恵の顔は始終笑顔だ。

そもそもそのはず、電話の相手は十何年来の親友で、珠姫の母の筒井 鶴だったからであつた。

「いいのよ～。鶴ちゃん気にしないで。全然迷惑じゃないかい？」

「そう？」

「ええ。それよりも、鶴ちゃんたちのほうは大丈夫なの？」

「大丈夫と言えば大丈夫なのだけれど、当分こちらのほうに話ないと
いけなさそうなの」

「あらあら。大変ねえ」

「本当！わたしもマコも仕事終わらせて『さあ、引越ししだ～』と思つたのに、馬鹿な新人が」

聞いてといわんばかりに鶴の言葉は止まりず、亜紀恵は相槌を打ちながら聞いていた。

「お気の毒さま。珠姫ちゃんのことは任せておいてねー。」「ありがとう、亜紀ちゃんーー。」

「うん。と、言つても、全部皇紀がお世話をしてくれるけどね。」

「それは想像通りとか…でも、皇くんに悪いわね。」

「いいのよー。皇紀が自分でしてることだもの。」

「とか言つて、どうせ珠姫がいちいち皇くんの側で何かするんでしょ?」

「ふふ。さすがね、澪ちゃん。」

「分かりきつたことじやない。珠姫は意識が生まれてから私たちより、何より皇くんが大好きなんだもの。」

「それにしては今まで音信不通だつたじやない。」

「それこそ色々あつたのよー。連絡入れる間もありやしないわ。」

「それも凄いわねえ。」

「ま、終わつたことよ。珠姫は皇くんがいれば大丈夫でしょ?」
といつが、皇くんのほづが心配よ。」

「やうねえ…皇紀もお年頃だから。」

「まあ、何かあつてもこちらは全然OKなんだけど」「あはは。本当に皇紀つてば好かれてるわねえ。」

「つづん。愛しちやつてるのよ。」

「ふふふ…そうね。」

「出来るだけ早くそつちに帰れるように頑張るけど、それまでお願いね。」

「ええ。任せておこで。皇紀は問題起じなかつたからちよつと物足りなかつたから楽しみよ。」

「そう言つてくれると助かる。」

「珠姫ちゃんは大丈夫。皇紀とわたしと皇輔さんで守るから。」

「うん…。あ。」

「ん?」

「今、珠姫は?」

「…それ聞くの?」

「やつ言わると余計黙あたくなつたわ」

亜紀恵は視線を2階と時計に走らせる。
お風呂は終わつてゐる。
それならば。

「じゃあ、教えてあげる。多分この時間だと皇紀は予習をしていろ
頃だから、構つてもらおつと皇紀の側をウロチヨロしてこらへしよ
うね」

「あは。ウロチヨロかあ…」

「あわよくば、皇紀の膝をゲットしと、まじりとでこるでしょうね

「ぶつ」

「可能性的には五分かしら」

「あら? 五分なの?」

「ええ。今のところは」

「…『今のところ』は、なのね」

「時間が経つたびに、珠姫ちやん優勢よ」

「…皇くん」

「ふふふ。やつぱり、皇紀も珠姫ちやんには弱いってことよ

「もしかして、珠姫的には今のこの状況つて望むべくも無い状況か

しら」

「やうかもね」

「ちょっとお母さんは複雑よ、珠姫…。マゴが聞いたり泣くわ

「ああ…真くんは泣くでしょうね」

クスクスと笑いが漏れる。

皇輔の視線がテレビから逸れて亜紀恵のまつやまへくるのをつい
ンク一つ。

それにやれやれといったように肩をすくめる。
そんな夫の行動にますます笑みを深くする亜紀恵。

「言わないであげたひつひ思ひせひ、じつむ運せむ思ひせひやひとでしよ？」

「ええ。マコの泣き顔好きだもの」

「悪い子ねえ」

「お互い様よ」

「あら、言つわね」

「言います」

「まつ」

「…」

「…」

「「ふひ」」

笑いが回線を挟んで弾ける。

笑いあひ声とテレビから流れてくる音だけが部屋の中を満たす。

「あはは。よく笑ったわ。そろそろ切るわね」

「ええ。何かあれば連絡して。いつも何か楽しい進展があれば連絡してあげる」

「それはぜひ。些細なことでも連絡頂戴」

「メールするわ」

「楽しみにしてる」

「じゃあね」

「おやすみなさい」

「おやすみなさい」

回線が切れた音が聞こえる前に、受話器を戻す。
電話が来るまで座っていた夫の横に戻る。

「やあ、奥さん。とても楽しそうだったね」

「ええ、田那さま。とても楽しかったわ」

茶田つ氣たつぶりに話しながらお互いの視線はテレビの画面。

「澪さんと真は相変わらずなようだね」

「ええ」

「当分帰つて来れなによつだね」

「半年はこつちに帰つてこれなそつだわ」

「大変だね」

「やうね」

穏やかな時間。

こんな時間は昔からずっと続いてるもので、それを壊すものはいない。

しかし、最近は。

「珠姫つ」

2階から微かに聞こえた皇紀の声。

それは多少怒つた声で、困つた声だつた。

「やれやれ…今日は随分皇紀が抵抗してくるようだな」

「そのようね。…皇紀つてば抵抗するなんていけない子ねえ」

「亞紀恵さん」

ソファから立ち上がり、今にも皇紀の部屋に突入しそうな姿を皇輔は止める。

「皇輔さん」

「皇紀と珠姫ちゃん2人のことなのだから介入は無しだよ」

「だって」

「ふうっと頬を膨らます亜紀恵の頬を優しくつづいて皇輔は優しい笑みを見せる。

「抵抗したって、最後には皇紀が負けるんだからいいじゃないか」

「…」

「亜紀恵さん？」

「はい」

少々不満そうな顔だが、突入は諦めたのか、皇輔の横に大人しく納まる。

さて、皇紀の意見的には母である亜紀恵が最強であるが、真に最強なのは誰なのか…。

一言言つならば、富ノ内家は夫婦円満だということだ。

こつして富ノ内家の夜は更けていくのだった。

カリカリカリカリ

じ――――――

カリカリカリカリ

じ――――――

カリカリカリカリ

珠姫

なあに？

肩に頭を乗せるのをやめてくれ

いや

…背中にもたれかかるのも

いや

…

お風呂からあがって、30分。

それぐらい経っていた。

いつものように水分補給をし、自室に戻って問題集を開ける。何冊目になるかはもう分からないノートに問題を[写]して解いていく。このほぼ毎日の行動に陰が射したのはいつ頃からか…。いや、皇紀には分かつていた。

珠姫が、富ノ内家に来たその日からだった。

肩と背中にかかる重みを無視して、問題を解くのを再開させた。ノートに書き込む音だけが皇紀の部屋を支配する。だが、それも数分のことだった。

「…重い」

ますます肩と背中へ重さがかかる。

これではさすがに勉強を続けられない。ため息を零して椅子を引く。

途端、背中の重みはなくなり、膝の上に重みが…。

「珠姫」

咎めるような声が皇紀の口から上がる。しかし咎められた張本人は聞く耳を持たないのか、べつたりと皇紀

の首の後ろに腕を回して引っ付いた。

その際、皇紀の胸板に頬をすり寄せるのも忘れない。

「…珠姫」

「…」

「まだ今日のノルマが終わってない」

「いや」

「…」

腕に力を込めてますます引っ付く珠姫。

皇紀は複雑だった。

「…珠姫」

「なあに？」

「今日…俺のところに『俺は筒井珠姫の何なんだ』と聞きに来た奴がいたんだが覚えているか？」

「ううん？」

「1人じゃないぞ。6人もだ」

「ふ…ん」

「…」

明確な返事が返つてこないことに肩を落としながらも、返事が返つてくるとも思つてなかつたこともあってそこまでの脱力感は皇紀にはない。

しかし、今日の出来事を思い出せばずつしりと沈むものがあつて…。

皇紀は今日の勉強を放棄することにした。

別に毎日しなければならないものでもない。

皇紀にとつてそこまで重要な時間でもなかつた。

「珠姫」

「なあに?」

「…もう寝るか?」

「皇ちやんが寝るなり」

さつきと違つて明確な返事が返つてくる。

それに突つ込んでやりたいと思いつつも、皇紀は机の上のノートと

問題集を閉じて珠姫を抱き上げた。

軽い身体にむくむくと心配がもたげてくる。

珠姫は食べる量が毎食少ないので。

皇紀はそれがとても気になつていた。

「珠姫」

「なあに?」

「もつとちやんと飯食えよ」

「皇ちやんが食べさせてくれるなり」

「…」

珠姫をベッドに下ろして横に置いてあつた布団を広げる。

ベッドが皇紀の物で、布団が珠姫の物だった。

本当は、珠姫の部屋も用意されているのだが、珠姫がその部屋を使つた試しなど無かった。

ただ、珠姫の荷物が置かれているだけだ。

皇紀が何度言おうと珠姫は皇紀の部屋にやつてきて、皇紀のベッドに潜り込むのである。

皇紀も数日は抵抗したが、父と母の「構わないだらう」の一言で抵抗する力を失つたのである。

だが、最後の抵抗として布団が運び込んだのだが、それを珠姫が使

うのはせいぜい皇紀が眠り込むまでだ。

朝気が付くと皇紀の横で、皇紀のパジャマの裾を握つて寝ているのだから布団が役に立つていいのかは怪しかった。

それでも皇紀は毎日布団を広げる。

皇紀の平穏のために。

「皇ちゃん

「なんだ？」

「珠姫は布団いらな。」しつちで寝る

「…分かった。俺が布団で寝る

「なら珠姫もそっちで寝る

「珠姫がベッドで寝るといつたんだろう？そっちで寝る。俺のベッドを貸してやるんだからこっちに潜り込むな」

「…

「珠姫？」

「…

「電気消すぞ

上掛けを引いて珠姫にベッドに寝るよつに促す。

のろのろとだが、間に入り込んだ珠姫に上掛けをかけて髪を梳いてやる。

現金なもので、珠姫の日がとろんとなる。

「おやすみ、珠姫」

「ん…」

もう一押しと、優しい声音を皇紀がかけるとゆづくつと瞼が落ちていった。

無言で髪を撫でる。

数十秒が経つて、ソッと細心の注意を払つて手を引いた。

「今日は成功か？」

ポツリと声を落として皇紀は息をつく。

久しぶりに再会した幼馴染は別れたときと変わらなかつた。
姿形がおとなびてこよつと、中身は相変わらずだ。
いや、昔よりもっと皇紀にべつたりとなつた気がする。
皇紀は再会してからそんな珠姫を受け入れながらも只惑わずにはいられない。

今の状態が異常だとひしひしと感じるのである。

亜紀恵は何も言わない。

皇輔も何も言わない。

皇紀は疑問でいっぱいになりながらもそのままだ。

だからと言つて、もう珠姫がいない生活とこののもじりへつこないだろうことも無意識に皇紀は理解していた。

眉をしかめることが毎日起じるつとも最後には諦めるよつて。頭を振る。

「俺も寝よ」

珠姫のために用意したはずの布団に潜り込み、皇紀は瞼を閉じるのであつた。

明らかに最近の俺は災難続きなんだろうと嘆息。

これでも生まれてこのかた17年、真面目に生きてきた自信があるのだが、いつも立て続けに災難に巻き込まれると、その自信も揺らぎやうだった。

事の起こうちは2年に進級し、面倒くさい生徒会副会長などに指名されてしまつたせいでかりだされた入学式だった。

何年もの長い間離れていた幼馴染にその入学式で再会した。

久しぶりに会つた幼馴染は、とても綺麗になつていた。

うちの生徒会長様に一目惚れさせるほどだ。

そして、その幼馴染は…俺にベッタリだつた…。

「富ノ内へ、ご指名だぞ」

「ああ？」

現在、昼休み時間。

母のお手製お弁当を食べ終え、少々気の置けない友人達と話している最中だった。

ちなみに今日のメニューは三色コロッケ。

うちの母親はそういうものに手を抜かないから毎食美味しく頂いてる。

「富ノ内」

「はい？…何か用でしょつか、先輩」

見覚えのない顔だが、ブレザーについている校章を見ると3年だと分かる。

桜ヶ丘高校は学年ごとに校章の色が違う。

現在は1年が緑、2年が青、3年が赤といった風だ。

まあ、まだまだ入学間もない1年生などはひょろりとしているから校章を見るまでも無いが。
ムキムキマッチョつてものではないが、なかなかの筋肉がついた男だ。

俺が席を立つ前に、俺を呼んだ3年は教室に入ってきた。
席を立つくらいの時間も待てないってどんなんだ？

「筒井珠姫のことだ。これで分かると思つんだが」

なんとも不穏なオーラをしじつて俺を見下ろしてくれる。
見下ろされているのは、椅子に座っているからだ。
身長は俺とそうかわらないはず。

3年の口からでた珠姫の名に、内心どつぶつと溜息をつく。

「『俺に聞け』ですか…」

「そうだ」

入学式から一週間。

日々絶えずして何かしら起きている。

…ほぼ9割がた珠姫がらみで。

あの1割は、珠姫がらみでの生徒会長様による。

あ…なんか一気に疲れが出てきた。

「…」

珠姫は類を見ないほどの美少女だ。
だからこそ、入学式以来ある誘いが絶えず…間を置かずくる。

そう…告白してくれる輩だ。

もう社会現象と言つてもいいくらいだ。
俺的に。

「富ノ内。筒井はお前に聞いてくれと言つた…どうしたことだ」

どういう事だと言われても…訳すと『断る』の一言だらつ。
いや、訳すまでも無いだろ…。

「どうこうこと言われましてもね…」

「お前の了承を取れば付き合つとこうとか？」

「…」

…なかなか自分に都合のよい風に解釈する輩だ。

あきれを通り越して頭が痛くなつてくるような気がして無意識か手
が頭にのびる。

友人たちもあきれた顔をしてそっぽを向いている。

出来れば自分の代わりに真実を教えてやつて欲しいと切実に思う。
しかしその望みは叶わない。

友人たちはそ知らぬ顔で俺の視線から逃れる。
…まったくいい友人たちだ。

「…おいつ」

痺れを切らしたのか、突然の闖入者たる3年生は俺の肩に掴んだ。
咄嗟に振り払おうとして寸でのところで一いつひきやる。
上級生とのトラブルは後々問題を残す。

…面倒だった。

その一言に呑れた。

「…先輩」

できるだけ穩便に…。

激昂せることなく退場を…。

「あんた馬鹿ですかね」

俺のやせやかな望みは叶わないよつだ。

俺がなんとか穩便に終わら^レそうと決意したその途端に、その望みが潰^レえるってどうよ？

ここって泣くところか？

泣いていいなら泣くぞ。

本当に。

続きを口にする前に、覆いかぶさるように後方から声がとんできた。聞きなれた、そしてこの時に一番聞きたくなかった声が。

「お前…高知」

我らが桜ヶ丘高校広報（？）担当、高知 奏。 桜ヶ丘高校全生徒の頂点、生徒会長様だった。

「高知っ！」
「お前は黙つてや」

一言の下に黙らされる。

友人たちに助けて欲しいと思ったが、何故ここで高知がでてくるんだ！

高知の援護をもうつべらになら自分ひとりで対応した方がましだつ

!!

「確かに空手部副部長の片畠先輩でしたよね」

「…」

闖入者 片畠が目を瞠っているのが見える。
生徒会長が自分のことを知っていたことについて驚いてるようだ。
しかし、高知にとつてこんなこと朝飯前だ。
必要なデータはきつちり頭に入っているんだろう。
さすがはというか、生徒会長様だ。

「俺がお答えしてさしあげますよ。珠姫ちゃん…彼女が言いたかつ
たことを」

意味ありげに笑いながら、高知はじつと自分を凝視する片畠を見分
しているのが分かった。

「お前が…？」

「ええ。彼女の返事は皇紀に聞くまでもありません。『NO』です」

キッパリはつきと高知は告げた。

見事だ。

本当に、いつそのこと見事だった。

ここまで場の雰囲気を考えず、結論を言つてしまつ高知にもはや言
うべきことは無い。

…拍手でも送るべきか？

「」

気が付けば教室には静寂が満ちていた。
みんなが注目してゐるよ。

「な……」

片畠は絶句して声が出ないのか高知を凝視したままだ。

「彼女が入学して一週間。告白した輩は数知れず……」

淡々と高知は喋る。

「……そして彼女の言う言葉決まって一言だけ。『皇ちゃんに聞いてください』……大抵の奴がこれを聞いた後、肩を落としました。分かります？これは彼女なりの断り文句です」

なんの感情もうかがわせず、高知は片畠を見ていた。
そんな姿は生徒会長として見栄えがいい。

……いつもこうだと助かるんだが。

「……し、しかしそれは」

「皇の言つ通りにする? ですか?」

なんとか声を絞り出した片畠は反論しようとしたが高知に遮られる。
てか、反論しようとしたその勇気は褒めてもいいくらいだ。
いや、やつぱり馬鹿だと言つたほうがいいか？

「彼女は信じてこます。……皇が自分の意にそわないことをするはずがないと」

少しだけ感情を抑えられず高知は喋る声を止めたが、ほんの数秒で、

誰も気付かなかつたと思つ。

：俺以外は。

「ツ……」

何も言わず片畠は2年の教室を出て行く。
人を射殺さんばかりの視線を高知と俺に送つて。
全然納得していないと気付いたのは、その視線を送られた俺たちだけだつたはずだ。

やつぱりひと悶着ありそうだ。
やだなあ……。

「…もう少し穩便に事を片付けられないのか」

どつぶりと重い溜息を吐きながら高知に文句をたれる。
それぐらいは許されるはずだ。
後のことを思うと頭が痛い。

「ああいう輩はキッパリ言つておいてやらないと分からぬさ。」

そうだが……てか、納得してなかつただろ？
あの視線で高知も分かつてゐるはずだ。
まあ、今ここで指摘する内容でもない。

平然と高知は答えながら周囲に視線をやる。
自分に視線が集中しているのが分かつてゐるだろうからの行動。

「鈍い男つてや～ね」

真剣な表情から一転、ニヤリと人の悪い笑みを貼り付けて高知が言う。

通常運行の顔だ。

緊張をはらんだ静寂がその途端破られる。

「高知君最高」！

「おーい、イイ男からカマ男に転向か～」

「は～い、ありがとや～ん」

瞬時に戻った喧騒に半ば感心しながら、俺はまだ気を緩めることが出来なかつた。

片畠の最後の視線が気になつて…。

新たな面倒ごとの予感をひしひしと感じた。

「珠姫」

「なあに?」

片畠が俺のクラスにやつてきたその日の夕食時。

食卓の上には今日のメイン、豚カツがドンと置かれており、大根サラダ、お味噌汁等、温かいご飯が並んでいた。

母さんの横、俺の正面の席に座った珠姫は食べる手を止めこちらを見る。

珠姫の頬つぺたにご飯粒が。

「…」ご飯粒がついてるぞ

話そうとしていた内容を横にどけて、ひとまずご飯粒について申告してやる。

「え?」

緩慢な動作で珠姫が口元に手を持つていくのを見ながらふつと力を抜いてそのまま手を伸ばす。

「そこじゃない。ここだ」

頬つぺたから、『飯粒をとつてやりながら珠姫を見る。珠姫はなすがままだ。

「ほひ

とつた』『飯粒を見せる。

すると、珠姫は何氣ない動作で『飯粒のついた俺の指を衝えた。

「一、ひ、ひ、

田を見張り、慌てて珠姫の口から指を救出する。

…『飯粒はない。

すでに珠姫の口の中だ。

『ほら、『飯粒がついてる』

『本當だ』

『いらっしゃー指まで食べちゃ駄目でしょー』

『へへつ』

…自分がこんなベタな出来事を体験する』ことなひとつとは思わなかつた。

それも立場的にどうなんだ？

普通逆じやないのか？

ギギギツと銜えられた指を凝視した視線を珠姫に戻す。

「皇ちやん、ありがと」

「…」

先に礼を言われてしまい、怒ることも非難することも出来なくなり、文句を言おうとして開けた口を閉じた。

「ラブラブね~」

のんきな声が珠姫の横から聞こえてくる。
やべつ…イラツときた。

「母さん…」

ギロツと睨むが、母さんは悪びれた様子も見せず「」飯を食べ続ける。
いや、それどころか「」と満面の笑みだ。

「亞紀恵さん、おかわり」

スッとお茶碗が母さんの前に差し出される。

「はあい。皇輔さん、軽く一杯でいいかしら~」

「ああ」

俺たちの状態など知つたことかといわんばかりに茶碗を差し出した手の持ち主。

父親の宮ノ内 皇輔が俺の隣で、ニースを見ながら「」飯を食べて
いた。

この2人、いまだに子どもの前でも気にせず前で呼び合ひ「ラブ」

（死語）夫婦だ。

物申してやりたい気もしたが、やり返されるのが落ちだ。家に帰ってきてまで精神的に疲れるのは嫌だ。

ここはスルーしておく。

そして、珠姫と『お詫』をするほうが先決だ。

「…珠姫、お前また相手を振るときに俺の名前出したな」

「あら、珠姫ちゃんモテモテね」

「珠姫ちゃんは可愛いから仕方がないな」

すかさず母さんが割り込みをかけ、父さんもこれといったコースもなかつたのが、会話に参加してきた。

「皇ひやんに聞いてじゃいけないの？」

首をかしげながら珠姫が聞いてくる。

可愛いな、おい。

…って、それどこのじやないだろ！俺つ…！

「その場で断れば済むだろ？が」

「まあつ！なんて事を言ひの、皇紀はつ」

珠姫ではなく母さんが反論していく。

つい食事の場でこの話題を出したのは失敗だった。

「もし、その場ではつきり断つて珠姫ちゃんに何があつたらどうす

るのーあんたは男の子なんだから別にかまわないでしょ」

：

……

……

理不尽である。

もう一度言おう。

理不尽である。

俺はこう主張したい。

その気が無いのなら無視してしまえと。

俺はこう言いたい。

話を聞いてやるにしても、人が居るような場所で話を聞けば最悪の事態は無いはずだと。

俺はこう思つ。

母さん、俺は本当にあんたの息子なんですかと。

くや、1日に2度も泣きたくなるなんておかしくないか？
さすがに、ここで本当に涙でも流そうものなら指を俺につきつけて
笑いそうなのが約1名いそうなので、しないけどな！

「…」

「皇紀」

「…なんだよ」

横に座る父さんがポンと俺の肩を叩いてくる。
視線をやると父さんは無言で頭を振った。
その意味するところは…。

「逆らつても無駄だよ」

妻に逆らわないのが富ノ内家円満の秘訣のようだ。

「くそ…」

なんとも釈然としない。

イライラとしながら服を脱ぐ。

身体の疲れに感じる。

心の平安を取り戻そうと風呂に入ることにした。

日本人ですから。

年寄りくさいとか突っ込みはいらないから。

「こ」の頃の俺つてついてなくないか?」

洗面所でシャツを脱ぎながら一人ごちる。

心なしか独り言が増えたような気がする。

ブツブツ独り言を喋るのはちょっと痛い気がする。

いや、かなりか?

脱いだシャツを洗濯機に八つ当たり氣味に投げ入れ、ズボンを脱ごうとベルトに手をかけたその時、何の応えもなく洗面所のドアが開いた。

「…」

珠姫である。

固まつてしまつた俺に驚きもせず、開いたドアの前で突つ立つている。

なんなんだ。

「…」

いつまでも続きをうな沈黙に終止符を打つたのは俺だ。
てか、そうしないと話が進まないんだ。
それに、いつまでも上半身裸じや風邪引くしな。

「何か用か」

「…」

「歯でも洗いに来たのか」

「…」

「…一緒に風呂に入るか？」

「冗談だつた。

はつきり言つておいつ。

本当にただの冗談だつた。

反応を返さない珠姫に、ちょっととした意地悪のつもつだつた。
しかし、俺は珠姫を侮つていたらしい。

「入る」

間髪いれず珠姫が頷いたのだ。

心なしか嬉しそうだ。

それに焦つたのは、冗談を言った俺だった。

「まてまてまて～！～？」

焦つて手を体の前でぶんぶんと振る。

今にも田の前で服を脱ぎそうな珠姫を押しとじめる。

行動が早すぎるぞっ！！珠姫！！？

そして恥じらいといつものを持つてくれ！

切実に思う。

「冗談だ！冗談！！」

そんな俺にやや不満そうな顔をして珠姫はじつと見つめてくる。

やや？

いや、大いに不満そうにだ。

「ほ、ほら。用がないなら居間にでも行つてろ」

「…用ある」

「…なんだ」

「一緒にお風呂入りたい」

「…」

脱力。

その言葉の通り、体から力という力が向け落ちていくようなそんな

錯覚を感じていた。

「…」

「… 分かった。でも着替えはどいつした」

目を逸らし、力なく言葉を口から搾り出しながら珠姫に問つた。

「取つてくる」

嬉々として洗面所から出て行く珠姫を見送つて、どつぶりとため息をひとつ。

そして音を立てずにドアを閉めてきつちりと内鍵をかけた。

「… これからは忘れずに鍵をかけないとな」

男である自分が、なぜ女のような行動をしなければならないのか。そう思いながらも、俺は胸にそのことを強く刻むのだった。

「閉め出された」

数分後、洗面所に続くドアの前で珠姫がぽつんと立っていたとか。

短い休息（一人の時間）を手に入れた。

身体を洗い、湯船につかる。

湯気を見ながらまつたりとする。

「今度……温泉の素でも置つてくるかな……」

口元して、それっていいなと想つ。

そう想つ反面、やはりなと想つ。

このままお風呂の魅力に取り付かれたたら、温泉マニアとかに近い将来なりそうな気がする。

さすがにこの年で渋すぎる趣味だと想う。

迫りくる危機が頭の中をちらついたが、今だけはと無視する。

……それだけ俺は疲れているらしい。

何とか気分を回復させることに成功し、髪をバスタオルで拭きながら居間にいる。

「皇紀一嘘はつこけやいかないのよ」

居間の出入り口を塞ぐべよひ、元立ちになつた母さんが待つていた。

「…」

浮上した気分がまた落ちそうになるのを感じながら、居間の入り口の壁に手をつく。

「…じゃあ何?…一緒に風呂に入れとでも?」

苦々しそうに口を開く。

まさか肯定なんかしませんよね?母上様?

「やつよ

やられた。

きつぱりはつ きつと母上様が肯定しやがつた。

問題ありだ。

なぜ、この人はこいつはつさりと断言できる?
今後のことを見つと、空恐ろしい物を感じる。

なんで子は親を選べないんだつ…いや、それは失礼か、親も子を選べないし。

そう考えるとうちの両親は全然悪い親ではない。

それどころか、いい親だ。

…あれ?なんか話がずれてるか?

「…」

あれこれ思考が空回りしている間も、母さんは色々と力説している。
それ以上返す言葉もなく、俺はそつと進路を変える。
廊下を進んで、台所に直接つながるドアから入る。
母さんはそれに気付かない。

「男に一言は無しよつ…」

母さんは一人、燃えていた。

「15歳の、他人様から預かっている娘と、17歳の息子が仲良く一緒に風呂に入ることのへの矛盾に気がつけ。てか、道徳観を持て！」

母さんに聞こえないような小さな声でぶつぶつと言しながら、俺は冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出して一気に飲み干した。自棄酒の代わりではない。

一応主張しておくが。

「『据え膳食わぬは男の恥』とも言つて」

俺の小さな声を拾つたのか、父さんがちらりとこちらを見て笑つた。

「……お預かりしている他所様の大切なお嬢さんに、息子が手を出して父さんはどうなんだよ……」

ますます脱力するものを感じながら、軽く父親をにらむ。

「それはそれ、これはこれだよ。『皇紀』

やつぱり笑つたままのたまう父親。
やべつ。イラッときた。

そして、言いたいことを言つて、父さんは見ていたテレビに視線を戻す。

…タンスのかどに小指ぶつけて悶えてしまえつ…！

「…」

口からは、もう何も言い出す気になれず、無言で台所を後にする。まだまだ続く熱い母さんの言葉を後ろに聞きながら。

自室のドアを開けるとそこには……珠姫がいた。

「……風呂は？」

何も言わず、こちらをじっと見つめる珠姫からソッと目線を逸らして口を開く。

珠姫がうちに来て数週間、気づけば自分の部屋に珠姫が居ることに驚かなくなつた。

驚かなくなつたといふか、なんて言つた……まあ……諦めたんだ。

諦観？

そんなもんだ。
驚くだけ損だ。

気力が減つていくんだから。

「明日朝入る」

返答を待つてみれば、お年頃の女子高生には相応しくない台詞が聞こえた。

夏場ではないとはいえ、それはちょっと…。

そう思つ俺は間違つてないはずだ。

「今、入つていい」

「…」

無言で応じる珠姫。

まあ、それも分からぬでもない。

先程の洗面所と同じよう、閉め出されるとでも思つて、部屋から出て行きたくないのだろう。

学習したようだ。

それは正しかつた。

あわよくば、1人の時間をもつと堪能したかった…。
ため息をひとつついて考え方を散らす。

最近はため息ばかりだ。

ああ…幸せが減つていいくつてか?

誰か、ため息の出ない生活を俺にくれ。

「風呂入つていい」

「…」

「鍵はかけずに出てやる

「…」

「髪も乾かしてやるから」

「入つてくる」

表情には出でないが、嬉しそうなのが分かる。
他のやつに分かるかつて？

多分…いや、きつと他のやつには分からないだろうな。

珠姫の両親と俺の両親を除けてであるが。

珠姫の喜びようを言い表すならば、尻尾があればあらん限りに揺れ
ていたことだらうつてここだらうか。

俺は、珠姫が軽やかに部屋を出て行くのを見送った。

毎日の「じ」とく一緒に寝る、寝ないで押し問答をしている。
最終的には、大半の割合で俺の負けで終止符が打たれる。
珠姫が居候となつたその日から毎日。

さすがにもう俺の部屋で一緒に寝ることについては諦めていたが、
毎日押し問答を繰り返すのは、そのまま受け入れてしまふはどう
かと思う俺の意地のようなものだ。

15歳と17歳の、血のつながつてない（つながつてたとしてもど
うかと思うが）男女が、一緒に寝るというのは普通、親が止めるは

すだ。

しかし、俺の両親は普通の常識では測れない人たちだった。

珠姫が我が家に来た初日、俺の部屋に居る珠姫に吃驚し、絶句し（パジャマに着替え、枕を抱えてベッドの上に座つていれば誰でも驚く！）、俺は部屋に背を向けて居間に戻り、母さんに言いにいった。だが、返ってきたのはありえない台詞だった。

「何が悪いの？」

驚愕である。

いろいろと言いたいことがあつたが、そのありえない一言に、言い募ろうとした言葉を全部封じられた（…様な気がした）。

その日はいろいろとあつた（入学式でのあれやこれ）ので、通常以上に疲れしており反論する気力がもう無く、そのままます「さう」と部屋に帰ってしまったのだった。

初日が肝心だったはずにもかかわらず、母さんの先制パンチにやられたのである。

…見事な右フックだつたぜ。

そして、珠姫は毎日俺のベッドに潜り込むようになったのである。これをなし崩しといふのではないだらうか…。

それでも、同じベッドは自分も男だからといふことで、頑なに俺は珠姫を拒み（男が使う言葉ではないと思われる。てか、ぜつたい違う！）、お布団一式をこいつも置くようになった。

「…でも朝起きたら…俺の横で寝てるんだよな

乾いた笑いしか出でこない。

俺は、どこか遠くを見つめながら、昔の平和の日々を思い出すのであつた。

「明後日の部活紹介なんだけど
「各部活には連絡済みだぞ
「

放課後の生徒会室。

桜ヶ丘高校は、部活動が必須というわけではないが、豊富な部活動
があることでも有名で、ちらほらと全国に名を連ねる運動部や選手な
どが居た。

そのため、一年生たちが学校に慣れたころを見計らい、5・6講時
目を使って部活紹介が毎年、生徒会主催で行われている。
なので、今現在、生徒会室はいつもの穏やかさを打ち破り、とても
賑やかだった。

その中でも忙しいのは生徒会長である高知 ではなく、何故か副会長である俺だった。

「会長！、昨日頼んでた資料は？」

「あ～？…ああ！皇に渡したよな？」

「…そのまんまな」

「やつてあるんだろ」

「…」

「…」

無言で机の上に置く。

「サンキュー」

礼を言いながらも、そもそも当然のように資料を受け取り役員に渡す高知。

高知の無駄にいい顔を無性に殴りたくなる。

殴つても許されるよな？

なあ？

そんな俺の不穏な空気を感じたのか定かではないが、高知はあつさりとその場から移動していった。

チツ

…舌打ちは見逃してくれ。

追いかけてまで殴る気力も無く、目の前に積まれた資料の山に向き合つこにした。

やる」となってはいた。

各部活の部活紹介の順番や、そのことによつて起るトラブルの仲裁。

決まつているはずの紹介時間を延ばすよつて言つてくる輩への対処。内容チェックもある。

極め付けが此度の部活紹介に対する書類の作成および、体育館使用におけるマイクや椅子などの各使用物関係について教師への根回しなど。

何故そこまでといわんばかりに後から後からやる」とが出てくるのだ。

これは当然のことだが、会長から指示の下、役員たちがそれぞれに動く体制が出来る。

そのはずなのにだつ！

全てに近い仕事が俺の下に集まり、俺の下から各役員に仕事が渡つていいくのだ。

なんつーか…うん。高知、殴らせう。

お前を殴れば全てがすつきりする気がするんだ。

そう思うのに、高知はのらりくらりとかわして…。

結論を言つと、高知に構つている暇があるのなら、とつとと仕事にかかつたほうがいいってことだ。

悲しいこと。

カタカタカタ…

パソコンのキーを打つ音が生徒会室に響く。

先程までの喧騒が聞こえなくなる。

過去の資料とパソコンの画面を交互に見ながら、提出書類を作成する。

カタカタカタ…

「

カタカタカタ…

「 う、皇つ！」

「！」

肩を揺さぶられてハツと画面から視線を引き剥がした。後ろを見ると、高知が呆れた顔で立っていた。どうも集中しすぎてしまつていたらしい。

「おーい、何度も呼んだんだぜ」「すまん」

一概に悪い癖とは思っていないのだが、ひとつのこととに集中してしまつといつ周囲の様子が気にならなくなってしまう。
昔、それで母さんに何度もなにかしに頭をはたかれたのはちょっとした幼き日の思い出の1ページだ。

最近はさすがに気を付けていたんだが、。

予想以上の仕事量に、つい癖が出てしまつていたらしい。

「で、なんだ？」

高知を見て呼ばれた理由を尋ねる。

しかし、高知は答えず、生徒会室の入り口のほうへ顎をしゃくった。
尊大な仕草だ。

そう思いつつも視線を入り口に向けるとそこには、。

「珠姫、」

鞄を胸に抱え立っている、珠姫の姿があつた。

「皇ひやん

珠姫の顔に笑みが上る。

それだけで、周囲がパッと華やいだ。

生徒会室に居た男共が、そうせり押むことの出来ない眼福に、全ての作業をそのままに見惚れる。

：確かに珠姫は可愛い。

男共を一瞬で魅了した笑みを湛えたまま、珠姫が俺の傍へやつてくれる。

「皇ひやん、帰ろつ？」

すぐ傍で小首を傾げて聞くその様は、偶然、俺の近くにいた数人の男どもを軒並みノックアウトするほどの威力を持つていた。

：どんな凶器だ？

「…」

そんな周囲の様子を呆れた眼差しで見回して、返事を待つ珠姫に視線を戻す。

残念ながら、俺にはこの攻撃は効かないのだ…

「まだやることが終わっていないから」

先に帰つてゐる という前に。

「じゃあ、待つてゐる」

珠姫は俺の横に折りたたみ椅子を取つてきて陣取つてしまつた。

すげえ強引だ。

なんていうか、オバタリアンも認める岡太さだと思つ。きっと、誰も俺の意見に同意してくれないと思つがな。

ははつ（乾笑）

「… 篠川はどうした？」

がっくりと肩を落としながら、珠姫の友達の名前を挙げてみる。

篠川綾香シノカラアヤカは珠姫のクラスメイトで、入学初日から何かと悪目立つ（俺的意見）した珠姫に、次の日に声をかけてきたらしい。

120

人伝に聞いた話になるが、声のかけ方からして凄かつたみたいだ。

：確かに篠川の台詞には俺も驚いた。

「あたし、べらべら喋る人つて嫌いなの。あなたなら口数少なそうだし、余計なこと言わないでしょ。それに、近くで見るなら断然可愛い子だと思うんだ。あなた色々と問題多そうだけど、助けてあげる。だから友達にならない？あたし意外とお得よ。てか、友達になつて損はさせないわ」

と、堂々とH.R前で人の多くいる教室で言つたことだった。

めでたく珠姫と篠川が友達づきあいを開始してから、俺も彼女に会う機会があった。

彼女と初めて会ったときの話はまたの機会があれば話そう。ひとこと言っておくとすれば、当分は忘れられないであろう出会いだった。

篠川は身長171センチ（珠姫から聞いた。てか、彼女が自分から言つてきたそうだ…）。

スレンダーな体型で、髪は短めでセッパリとしていて、女子にむてる系の美人といえる。

珠姫への誘い文句がちょっとあれ？だったのにも拘らず、女子の人気が高いのだ。

この学校つてM気質の人が多いのか？

…やべ。恐ろしい考えに至つたので、今の発言は無かつたことにしておく。

成績も上位のほうで、頭の回転が速く、珠姫のフォローが上手かつた。

確かに、自分で売り込むだけあって、お買い得物件といったところだった。

俺的には、珠姫にあんな友達が出来たことに未だに首を傾げたくない部分もあるのだが、なかなかいいコンビのようだった。

俺の苦労を少しだけ減らしてくれるから、俺からは特に文句はない。

「今のところは。

そのままよろしく頼む！」

「今日は用があるって帰った」

俺の疑問に答えながら、珠姫は俺の手元を覗き込む。見られて困るものでもなかつたので、したいようにさせる。それに、篠川の言つとおり、珠姫は余計なことはしないしな。

「そうか…。高知。テニス部と『真部の順番はどうなつた?』

「…」

「高知?」

珠姫の返事を聞きつつも、報告書類の束を片付けながら高知に声をかける。

が、返事が一向に返つてこない。

手元から視線を離して、高知の姿を捜す。

高知の姿はすぐ見つかった。

しかし、探していた人物は珠姫を見たまま手も顔も何もかもの動きを停止させていた。

ピキッ

額に青筋が出来たであろう音。

思わず、使っていたペンを投げそうになつて、さすがにそれは危ないと思い直して机に転がしてあつた消しゴム（小指大）を掻む。

「ここまで配慮した俺は偉いだろ？？」

おもつをま投げつけてやつた。

ポコンと間の抜けた音と共に命中する。

弱かつたか？

もつと持てる力を全て使って投げつけてやればよかつたかもしれん。悲しいことに機会があればそうしよう。

「あだつ！」

「仕事をしろー」この色ボケ会長つ……」

高知の悲鳴を聞き流して辺りを見やる。生徒会室に居た男共が全て同じ状態だとこいつことに気が付き、俺は目を細めた。

見れば、女子の視線も冷たく、色ボケた男共を蔑んだ目で見下しており、高知の悲鳴で正気に戻った男共は、女子の視線にそれぞれ顔を青くした。

女子の視線にちょっとゾクッとしたのは内緒だ。

俺が蔑まれたわけではないのにも拘らず、すごい威力だった。

「終わらなかつたら、お前らだけ残つてやれ」

女子の視線から目を逸らし、俺は言った。

「へたれとか思わないよ！」

俺をへたれとか思つ奴は、一度その目で見られてみるといひで主張しておこう。

生徒会室は、一気にゾンドリ地帯に突入してしまつたもようです。

言い捨てて、気付けば残り一枚となつた書類の整理に戻る。それもすぐ終わり、席を立つ。

いつちやなんだけど、今、生徒会室はめっちゃ寒い。
温度的にじやない。
精神的に、だ。

なんていうか…うん、心に優しい場所に移動したくなつた。

いい考えだ。

やうじょうへ

すべにじよつー。

「細川、立木、島岡、休憩しないか？」

真面目にやつていた女子軍に声をかける。

俺の言葉に視線をくれる彼女たち。

視線は元に戻つていたが、周囲に漂つ氣配は半端無い。
どもりそうになるのを何食わぬ顔と長年の努力と精神力をもつてし
て回避しつつ、口の端を上げる。

彼女たちもきりのいいところだったのか、各自持つていたペンなど
を机に置いて席を立つ。

もしかしたら、もうやつてられるかといった感じだったのかもしれ
ないが…。

先ほどの彼女たちの顔を思い出しそうになつて、慌てて記憶を消去
する。

あれは憶えていてはいけない記憶だ。

速やかに抹消しろ、俺。

俺は今後とも、彼女たちと円滑な関係を続けて行きたいと思つてい
るのだから。

「学食で飲み物でもどうだ?」

「そうね」

「いいですね」

「もうしましょ!」

3人はにっこりと笑つて同意してくれる。

3人の笑みを見ていたら、やつぱつさつきの田は… ゲフンッ!

オレハ、ナニモ、ミテナイヨ?

「…珠姫行くぞ」

「うん」

自分の思考に蓋をして、珠姫を促して生徒会室のドアを開ける。
その間、男共に口を挟む隙を許すことはしない。

女子軍を先に出して、出る前に中を見渡す。

無言でこっちは見てくる男共に、笑みを見せる。

どうこう訳か、この笑みを見せると、大抵の男共が固まる。

星埜先輩いわく、『凄味がある笑み』だと、前に言われた。
そう言つた星埜先輩自身は、楽しそうに笑っていたから、そこまで
この笑みに過大評価をするつもり無い。

しかし、実際に『凄味のある笑み(?)』を向けた先の男たちが少
なくとも固まるのだから、効果があるのだろう。
なので、使い勝手がなかなか良くて、ついつい習慣的に使つている
代物だつたりする。

まあ、使いすぎると効力もなくなりそうなので、使いどきは考
えていたりするが。

人つてもんは慣れる生きものだからな。

「俺らが帰つてくるまでに、そこにあるものは終わらせとけ」
「は、はい」

同じ年のはずなのに、奴らが敬語になる。

こういう反応を得た時は、笑みの効果があつたのだと思ひよつて
ている。

過去の実績?を振り返ればその通りだからだ。

「おい、皇」

「自分の分が終わつた奴は、後から来てもいい

高知の言葉を遮つて、言ひだけ言ひてドアを閉めた。

「誰が会長だと思つてるんだよ……」

その後、情けない声が生徒会室に響いたようだが、それは俺のあずかり知らぬことである。

皇紀視点ではありません。

食堂。

昼食という慌しい時間がかなり前に過ぎた学生食堂は、今とても穏やかな空気が流れていた。

桜ヶ丘高校の学生食堂は、実は珍しいことに夕方まで開いている。さすがに昼食時のような豊富なメニューは無いが、軽く摘めるような軽食や、甘いものが用意されていた。

数人の女子が窓際の席で甘い物を囲んでキヤイキヤイとお喋りをしたり、昼食だけでは足りなかつた欠食男子が軽食を口に運ぶ姿が見られる。

何代か前の生徒会長が、学校に掛け合つてこうなつた。

理由としては、遠距離通学をしていたり、色々な事情で友人との交流を上手く取れない学生たちの憩いの場所を作りたいとのことだったらしい。

他にも下手に繁華街で遊ぶなどの厄介ことに巻き込まれそうな行為をされるより、学校内で交流を深めてくれたほうが安全で管理しあく、問題が起らぬいのではという意見があつたとか…それはは

つきりと文書に残つてゐることではないので、生徒たちには知るはずの無いことである。

結局は、学校側と学生側の意見が上手いこと合致したことと、理事長のOKが出たこと（これが一番大きい）で、学生食堂は午後も開くことに相成つたのであつた。

そして現在。

「珠姫、いちゴミルクティーでいいか？」

「うん」

紙コップ式の自販機で、皇紀は珠姫のイチゴミルクティーと自分のモカラテを購入し、各自に飲み物を買った女子たちの座る席に移動する。

空いている席に、横に並ぶように自分と珠姫の飲み物を置いて、皇紀は珠姫を見た。

「ちょっと残り物のパン見てくる」

珠姫に座つてゐるよう視線をやり、一人売店のほうに向かう。

珠姫は、皇紀の言いつけを守つて、いちじるクティーの置いてある席に座る。

しかし、珠姫の視線は、ずっと皇紀の背中を追つたままだった。

そんな珠姫の一連の行動を反対側に座る細川、立木、島岡は、アイコンタクトを取りながらクスクスと笑いながら見ていた。

当然珠姫は気付かない。

というか、皇紀以外の人を気にしていらないのだろう。

しばしそんな珠姫の行動と、パンを物色しているだらう皇紀を交互に見ていたが、それだけでは満足できなかつたのか、口を開いた者がいた。

いや、3人が3人とも口を開いたのだ。

「…珠姫ちゃん、本当に富ノ内くんのことが好きなんだね～」

島岡はポツリと零す。

「とても微笑ましいです～」

立木もホワーンとした笑みを浮かべて同意する。

「副会長に「これといって浮いた噂がなかつたのはこうこう」とだつたわけね」

細川が落ち着いた口調で「つなぐ。

3人とも興味津々ではあったが、珠姫を困らせようといつ意図は無かった。

なので、口から出たのは2人に対する感想に近かった。

「違うの」

そんな3人に、珍しくも、珠姫が言葉を挟んだ。

3人は、珠姫が自分たちに話しかけてきたことに、軽く目を瞠る。当の本人である珠姫は、これまた珍しくも視線を3人に向けていた。これといった濁りの無い、森の奥深くに隠れるように存在する泉のようにと表現できそうなほどに澄んだ瞳。吸い込まれてしまいそうだ。

「…えっと、何が違うんですか~?」

何とか現実に戻った立木が、珠姫に返事をした。

「珠姫は皇ちゃんがとっても大好きなの」

□元に笑みを上らせ、恥ずかしげもなく告げる。
その顔のなんと可愛らしいことか。

3人は自分の頬が熱くなるのを感じた。
きっと…いや、絶対に赤くなっていると、思った。

「そ、 そ う な ん だ！」

「ほえ～、あてられちゃ いま し た～」

「かわいい」

男たちが騒ぐのも仕方がないと、妙に納得してしまった3人だった。

売店でパンをGETして、珠姫たけのとこに帰る。

ん?なんか様子がおかしい?

向かう先には珠姫の横顔。

そう、珠姫の横顔が見えるのだ。

え?おかしくないって?

そんなことは無い。

自意識過剰と言われそうだが、珠姫が俺を見ていないと、この状況こそが珍しいんだ。

珠姫は側に見える範囲に俺がいると、他の全てを放つて俺を見ている。

珠姫に用があつて視線をやると、いつも俺を見ているし、何より母さんからの情報だ。

確実だろ?!

別に見られて不味いことがあるわけでもないから放つてある。

いや、不味いことが最近あるか…。

この頃は高知とかに親の敵のように見られがちだ。
近々高知の目から血の涙でも流れるんじゃないかな?

…それは流石にじめんこつむりたい。

珠姫の習性? 習慣? なあの行動。

どうしたらやめさせられるんだろうか… 母さんに相談するか?

そんな無駄なことじてびつするー

きっと、いや絶対もつと悪い状況に陥る。

確信がある。

ああ…なんか目頭が熱いなあ。

「皇ちゃん」

俺が立ち止まっている間に珠姫が気づいたらしく。
嬉しそうに惜しげもなく満面の笑顔で俺を迎えてくれる。

「…ん？どうしたのか？」

対面に座っている3人の視線に気づく。
珠姫の横に腰を下ろしながら問うてみる。
珠姫ではなく、細川たちの様子がいつもと違う。

「い、いいえ、たいしたことじゃないわ」
「そうです。ただ、珠姫ちゃんは～副会長のこと～大好きだから
て話していただけです～」
「そうそう」
「…何の話をしてるんだ」

3人の言葉に呆れながら、紙コップに口をつける。

そんな俺の横では、幸せそうな顔をして、珠姫がこれまで紙コップに入ったイチゴミルクティーを飲んでいた。

モカラテを味わいながらひと時の休息を手に入れる。

やつぱり、学食に移動して正解だつたな。

一応、生徒会室にも日々のおつとめの合間の休息の為、紅茶やコーヒー類が用意されていたりする。

他にも生徒会役員が各自持ち込んだ菓子とか。これは生徒会所属のやつらだけの内緒事だが。

色々頑張っているんだから、これくらいはな。

今日に限っては、俺が持ち込んだ食べ物も生徒会室には無かつたし、購買の閉店間際の時間的に割引対象物になつたパンを物色したつてワケだ。

人気の惣菜パンはさすがに売り切れており、手にしたのはメロンパンだ。

甘いものも嫌いじゃないしな。

「珠姫、食べるか？」

「うん

「ほら

頷くだけ頷いて、口を開ける珠姫。

要望に応えて、一口大にちぎったパンを口に放り込んでやる。

「ここまで動作に淀みなどない
よくあることだからだ。

そんな中、対面に座る3人は、変な顔をして俺たちから目線を逸らすのが視界の隅に入った。

「なんか胸いっぱいです~」
「『駆走様』
「仲良いわね」

3者3様に頬がほんのり色づいていた。

何なんだ?この反応は?

「ん?」

珠姫も俺の変化に気付いたのか、首を傾げてくれる。
しかし、それだけだ。
もつとパンをくれと言わんばかりに口を開けるので、パンを放り込む。

疑問を感じてはいたが、これといって大きな問題ではないだろう。
そう答えをまとめて、俺はパンを咀嚼するのだつた。

食堂で休憩している間に他の生徒会員はやつてこなかつた。

どれだけ仕事溜めてんだよ…。

そろそろ戻つて仕事を再開せらるかといつ話になり、席を立つ。紙コップを燃えるごみ指定の「ゴミ箱に放り込み、視線を向ければ、細川たちも各自に片付けて集まつてきていた。ソッと様子を窺えば、ありがたいことに、もう先ほどの生徒会室での出来事は忘れたように珠姫を囲んで楽しそうに話している。

珠姫も細川たち3人に気に入られた様だし、一安心だ。

これからも生徒会室で会つこともあるだらうし、仲良くなつておけば、何か珠姫がやらかしたときに助けに入つてくれるだらう。

救済者は多ければ多いほうがいい。

俺的に。

それに、変に欲望持つた奴らに助けられた時が厄介であるからして、無償か、害がなさそうな願いで助けてくれる奴らのほうが断然いい。

打算ですまん。

しかし、これから何があるか未来予測が出来ない（出来たら凄い！）俺にとって、大切なことなんだ。

髪の毛を3人に弄られながらも気にせず俺を待っている珠姫を見ながら、俺は思うのだった。

さすがにそろそろ戻らないとやばい。

3人を促して学食の出入り口に移動する。

4人だつて？

いや、珠姫は俺が動けばついてくるからな。

出入り口で、俺たちと反対に入ってきた人物とぶつかりそうになり、横に避ける。

相手が通り過ぎるのを待っていたが、待てど暮らせど通り過ぎないので、訝しげに視線をやる。

（げ…）

視線の先には、数日前に教室に乗り込んできた上級生がいた。
名前は確か…片畠。
空手部副部長だつたな。

片畠は、数人を引き連れた形でその場に立っていた。

てか、こっちが避けて待つてんだから通り過ぎるよ。

ガタイがいいことから察するに、空手部の奴らだらつ。部活の休憩に残り物のパンでも買いに来たのだらう。

憎憎しげに俺を睨む片畠。

どっぷりとため息を心の中でつきながら、軽く頭を下げて横を通り過ぎようとした。

通り過ぎる寸前、横から言葉が落ちてきた。

「いい気なもんだな。女ばっかり侍らせてよ

「…」

反応しそうになつたのを辛うじて押しとどめ、その場を無言で去る。俺と一緒にいた3人も同様だ。

何度も言うようだが、珠姫はこんな奴らを相手にしない。てか、視界の隅にも入れてないかもな。

後ろからは盛大な舌打ちが聞こえてきたが、それも無視して食堂を後にした。

「何あれ

「男の僻みつて嫌ね」

「間違つても、あんな男の人には侍りたくないですよ」

食堂から数メートル離れたところ、女性軍の口から視界の隅から片
煙が消えるまで我慢されていた言葉が次々に紡ぎだされる。
これはあれだ。

女性軍をしつかりと敵に回したらいい。

同情なんてしないがな。

「珠姫」

「なあに」

「当分一人で歩き回らないうちにしどけ」

「うん」

俺を憎憎しげに見ていたあの男。

珠姫を視界に入れたときにねつとりとした視線に変えたのだ。
あの視線を見たときに、まだ珠姫を諦めてないと確信した。

ああいう輩は気をつけないと危ない。

頭の隅で赤信号が点滅しているような気がした。

これは勘だが、警戒しておくに越したことはない。

(…高知にも言つておくか)

田まぐるじく今後の展開を考えながら、生徒会室に向かつ。

ソックと手に差し込まれた珠姫の手を、無意識のつむじにしつかりと手
に握りながら歩いた。

生徒会室に入ったときに、それを嫉妬に荒れた高知に指摘されるま
で、俺は珠姫の手をしつかり握り締めるのだった。

夕飯を食べて、風呂に入った後の寝る前のひと時。
俺は両手を後ろに組み、枕代わりにしてベッドに寝転んでいた。

珠姫はお風呂である。

ボウッと生徒会室での高知との会話を思い出していた。

「学食で片畠に会った？」
「…仮にも先輩だろうが」「
「尊称なんて付けたくないね。どうせお前だって心中で呼び捨てだ
ろうが。いや、そんなことよりも…だ。今の問題は、あの野郎が珠
姫ちゃんをまだ諦めてないってことだよ」

「ああ」

「まあ、あれくらいで諦められるほど珠姫ちゃんくらい魅力のある女の子はそういうのないからな。驚く」とではないわな…。しつかし、空手部か…ちょっと厄介だな」

いつも快活な男が珍しくしかめつ面で上を仰ぐ。

「高知？」

「ん…最近なんだが、空手部がきな臭いというか、荒れているといふか…ぶつちゃけて言つと、部長と副部長の仲が険悪らしいんだわ。前々からそんなに仲は良くはなかつたみたいなんだが、4月入つてからの指導方針ての？意見が分かれたみたいなんだよな」

「指導方針？そんなものは大体、顧問の先生の仕事じやないのか？」
「ううん。数年前まではそれなりの段もちだつた先生が仕切つてたらしいんだが、その先生が異動して、顧問の先生が代わつてから今

の形らしい」

「今つて…誰だ？」

「内山先生だな」

「ああ…あの先生じや、指導は無理か」

「そういうことだ。内山先生は、運動系はからつきしだからな。…どうして空手部の顧問になつたのか理解できん」

「…で？」

「ん？ああーなもので、その年々の部長と副部長が部を引っ張つていつているというのが現状だ」

「ふむ。最近の空手部の戦績は？」

「選ばれるだけあって、部長、副部長はそれなりの成績持ちだな。あと参謀つぽいのがいたか？」

「参謀ねえ…ちなみにそいつはどっち派だ？」

「部長」

「…部長は誰だ？」

「覚えとけよ、副会長様」

「覚えるから今聞いた」

「…はあ。本条怜一^{ほんじょうりょういち}先輩だ」

「あの人か」

「そうだ。あの本条先輩だ」

言われてみれば、顔を思い出せる人物だつた。ガタイがよくて、顔もそれなりに整つてるので、女子に人気な1人だ。

言葉で語るよりも、行動で示すような人なので、無口な部類の人だろう。別に人付き合いが悪いような人ではなかつたが、広い交友関係をもつ人ではない。

確かに、彼をサポートするように横には常にある人物がいたことを思い出す。

あれは確か…。

「菱目川先輩か」

「お。そうそう! その菱目川先輩が参謀」

高知から返事が返つてくる。

そうか、あの人参謀ね。

確かに、本条先輩がいて、あの菱目川先輩がいるなら彼は参謀役だろう。

あの人本条先輩のサポート役だ。

腐れ縁で、小学校から一緒だつたか? ちょっと情報があやふやだな。

学食での出来事を思い出す。

確かにあの時、本条先輩は一緒に居なかつた。

ようやく思い出してみると、一緒にいた奴らは空手部部員のようだつたが、柄の悪そうな奴らばかりだつた。

偏見かもしれんがな。

「3日後にはオリエンテーリングだからな…『タタタタは勘弁だな』
「そりなんだよな。部活紹介だから、奴らも関係してくるし」
「当面は、珠姫には1人にならないように言つてある
「おつ…周りの奴にも気を付けてくれるよう注意でも促しておぐ
か」

オリエンテーリングさえ終わればどうにかなる。

それは裏を返せば、オリエンテーリングが終わるまでは、こいつらも対処のしようが無いということだつた。

「……あいつは使いたくなかったんだが……背中に腹はかえられないか」

ブツブツと呟いている高知に視線を向けると、とても不本意そうな顔で見られる。

何だ？

何か気に障ることでもしたか？

いや、してない！（反語）

「忍を駆り出さうと思つ」

「忍？……ああ、お前の弟か。あれ？弟、ここに来ていたのか？」

「そうだ。言う必要は無いと思っていたからな。クラスは違うが、珠姫ちゃんと同じ一年なんだから、彼女の周囲に気を配るより云えておく」

「いいのか？じゃあ、珠姫に顔合わせしとかなきやな」

「いや、顔合わせは必要ない」

「そんな訳にはいかないだろ？が。何かあつたときに顔合わせしとかなきやどうにもならないだろ？」

「……忍は珠姫ちゃんのことを知っているから大丈夫だ」

「そつちじやない。珠姫の方が知らない奴には近づかないし、無関心なんだよ」

「その方が、都合がいいんだが……」

「何を言つているんだ？」

「…」

「おい」

「…」

「高知！」

「分かつた！分かつたよつ！…明日昼休みに生徒会室で顔合わせさせよう！…！」

「？」

怒つたような顔で喚く高知を、エイリアンを見てしまったような面持ちで見てしまう。

高知が何を考えているのか全然分からなかつた。

そこで話し合いは終わつたのだった。

バタン。

ドアが閉じる音で、意識を今に戻す。案の定、部屋に入つてきたのは珠姫だ。

入つてきた珠姫を見て顔をしかめる。

「…毎日言つているが、髪の毛をきちんと乾かして来いつて言つているだろ」

風呂上りで、明らかに髪が濡れています。と、見える珠姫にため息が落ちる。

いつものことだが、珠姫は髪を乾かしてこない。風邪を引くとか、髪が痛むとかそういう理由より、もつと俺にとって切実な問題があった。

「そんな濡れた髪で横に寝られる俺の身にもなつてくれ」

そつこひことだ。

これつて地味に辛いんだぞ！
何度も夢の国から帰ってきたことか！－

「…」

田に見えてショーンと落ち込み、悲しそうな顔をする珠姫から田を逸らす。

じーっと見られていることは分かっていたが、見ない振りをする。

「髪を乾かしてこい」

ドアのほうを示してやる。

しかし、俺の求めに応えず、その場に立ち去く珠姫。

数秒だったのか、数分だったのか。

結局のところ今日も白旗を揚げるのは俺で。

「分かった。乾かしてやるから」ここに来い

「…」

嬉々としてベッドに座った俺の脚の間に腰を落ち着けた。

首に掛けられていたバスタオルを手にとつて丁寧に水分をとつてい

く。

こりしておくと乾きが早いのだ。

とれるだけ水分をとつて、身体を伸ばしてベッドのサイドからドライヤーを取り出した。

ここに常備されるほどで、珠姫の髪の毛を乾かしている事実に、物悲しさを感じる。

そんな俺を他所に、珠姫は気持ちよさそうに身体を預けきつてきた。

…冷たい。

「そうだ…珠姫、明日なんだが、昼休みに生徒会室に来てくれるか

「うん、分かった」

「篠川と一緒に来いよ」

「うん」

「篠川がもし都合が悪くて、一人だったら、そのまま教室にいくぐれ。迎えにいくから」

「ん」

温風に髪をさらしながら、優しく梳く。
気持ちよさそうに手を細めている珠姫の姿が、さながら猫のよみこ
見えた。

「終わったぞ

」

「不満そつな顔するな。終わったもんは、終わったんだから

」

「…寝るが

」

ドライバーを片付けてベッドに乗り上げる。

わざと寝ようとしたベッドに潜り込むと、スルリとお布団に入りこむ熱。

面倒くさくなつて、何も言わずに田を開じた。

同じシャンパーの匂いがすると困ったのを最後に、俺の意識は沈んでいった。

読んでくださった方、ありがとうございます。
皇紀と珠姫の幼いころの話を急に思いつき、書き始めました。
よければ、そちらのほうも読んでいただけたらと思います。

「珠姫ちゃん来ないな」

生徒会室の唯一ある入り口を熱心に見続けたまま、椅子に腕を預けて高知は言った。

高知の横には、そんな高知を意味ありげに見下ろす、見るからに入りたてですといった卸したての制服を身につけた高知の弟が立っている。

「まだ昼休みが始まつて5分も経つてないんだが…」

こちとら、4时限目の鐘がなると同時に、引っ張られてきたのだ。なんとか弁当を掴んでくることに成功したが、中がシェイクされていそいで、開けるのが少し怖い。

グチャグチャになつていたらどうしたらいいんだ…。

きっと今、恨みがましい目で見てしまつていることだろうが、当の原因である高知は、生徒会室の扉を熱い瞳で見てているわけであつて、

俺の視線に気付くはずもない。

それを楽しそうに見ている高知弟。

「あれ？」

そうなると、高知弟も4間田のチャイムが鳴つてすぐにここへ来たところになるとになる。

俺らと変わらないくらいにここに来たよな？

高知は弟に無茶な命令でもしたのか？

「高知弟、今日はすまないな。それと、協力感謝な」

「忍と呼んでください。それに、構いませんよ。それどころか、こちらが感謝したいくらいです」

「？…それじゃあ、忍、これからよろしく頼む」

「いえ、こちらこそ末永く」

にっこりと笑顔を向けてくる高知弟…忍に何か引っかかるものを感じたが、スルーすることにした。

最近スルー能力が上がってる気がする。

近いうちにパラッパラッパラ…とかつてレベルアップすんじゃね？

何故か高知が熱心に扉に向けていた視線をこちらに向けていた。とても忍々しげな目だった。

今回協力してもらつたために、何か取引でもしたのか？

珠姫のために「」苦労なこつた。

いや、「」は感謝するといふか…後で珠姫にお礼を言わせよ。

結局、そこから5分ほど待つたが、来る気配がないので、教室まで迎えに行くことにした。

高知と忍を置いて。

これは当然だよな。

しかし 。

「一緒に行く」

「お供しますよ」

2人ともついてくると言つたが、「」で立つわけにもいかない。そう言って、置いてきた。

だつてそうだろ？

何のために生徒会室に集まつてると思ってるんだ。

片畠に目を付けられたら厄介だ。

俺は正しい！

「田立つってお前もだろ？」

高知がこんな風に零していたが、ワケが分からん。

いや、そりゃあ副会長をしている身として、少しあは認知しておいてもらわなければならないが、高知に言われるほどではないはずだ。それに、俺は珠姫の幼馴染だつてことも知られているはずだ。

まあ、上級生が下級生の教室に行くのだから、どうしても悪田立ちはしてしまうが。

それぐらいだろ？

そう言つたら、2人同時のタイミングでため息を吐かれた。なにやらムカついたので、高知の頭をはたいておいた。

後ろで悲鳴が上がつたような気がしたが、取得している（本当にいつの間にだ！）スルースキルを最大限利用してやつたわ！！

1年の教室への最短ルートを進みながら、俺は生徒会室でのやりとりを思い出す。

ああ…思い出すとイラッとするな。
もう一発入れてくれればよかつた。

思い出していた間に、あつといつ間に1年のテリトリー内に入った。
2年が1年の教室の廊下にいれば悪目立ちする。

しかし、今は昼食真最中だ。

学食を利用する者は多い。

教室には半分居れば多いいほうだ。

それに、廊下を歩いているやつも突発的な用事（用足しだろ…突つ込んでもくれるなよ）で出た奴くらいで、まばらだ。

ちょっと廊下側に面した生徒が気づいて皿を蹬つたり、何かこじらかを盗み見て「ソソソソ」しているくらいだ。

うん、問題ない。

1 - F

ここだ。

前のほうの出入口から顔を覗かせる。

ザワツ

ん? 今変じやなかつたか?

… 気のせいだな。

見渡せば、すぐに珠姫は見つかった。

「は?」

そして、その横には篠川の姿が…。

おい、なんで居るんだ?
てか、なんだ。

あのいい笑顔は。

「…珠姫」

「皇ちゃん!」

意志の力を総動員して珠姫を呼べば、笑顔で珠姫が席を立て寄つてきた。

それに続く形で来る彼女。

変わらずいい笑顔だ。

「こんにちは。宮ノ内先輩」
「やあ…珠姫が今朝…君に何か言わなかつたか?」
「ええ。聞きました。」
「…なんと?」
「今日は昼休みに生徒会室に行くと」
「ほう?」
「そして、一緒に来て欲しいと」
「ああ」
「待つていれば、宮ノ内先輩が来てくれるつて」
「…」

「これはどういう意味で捉えればいいんだ?」

珠姫が、俺が迎えに来るからと言つたのか?

それとも、行かずに行つていれば、俺が迎えに来ると言つたのか?

…

.....

.....

うん、深く考えるのはやめておこう。
時間は無限ではない。

昼食を食べる時間がなくなってしまう。

それに、なにやら人の視線が痛い。

時間が経てば経つほどに痛いのは何故だ？

「そうか。……遅くなつてすまない。出れるか？」
「はい、大丈夫です。」

お弁当を前に掲げて頷く姿が視界に入る。
頷き返して、1-Fの教室に視線をやる。

全ての視線がこっちにあつた。

：

「すまない。昼食の邪魔をしたな」

何も言わないで去るのも失礼なような気がして一言口にして、踵を返した。

うん。聞こえない。

後ろで何やら声が上がった気がしたが、俺は何も聞いていない。

キイテイナイヨ?

珠姫に文句を言えばいいのか、篠川に苦言を言えばいいのか?
分からなくて、黙り込んだ。

「珠姫の富ノ内先輩つて人ができるわね
「うん」

後ろで聞こえる声にもノーコメントだ。
いや、言えるのなら『珠姫の』つてなんだと突っ込みたい。

そして、何故珠姫は突つ込まないんだ！

…珠姫が突つ込む？

やべ。ありえないな。

まだ後ろの2人は喋っている。

しかし、ここには『忍』の時だ！

そうー耐え忍ぶ時なのだー！

そつ心に言い聞かせて歩けば、あつという間に生徒会室に着いた。

「待たせ」

「ここにちは！珠姫ちゃん！ー！」

「お待ちしてましたー！」

「…」

生徒会室を開ければ勢い込んで口を開いた2人組み。

「宮ノ内先輩ファーグイト！」

「応援どづも…」

すぐ後ろからの篠川の応援に力なく応えた。

「じゃあまずは自己紹介からするか？」
「あら。私、みんな知っていますよ？」
「ふむ。確かに俺も篠川さんのこと知ってるよ」
「俺もです」

高知の言葉に、篠川が答える。
そうすると、高知兄弟が頷く。
と、言つことは、顔合わせしておかなきゃならないのは
。

「珠姫」
「なあに？ 皇ちゃん」
「高知の弟の忍だ。覚えておけよ」
「分かった」

よし、これぐらいだな。

1人納得して、さすがにお腹がすいた俺は弁当を広げることにした。
珠姫も俺に続いてお弁当の包みを開く。

「まつ、待つてくださいっ！」

…ランチタイム突入はまだらしい。

視線を向けると、いやに楽しそうな高知と何故か焦る忍。
そして珠姫の隣でお弁当を広げながら口の端を上げる篠川。

「どうした？詳しい内容については食べた後にしようかと思つてた
んだが」

「そ、そうじゃなくて…」

「いや～さすが皇！期待以上の反応だ」

「素敵です。宮ノ内先輩」

「？」

ワケが分からん。

「あのつ…自分でた…筒井さんに挨拶したいのですが
「ああ…すまん、気が利かなくて」

そうこういふとか。

忍は礼儀正しいやつだつたようだ。

それじゃあ、あんな一方的な紹介は氣にして当然だよな。

納得がいって、珠姫に声をかけた。

「珠姫」

「?」

「挨拶」

「ん。筒井珠姫です」

「…高知し、忍ですつ。 同い年なので、これからよろしくお願ひします」

「よろしくお願ひします」

ペコリ

小さく珠姫が頭を下げる。

それに忍も慌てて頭を下げる。

ん? 顔が赤いな。この部屋暑いか?

ああ、窓開けてないな。

「皇ちゃん」

換気をしようと席を立とうとして、袖を引かれた。
見てみれば珠姫がジッと俺を見ている。

これはあれか。

「よく出来ました」

言葉と共に頭を撫でてやつた。

嬉しそうに珠姫が口元に笑みを刻む。

キチンとできたら褒める。

これが子どもを育てる口うしだ。

挨拶は基本だからな。

…なんか、俺つて珠姫の親みたいだな。

年齢詐称はしないぞ！

俺は正しく、高校2年在籍の男子だ！！

「なんていうか…」

「言つてやらないでくれ…後生だから」

「…」

篠川と高知の声。

俺と珠姫を残して話が進んでいる。

意味は分からなかつたが。

もうランチタイム突入してもいいよな？

モグモグモグ…

「今週から学食の甘味メニューに、パフェが増えたんだよ。よければ今度一緒にに行かない？俺奢るよ！」

「それよりも近くに美味しいお茶を出す喫茶店が出来たと聞きましたよーお茶はお好きですか？」

「…」

モグモグモグ…

頑張るなあ…。

というか、 そ う か。

忍は高知と同じってことなのか。

兄弟つてもんは好みが似るのか？

お互いを牽制しながら、 2人は一生懸命珠姫を誘っている。

しかし悲しいかな、 珠姫はそれを歯牙にもかけない。

それも誘いが食べ物系ばかりだ。

高知兄弟は珠姫を太らせる気か？

確かに、珠姫はもつと食べたほうがいいのだが。

珠姫が食べ物に釣られるつてことはないと思つぞ。

じゃあ何なら釣れるのかつて言われても答えられないけどな。

俺にはよく分からん。

うちの母親にでも聞けば分かるかもしれんがな。

高知兄弟のお誘いの嵐（？）をボケーッと見ながら、お弁当を食べる。

シェイクされて心配された中身は奇跡的に原型を保つていた。
喜ばしいことだ。

そして、命拾いしたな、高知よ…。

玉子焼きを口にしようとした箸で摘んだところで、袖を引っ張られる。

犯人（？）は珠姫だ。

「…」
「…」
「…」
「…」
「口で言へ」

無言で俺に訴えてくる珠姫にこりりも無言で対応したが、声は上がらない。

時間も惜しくて、こちらから口火を切つた。

珠姫が何を求めているかななど分かつてはいたが、不精は許さん。

言葉を使え、言葉を！

何のために声や言葉があると思つてゐるんだ。

「玉子焼き」

「玉子焼きがどいつした？」

「玉子焼きが欲しい」

「で？」

「ちようだい」

よし。よく最後まで言つた。

……だが、断る！

食べ盛りの男子高校生の食料を奪おいつとすることは鬼の所業だぞ、それはつ！！

と、思いつつも、じーっと玉子焼きをやるまぢづつと珠姫は見つくるだひづ。

そうするとだ！

絶対、高知の視線（玉子焼きくらい珠姫に捧げるといつ物言わぬ視線だ……）が俺に突き刺さるわけだ。

どんな試練だ。

：

……

………… そひひま、俺の玉子焼きよ。

心弱き俺を責めないでくれ。

「ほり

揃んでいた玉子焼きを弁当箱から持ち上げる。
すると、珠姫の口が開いた。

待て。

慌てて俺は玉子焼きをお弁当箱に戻す。

玉子焼きを半分に箸を使って割る。

そして 。

パクリ

「美味しいか？」

「ん」

モグモグモグ

咀嚼の音が聞こえてくる。

「…」

無言で口を開ける珠姫。

残った玉子焼きを口にもう一度放り込んでやる。

モグモグモグ

ああ…さらば。俺の玉子焼き…。

珠姫の血となり肉となり、身体のすみずみにいきわたればいいからっ
！！（ヤケ）

横合いから高知の声。

「何をしているんだ…畢…」

なんだ？

微妙に声が揺れているが。

「何つて珠姫が玉子焼きをくれといふから」

「いやいやいや！」

「？ああ！半分にしたとか？さすがに珠姫の口にそのままのサイズは入らない」

「をいつ！？」

「うるさい。食事も静かに食べれんのか、お前は」

まつたく。

何が言いたいんだ、この男は。

その横を見ると、忍が固まっている。
笑顔で。

…ちよつと怖いぞ。

「本当に素敵です。富ノ内先輩」

華やかな笑顔つきで褒めてくる篠川。

「ありがとつ？」

何を褒められたのかは分からぬが、お礼は言つとくべきだよな？

褒められた時は。

「富ノ内先輩」

「何だ？」

「はい。実は、駅の近くにパフェ専門店があるんですけど、そこに珠姫と一緒に行きたいなって、話をしていたんです」

「へえ？」

珠姫が寄り道ねえ？

珍しいこともあるもんだ。

珠姫は基本、家と学校を往復するだけの日々を送っている。今まで誰かと何処かに寄つて帰るなんて行動をしたことがない。出掛けるといえば、家に帰つてから母さんに上手いこと説い出されて買い物に出掛けるくらいだろう。

夕飯の買出しだとか、ショッピングに行つたりとか…な。

珠姫が母さんの都合のいい玩具扱いみたいに見える。

言い方は酷いかもしねないが、本当にそんな風なんだぞ。

だつてなあ…この前、母さんが、

「皇ちゃんは男の子だつたから、こんな風に着せ替えとかさせてくれなかつたのよね～ やつぱり女の子はいいわね～」

なんて言つてたんだぜ？

俺も珠姫も母さんの玩具じゃないつてーの！

つと、思つたわけだが、珠姫はこれといつて嫌だつたとか言わなかつたし、それどころか、いろいろ試着して選んだといつ一品を、学校から遅く帰つてきた俺の前でぐるりと回つて披露してくれた。

…あれは珍しい光景だつた。

珠姫が服の端を揃んで、はにかんだあの姿は。

ついつい呆けて、母さんに「何とか言え」つて新聞紙を丸めたもので叩かれるまで固まつてしまつたのは記憶に新しかつたりする。

…うん。脱線してしまつたが、なもので、珠姫が自分から興味を示すつて言つのは珍しいつてことだ。

…

本当に、母さんはじつは珠姫を動かしているんだが？

「いいんじゃないか？」

この前のことを回想しながら、篠川の言葉につなぎた。

「皇ちゃんも」

「は？…俺もか？」

「ええ、ぜひ。実は食べたいパフェっていうのが、特大パフェで、2人じや絶対食べきれないんです」

「そつか…」

パフェねえ…。

まあ、甘いもんは嫌いじゃない。

それに、今は2人で行かせるのもまずい。

そうなると答えは決まってくる。

一緒に行くか、片畠の問題が解決するまでやめさせるか。

だが、そこまで珠姫の行動を制限するのもいかがなものか。
それこそ、珠姫が珍しくも友人とパフェを食べに行きたいと言つて
いるのだ。

それはいい傾向だと思う。

ならば、言えることはひとつだけだ。

「篠川は俺が一緒に構わないのか？」

「いや、それが珠姫を誘い出すための餌 んんっーはいっぜひ！」

来てください！！

ん？

何やら篠川が小さい声で言ったような気がするが、聞こえなかつた。だが、力強く頷かれて、決めた。

「それじゃあ、行かせてもらうか。でも、オリエンテーリングが終わるまでは待つてくれるか？オリエンテーリングが終わるまでは、生徒会の仕事が立て込んでいて、手が離せないんだ」

「はい。それはもちろん！」

「口一々と頷いてくれる。

てか、笑顔の大安売りだな。

篠川の笑顔もお高いはずだと思つてたんだが。

男女共に人気だからな。

いくらか女子のほうの人気が高いらしいが。

「珠姫、よかつたわね。一緒に行つてくれるつて

「うん。嬉しい」

おお。こつちも笑顔だ。

反対側では高知と忍が首まで赤くして固まつてゐるし…。

珍しい顔ばかりでなんとも。

俺も何か変な顔でもするべきか？

「ご飯も食べ終わって、お茶でまつたつと一服中。

昼休みが終わるまであと20分弱。

十分だ。

「わざわざ今日ここに集まつてもらったのは、珠姫のことで頼みたいことがあるからだ」

「何かあつたんですか？」

篠川が聞いてくる。

忍はもう高知から聞いているのだらう。口を挟まず、傍観姿勢だ。

「篠川は片煙 先輩を知っているか？」

おつと。もつちよつとで呼び捨てにするところだった。高知のこと言えねえな。

「片煙先輩ですか？… ああ」

遠くに視線をやるその姿から、記憶を探つてゐるのだつたことが窺えた。

数秒も経たないうちに篠川が声をあげる。

「あの、珠姫に告白しに来た36番田の男ですか！無駄に筋肉誇張しきつて…コホン…失礼しました。3年生の空手部の副部長さんですね」

「36番田つて…数えてるのか…。

それに、筋肉誇張つて…。

はははは…。

いやだな、君たち。

俺は、何も聞いていないぞ！

「…それで合つてる」

「そういうえば、この前、宮ノ内先輩の教室に乗り込んだつて聞きました。まさか、珠姫の『皇ちゃんに聞いてください』とかいうあの台詞を真に受けてとか？いや、さすがにそんな馬鹿なことはしないですね」

「…」

俺と高知は無言でそれに答える。

俺らの無言に、篠川の口元が微かに引きつったのを見てしまった。

「…大馬鹿だわ」

その通りである。

「はあ…なんていうか、とつても迷惑」
「…」

一通り話し終わり、篠川の感想がこれだ。

とつても迷惑。

本当に、その通りだ。

こんな忙しいときにあの筋肉馬鹿が。

「メントは差し控えさせてもらつたが、心中で大いに同意した。
そんな時、視界の隅で忍が身じろぎするのが見えた。

「富ノ内先輩」

「なんだ？」

「はい。実は同じクラスに空手部のやつがいました
「もう部活やつているのか？」

早い奴もいたもんだ。

いや、やりたいことが決まつているつてことはないことだ。

「いえ、推薦で入つてきたやつなんで。入学するより前から練習には参加しているようです」

「ああ！推薦か。確かに推薦ならもう部活始めていておかしくない」「ええ。兄貴から昨日のうちに話を聞いていたんで、今日、ちょっと話しかけてみました」

「どうだつた？」

「…かなり部活中の空氣は悪いみたいで。さすがに練習中に言い争いはしないらしいんですけど、練習の前と練習の後は綺麗に部長派と副部長派に分かれてて、1年のそいつにとつたら、スゲー居づらいうつて言つてました」

「どつちのほうが多いか聞いたか？」

「はい。部長派対副部長派で5：2つてところです」

一応、部長派のほうが人数多いわけだ。

「でも、副部長派の奴らはガラが悪いのばっかりだつて言つてしまつた」

「…」

ガラ悪いのばかり…そういう奴からの人望しかないつてことか？
悪いが納得してしまつた。

「練習態度とかは？」

「まあ……概ねはやれりんとやつてゐるかと」

「概ね……ね」

思ひ出すのは学食でぱつたり出合ってしまった件についてだ。
よくよく考えてみると、たかが練習の合間の休憩時間にパンなど買
いこは来れるはずもないと思い至る。

普通、運動部の生徒は部活前に食料を手に入れにくるはずだ。

なんである時気付かなかつたんだが。
ちょっと自分に呆れた。

昼休みの時間いつぱい使って話をつめる。

珠姫には引き続き一人で行動しないように伝え、篠川には教室にいる間のフォローを。

忍も同様だが、それ以外にも空手部の情報などを集めてもう一つになつた。

「授業が終わつて、すぐ帰れば部活をしている奴らとかち合つことは無いはずだ。珠姫、早めに帰れよ」

「ん」

「篠川もすまないが、オリエンテーリング終わるまでは珠姫のこと

を頼む

「分かりました」

「忍

「はい」

「何かあれば高知にでいいからすぐ知らせてくれ。それと、篠川にも気になることとかあれば直接伝えてくれると助かる」

「了解です。…筒井さんではなくて、篠川さんですね?」

「ああ…珠姫に言つても意味無いからな。篠川に頼む

「…了解です」

「あら? 私じゃ不満なのかしら」

「いや…そんなことは

「ふふふ」

キラリと光る篠川の目。

やべつこえつ。

「黒、時間」

「おひ」

時計を見れば鐘が鳴るまであと数分。

「じゃあ、何かあれば即連絡つて」とやつ。

「即連絡つてことなら、面ノ内先輩の携帯番号とか教えてください」「あ、俺もお願いしますー」

「そつだな」

確かに連絡を密に取りたければ、携帯番号は教えておくべきだ。ついでにアドレスも。

しかし、時間がない。

悠長にしてたら、授業に遅れてしまつ。

これでも生徒会長と生徒副会長だ。

授業に遅刻するのは体裁が悪い。

「珠姫」

「はあい？」

「篠川に俺の番号とアドレス教えといてくれ

「ん」

「高知」

「了解！忍には俺から送つておく」

「あの…筒井さんの携帯番号もよければ…」

忍が緊張した面持ちで言つてくる。

珠姫の携帯か…。

そりやあ、好きな奴の携帯番号とか知りたいよな…。

だが

「教えてやつても構わないと、言いたいところではある」

「はい…え?」

俺の言葉に喜色に溢れた忍だが、俺の台詞を理解したのか疑問符があがる。

「珠姫は携帯を持っていないんだ」

「そ…そなんですか」

明らかにテンションの下がる忍に、素直だと感心する。
そして、高知と同じだと心の中で笑つてしまつた。

実は、すでに高知からも珠姫の携帯番号を教えると言っていたのだが、持つてないものは教えようがない。

ありのままに伝えると、高知もがっくりと肩を落としていた。

母さんも珠姫に携帯を持たせよつか悩んでいたな…。

珠姫に聞いたらしいが、それほど興味がなかつたみたいで、返事はいまひとつだつたようだ。

そのため、毎日ではないが、澪さん 珠姫の母親から家に夜電話がくる。

：電話か。

外に出て行くタイプではない珠姫には必要ないと思っていたが、多少なりとも交流関係が広がつていけば、あつて困るものではないのかもしれない。

じつと俺を見つめてくる珠姫の視線を感じながら、思つ。

母さんに話してみるか。

「ここでいつまでも考えていっても埒は明かない。
そう思つて、思考を閉じる。

「珠姫の携帯に関しては考えてみる」

「え？」
「ああ？」
「はい」

忍、高知、篠川の順で声が上がる。
篠川だけは疑問の声ではなかつた。

色々と、珠姫と俺のことを理解しているようだ。

本当にいい友達を手に入れたもんだ…

「おい、皇一」
「宮ノ内先輩つ！」

やつと理解したのか、高知兄弟が爛々と光る目で俺に迫つてくる。
うん。鬱陶しい。

「だが、早くてもまだ先の話だ。周囲に気をつけてくれ」

「おう！」

「了解です！」

力強く頷いた高知兄弟の声を最後に、解散と相成った。

明日はオリエンテーリング。

これといって問題なく時間は過ぎた。

表向きは

「…

「副会長へ、空手部がオリエンテーリングでの時間を増やしてほしいって言つてきました」

「今せり…考えてみると…」

「わつかりました～」

「会長」

「あー？」

「食堂のほうで、小競り合いが勃発してござつた」

「そんのは、風紀に言えつて」

「風紀からの要請です」

「…か～～～～つ…出でへる…」

「あ…」

高知が田に苛立ちを浮かべて生徒会室を出て行く。

それを見送る俺の前には積み重なった書類と各部から回ってきた要
求書だ。

地味で小さな嫌がらせを俺たちは受けていた。

俺たちは1分1秒さえも惜しんで事にあたっている。
なので、意外とこの小さな嫌がらせが痛い。

「暇人共め」

口の中で悪態を噛み潰しながら、パソコンに向かい合つ。

明日で終わる。

そつ胸に言い聞かせながら何とか動いている最中だ。

「体育館の設置終了したぞ」

声と共に入ってきたのは遠山先輩。

その後に続いて姿を見せたのは、星埜先輩だ。

「お世話になりました」

「いんや～、そつちの業務のほう全然手伝つてなかつたし、他に何
があるなら言つてくれて構わんぞ?」

「そうだね。他に何かあるかな?」

「ありがとうございます。では、すいませんけどこれ、収めて
きてもらえませんか?」

田の前にあつた案件の書いた紙を2人に渡す。
渡した紙に田を通した遠山先輩の顔が歪む。

星埜先輩は笑顔だ。
とても意味深な。

「明日がオリコンチャーリングだよな？」

「そうですね」

「…」じつは今頃何を言つてこるんだ？」

渡した紙は今さらながらに出る順番に対する変更やら苦情。そして要望だ。

俺たちが要望などをほつたらかしこして、いたとまー//いつも思つてないようで何よりだ。

「んふふ…。何かきな臭いね？」

「…想像通りですよ」

「分かったよ。これは僕らでなんとかしよう」

「お願いします」

とても楽しそうに頷いた星埜先輩に、要望を言つてきましたが、少しだけ憐憫が沸いたが、自業自得と思つて切り捨てた。

俺は忙しいから、優しさなんか求めるなつて感じか？

「遠山。上から順番に回つていこうつか」

「お、おつ…とこつか、分けたほうが効率よくないか？こつもの前ならそう言つだらう？」

「そうだね。でも、今回は裏がありそだから、遠山一人で回すより、2人で回つた方がいい」

「そうか。お前が言つならこうことなんだらうな」

「理解が早くて助かるよ」

「…どれだけお前に振り回されたかと思つてるんだ

「ふふふ」

楽しそうに生徒会室を出て行く星埜先輩のあとを疲れた顔をして追

う遠山先輩。

うん。この2人もいいコンビだ。

「僕が話をするから、遠山は黙つて僕の後ろに立つておいてね？」

「あ？ 分かった」

。。

切つて捨てたつもりの憐憫が湧き上がりそうになつた。

成仏しろ。馬鹿野郎共

遠山先輩と星林先輩のおかげで、案件は恐ろしいほどスマーズに片付いた。

他の役員総出で、オリエンテーリングの準備を終わらせ、帰途に着く。

「ただいま

「皇ちゃん！」

玄関のドアを開ければ珠姫が全力で駆け寄つてくる姿が視界に映る。…お、おいーそのまま来るのかー！

慌てて後ろに片足を踏ん張ると同時に、珠姫の身体がかぶさつてくれる。

「つーー！」

「おかえりなーー！」

何とか間に合って、後ろに倒れこむのを防ぐことに成功した。

セーフだ。コンクリに頭からなんてありえないぞ！

「…ただいま」

ぐりぐりと頭を押し付けてくる珠姫に怒る気力もなく、背中を叩いてそのまま引っ付けたままダイニングに移動する。

「遅かつたな、皇紀」

「ただいま、父さん」

ビール片手に野球中継を見ている父さん。

「てか、今の状態について突っ込んでくれよ。
…いや、突っ込まれても余計に疲れるか。

「皇紀、おつかえりなさい まあ…皇紀つてば、ちゃんとお姫様抱っこしてあげなきや」

「…何がお姫様抱っこだ」

分かった。

これは母親の入れ知恵だ。

珠姫が自分でこんなことをするはずがない。

疲れて帰つて来た息子に、どんな仕打ちだ…。

「母さん、『飯』

余計なことは言わず、ダイニングの入り口付近に鞄を置いて洗面所に移動する。

この間、珠姫はそのまま。

手で支えてはいるが、大半は珠姫が自分の力で俺に抱きついていた。意外と力あるんだよな…。

洗面所で手を洗おうとすれば、さすがに邪魔で声をかける。

「珠姫、手が洗えない」

... ፳፻፭፻ - ?

- 1 -

近場から覗き込まれる。

疲れてるんだぞ、俺はつ！

抵抗するのもエネルギーが要る。
そして、そのエネルギーはほぼ空つ欠だ。

「…………。『それ』……ただいま、珠姫」

珠姫の願いのままに抱きしめてやる。ついでに、もう一度帰宅の挨拶をする。手を離せば、今度は素直に俺から離れた。

۱۰۹۷

泡ハンドソープを手に押し出し、手を洗う。
うがい用のコップを使って、うがい。

出来るだけ風邪から身を避けるには必要なことだぞ！
やつておいて、損はない。

口元を手で拭つて、振り向けば、珠姫が無言で待つていた。

1

「…」

「…行くぞ」

抵抗するには（以下同文）

貼り付く珠姫を引つたげて戻れば、ホカホカと湯気を立てた味噌汁が俺を待っていた。

今度こそ珠姫を離して席に着けば、差し出された皿に、飯。今日の晩飯はカレイの煮付けらしい。

「いただきまーす」

「はい、どうぞ」

味噌汁に口をつけると、しつかりと出汁がきいている。うまい。

使い切ったエネルギーを補給するよつこ、ガツガツと食べる。ええ、無言で。

3杯おかわりすれば、やつと腹が落ち着く。

いつものゆつくじペースに戻せば、母さんから声が。

「皇紀」

「ん？」

「珠姫ちやんの携帯のことなんだけど」

「ああ…」

「澪ちやんからはOKが出たわ。というか、ぜひ購入して、珠姫に使い方を教え込んで欲しいと頼み込まれたわ」

「…了解」

「真くんは、ぜひ珠姫からのメールが欲しいって泣きつかれたわ

「…」

メルニアは「これねと、母親からメモを渡される。
無言でポケットにねじりこんで、ため息をつく。

どうじたって出でしまうから、幸せが逃げていくぞとかの突つ込み
はいひいぢいらないので、よろしく。

携帯の使い方は教えるのは構わないが、メールを送ることに関して
は、確約できん。

珠姫が小まめにメールしている姿が想像できないんだ。

… 真さん、すいません。

善処しますが、来なくとも俺を恨むのだけはやめてください。

オリエンテーリング道田。

…」の田をどれほど待っていたか。

「これが終わったら…覚悟してろよ」

クククと笑いが漏れる。

奴らをどうするか決めた。

その為にしなければならないこともつつかなく…だ。

「悪役の顔になってるぞ」

「高知か」

頬を撫でる。

そこまで悪人面してたか？

「授業は午前中のみで終わりだが、やはり帰宅している奴が少ないな」

「そりやあ、当然でしょ。新一年生のためのオリエンテーリングだとしても、『これ』も立派なうちの恒例行事だからな。そもそも、どこの学校でもやっているオリエンテーリングと一緒に、俺らは

「こんなに走り回ることなんてなかつたつーの」

「まあ… そうだな」

俺の通つている桜ヶ丘高校は、お祭り好きが集まることで有名だ。そして、同じの創立者からして大のお祭り好きだったと聞いている。

なので、同じではどんな行事も普通の枠から離れた仕様になつてたりする。

まあ、さすがに入学式と卒業式だけは厳肅に行われるが。

…ちなみに付け加えておくと、卒業式には普通の形式をとつていてるため、それだけでは物足りなくなつてしまつている生徒たち（教師に、保護者もか？）のためにその後に、卒業式第一部なるものがある。

内容は語らひんが。

…ん？ 気になる？ しかし無理だ。その年々で内容が変わるからな。あれはその年の生徒会長の采配なので、内容の全ては生徒会長によって決まるものなのだ。

…恐ろしいぜ。

…。

コホン

そういう訳で、今日行われるオリエンテーリングも各部挙げての新人部員争奪戦の場となり、そしてどの部も全ての力を集結させて挑むので、参加しない生徒も何が出てくるのか楽しみにして来る。1年生のための行事ではあるが、他の学年が参加してはいけないと

いう縛りはない。

それを証拠に、全ての学年が午前中で授業が終わり、一部活動の類もこの時間はしてはいけないことになつてゐる。

：「ただけえって感じだが、桜ヶ丘高校は、祭り（？）のために学校自体がその為に必要な時間調整をしているのである。

自分で言つて本当に驚く。

ああ、安心してくれ。

別に全ての行事が強制的に参加しなければならないものではない。したいものを自分である程度選んで参加できるようになつていてるからな！

良ければ、来年この高校へ行こうか悩んでいたのー…考えてみてくれ！

お祭り好きなら、樂しい3年間になると120パーセント保証できるからな。

「順調だな」

演劇部の劇を観ながらの高知の感想。

演劇部は、毎年恒例の即興劇。

色んな芝居の主役・脇役の名を書いた紙を入れた箱から、適当に1年生に引かせる。

そして、その年ごとに決まった演目を1年生がチョイスした役柄で、演劇部員たちが演じるのだ。

今年の演目は『白雪姫』だ。

まともに上演してれば時間がかかるが、オリエンテーリング用に山場辺りだけを上手く盛り込んで構成されている。

今はもう城から追い出されて、小人たちと暮らしているところだ。クスクスといたるところで笑い声があがつているのが分かる。

しかし……。

7人の小人の中に、白雪姫の継母が入ってるのってどうなんだ？
それに、赤頭巾ちゃんの獵師も小人の中にENしてやがる……。

とこ「うか、泉の女神が継母役つて……ああ……白雪姫に渡せれるりんご」が金と銀になつてしまつてゐる。

『あなたが食べたいのはじりんごですか？ 普通のりんごがいい？ まあ、なんと正直な娘でしょ？ じりんごもあなたに差し上げます。え？ いらない？ 食べなさい』

舞台から聞こえてくる台詞に、じつと体育馆が沸く。

「今年もなかなかにカオスしてんな……」

汗も流れてないのに、つい、顎の下を拭う動作をしてしまひ。どう終着をつけるのか分からぬから、1秒たりとも口が離せない。

演劇部が終われば、オリエンテーリングの半分が消化されたことになる。時間もいい塩梅だ。

確かに、連日頑張つただけあって、オリエンテーリングがスムーズに進んでいるのが分かる。

「そうだな……」

「まあ、もうすぐ問題の空手部だつたりするけど」

「空手部は、瓦わりのパフォーマンスだつたか？」

「だな。まあ、奴は副部長で、部長は本条先輩だし、問題なく終わるだろ？」

「……」

「何か引っかかるのか？」

「んー……」

何事もなく終わる気がしないのはなぜだらうか。

「やうだな」と高知に言葉を返してやったが、返してやれない。

はつきりしない俺の返事に、高知が横から視線をくれるが、漠然とした不安では口に出来ることもなく、唸ってしまう。

「歯切れ悪いな。お前の『悪い予感』類はよく当たるんだから、自重しろよ」

…。

何だそれは！
高知の台詞に物申したいぞ！…

『自重しろ』ってなんだつ！

別に感じたくて嫌な予感を感じてているわけじゃないんだ、俺はつ…！

「壇上で無様にこなてしまえ」

ボソッと零す。

この場合、呪いの言葉か？

「おこつー。」

ちゃんと聞こえていたらしい。

…まあ、聞こえるよつて言つてやつたんだが。

「 何が起こつてもいいように、心構えはしどけよ
「…はあ～。何か起こること前提かよ」

「 何も無ければいいんだがな。覚悟してれば、大抵のことは対処できる。そうだろう?」
「…まあな」

俺の言葉に、高知が不敵に笑う。
ここにはそんな顔がよく似合う。

巻き込むだけ巻き込んで、あとはよろしくってやつじゃない。
こいつは有言実行型で、頼りになるのだ。
だからこそ、面倒ごとに巻き込まれてしまつても、まだに友人関係
でいられる。

生徒会長様のお手並み拝見といけたらいいな。

「オリエンテーリング前半の部、終了です。これからトイレ休憩10分を挟んで後半の部へ入りたいと思います。始まる前に体育館に帰つてください」

進行役の放送部のエースの言葉と共に、生徒たちが動き出す。足早に体育館を出ていく者が見える。

それは学食に走つたのだろう。

飲み物を買いに行つたのか、食い物を買いに行つたのかは分からんが。

「あ、珠姫ちゃん！」

高知の嬉々とした声に視線を動かしてみると、こちらに向かつて歩いてくる珠姫と篠川。

「おう」

「ここにちは。富ノ内先輩」

「どうだ？」

「はい。噂で聞いていましたけど、本当に桜ヶ丘高校のオリエンテーリングは凄いですね」

「オリエンテーリングなんてまだ序の口なんだがな…」

篠川の言葉に苦笑い。

本当に、この学校でオリエンテーリングなんてお祭り道への扉を開けたところだ。

そりやあ、この日のために、年度変わる前から準備し始める部活も多々あるけどな。

まだまだ触り程度だ。

「はあ～、やつぱり凄いですね」

「そりやあ、やつてみたい部活がみつかるといいな。…いや、決まってたりするのか？」

「帰宅部で決まってたりします。…でも、オリエンテーリングのおかげでグラグラしてます。どの部活も見せ方分かっていて、ずるいですよ」

「ははは。そりやあ、どの部活も部員獲得に必死だからな」「後半の部もじっくり見て、考えてみます」

「そりしてくれ。篠川は引く手あまただらう。帰宅部では勿体無いと思う。ああ、生徒会にも欲しい人材だな」

「…富ノ内先輩も天然ですか？」

「は？」

急に黙り込んだ篠川が眉間に皺を寄せて俺を見ている。

いつも奥を見透かせないような笑みなのに…初めて見たな、こんな顔。

なんか悪いこと言つたか？
褒めたつもりなんだが？

「すまないな、篠川さん」

「どうしてお前が謝るんだ、高知」

「俺が会長様で、お前が俺の部下の副会長だからだ」「ワケが分からん」

「わからんでいい。お前はお前だ」

「…なんかイイこと言つてるよつて、馬鹿にされてる…諦められてる感じが伝わつて来るんだが」

「いやいや、とんでもない」

「…」

なんなんだ、本当に。。

「皇ひやん」

ぐいっと袖を引かれる。

視線を向ければじつと見られる。

珠姫の視線が無言で用を伝えてくる。

「お前も大概に口を動かせ。…はら」

「ん」

ポケットからあるものを取り出す。

そのまま包みを剥いて口に入れてやる。

「もうひとついるか?」

「ん」

今度は手のひらのせてやる。

珠姫の手の上にはキャラメルが一つ。俺の大切な糖分である。

頭を使うんだな。

小まめに糖分は摂取しないと頭の回転が悪くなる。
珠姫はそれを狙つて来たわけだ。

ポケットからもうひとつ出して、篠川にも渡す。
やけにキャラメルを凝視する篠川に、もしさキャラメルは嫌いだつ
たかと心配した。

「嫌いか？」

「い、いえ…ありがと」^{ひざこます}

聞いてみれば、杞憂だつたようだ。

キャラメルをポケットに入れる篠川を見ていると隣からジト目でみ
てくる高知の視線。

「なんだ？お前もいるのか？」

「お前つて奴は…いや、いるけど」

ブツブツいいながら手を出してくる高知の手にものせてやる。

素直に欲しいと言えばいいの。」
いちいち物欲しげに睨むなよ。

まったく。言葉を使わないやつらが周りに多くて困ったもんだ。

困った。

その言葉が今この場に合つた感情を表す言葉だな。

数十分前に時間を戻そう。

10分のトイレ休憩が終わり、後半の部の先発隊である朗読部と手話部合同での部活紹介が始まった。

朗読部が語り、手話部がそれを手話にて話す。合間に今流行のヒップホップを上手いことくみこみながら、ひとつの作品を作り上げてきたその手腕は素晴らしいかった。

ひとつ。またひとつと終わり、とうとう手部の番が来た。

本条先輩が胴着を着込んで壇上に立つ。すると、後方から黄色い声が上がる。

2・3年女子だ。

言葉の多くない本条先輩の隣に並んでマイクを持つのはやはり菱田川先輩だった。

そつなく流暢に喋る菱田川先輩にも、歓声があがつたり、合の手

の声があがる。

本条先輩とは違ひて、こちらは大半が男からではあつたが、

菱目川先輩が喋っている間にも、その後ろと舞台の下にこれまで胴着を着込んだ男たちが並び、次々に型を決めていく。

それはなかなかに見ものであり、予想以上に楽しませてもらつた。

問題ねえな…」

横で見ている高知からも感心と安堵に似た声が零れたのを覚えてい
る。

気付けば空手部のメインとなる瓦わりに突入した。

く。3年を中心としたメンバーが、2年が用意した瓦を順番に割つてい

それに生徒たちは、瓦が割れるたびに歓声を上げた。

最後を飾るのは本条先輩と片畠。

しかし、ここで、菱目川先輩から体育館にいる生徒たちに向かって提案があがる。

「見ててやりたくない人いるかな？実は意外と簡単じゃないの？とか思つている人がいるんじやないかなー。と言つことで、ここでいきなりの体験ターゲットイム！！我こそは！って人を募集するよんつ やつてみたい人～。瓦の枚数は、1～3枚の中から自由に選べるよ～。好きな子にアピールしたいそこのあんた！これはやるつきやないつ！！？」

軽快な言葉に、一瞬静まり返った体育館が騒がしくなる。

「瓦割つたら賞品出るんですか～？」

「うわ。がめつい奴がいる。てか、まず瓦を割つてから言えよ」

3年だらう男子から声が飛び出し、それに菱田川が軽く返す。

「たくつ……お！一年生から手がつ……って、お前は空手部員だらうがつ……」

仕込んでいたのだろう、もう入部している1年の空手部員がまっすぐ手を上げていて、それを扱き下ろす。そんなこんなで、体育館中を沸かせながら、何人かの挑戦者が壇上に上がり、次々に瓦わりに挑戦していく。

だが、残念なことに瓦は割れず、手の痛みに悶える挑戦者たちがまた生徒たちを笑わせる。

「残念！あ、これ参加賞ね」

そう言つて、菱田川先輩が出したのが飴玉だったのを覚えている。

「ケチ～！」と野次があがれば、「うるせえ！自腹だ……」と返すその姿は何故だが雄雄しかつた。

挑戦者も居なくなり、そろそろトリである本条先輩と片畠が舞台の真ん中に移動しようとしたその時、体育館後方より数人の生徒からの声が壇上に向かつて投げかけられたのだ。

「生徒会長の格好いいとこ見てみたいぞ～～～～！」

「副会長でもいいぞっ！」

卷之三

國語卷第十一

投げかけられた声はまたたく間に体育館中に広がり、コールにかわった。

「やられた」

一瞬の気の緩みを付いたように起こつた出来事に、呆然と呟く高知の声が耳に入つた。

困った。

その言葉が、今、この場に合つた感情を表す言葉だと俺は思った。
しかし、それは俺の感情ではなくて、高知の感情を表しただけであつて、俺はこれといって困惑などしていない。

むしろ、怒りを感じていたりした。

続く俺と高知を呼ぶ声、声、声。

舞台の上では顔を歪ませた菱田川先輩と、多少眉をしかめた本条先輩。

それを見たら、これは予定になかったことなんだと一目で分かる。

そして、その横でにやつと口元を歪ませ、悪意に満ちた顔の片畠がいる。

これは確定だ。

あの最初に俺たちのこと呼んだ生徒たちは、片畠とグルだ。

これは俺たちを貶めるための罠だ。

高知を気に入つてない者はいる。

それは仕方がない。

高知が皆に選ばれた生徒会長であつたと、全ての生徒がそれを支持したわけではないのだ。

支持されていると同時に、高知はやつこまれている。

致し方のないことである。

「 だが、それを今、納得できるかは別だろ?」
「 皇?」

どれだけのやつらが、この日のために頑張ってきたと思つてゐるのだ。

空手部だつてそうだ。

対応を間違えれば、色んなところに齟齬が出る。

片煙はそれを分かつてているのだろうか。

自分の仕出かしたことを。

高知が恥をかけばそれで終わるのか?

答えは否だ。

いや、この場は終わるかもしれない。

しかし、この桜ヶ丘高校での生徒たちの頂点である高知がこんな場

面で失敗を犯せば、今後学校が荒れる。

そんな大げさな？

大げさではないのだ。

桜ヶ丘高校での生徒会長といつた立場は、想像以上に：一般的の生徒が想像できないくらいに過重な責任を背負つちからっているのだ。

だからこそ、多々ある行事の采配を振れる権力ちからを持つている。

「あれがしたいな」

「じゃあしよう」

などと本来は、簡単に出来ないことのだ。

それを可能にしているのが生徒の代表である生徒会長なのだ。

あいつらは何もわかつちゃいない。

誰が自分たちの楽しい学校生活を支えているのかを。

だから、俺は怒っている。

たかだか珠姫に振られて、恥をかかされたぐらいでやつてはいけないことを片煙はした。

恥をかきにきたのは自分だということも忘れて。

「仕置きが必要だよな」

この時の俺は怒っていた。

横で見ていた高知が俺から離れるように後ずさりしたほどに。

そして、そんな俺のことを遠くから見ていた珠姫にも、俺の感情の揺れが分かつてしまつたのだろう。

目まぐるしくじつ行動し、この場を治めるべきか脳をフル稼働させていた俺は、珠姫の様子が違うことに気付かなかつた。

しかし、珠姫の心の機微を知つたのは、そのすぐ後のことだつた。

最初に気付いてコールをやめたのは誰だったのか。

それは多分、珠姫のすぐ側に座っていた生徒だろ？。

何も言わず、手をまっすぐに上に伸ばして静止している珠姫。

珠姫を中心として、次第にコールが波のよじに引いていき、最後には体育館全体が静かになった。

「え…ええと…」

菱田川先輩が戸惑ったように頭をかいてる。

静かになつたのを合図に、珠姫が席を立つ。

俺には珠姫がこのあじどうするのかが分かつてしまつた。

何故分かるか？

それは俺にも説明できない。
ただ、分かつてしまつんだ。

そして、俺の心の些細な動きを珠姫も、何も言わなくても気が付いてしまう。

「少々、厄介だ。

「会長」

高知に顔を向けて、それなりの音量で言葉を伝える。
これだけ静かなら、周囲に聞こえるはずだと判断して。

「何だ？」

いつもと違つ呼び方をした俺に、高知が一瞬黙つて、それから平静を装つて返事を返してくる。

「会長が出るほどのことでもありませんし、俺が行つてきますよ」「ああ……そりだな。行つて来い」

席を立つて、舞台に近づく。

生徒会役員は舞台近くに席が設けられているのだ。

先に行動に移していく珠姫が、舞台端に設置されている階段を使って壇上に上がる。

菱田川先輩の目の前に行つて止まる。

「うう……これは、これは、可愛らしい挑戦者？の登場……かな？」

戸惑いつつもマイクで喋り始めた菱田川先輩に、珠姫が頷いた。

その瞬間、体育館が揺れた。

「ちよつといいですか？菱田川先輩」

珠姫に少し遅れて舞台に上がった俺は、菱田川先輩からマイクをも
らい。

「オリコンチャーリング、楽しんでいただけているだろ？」

おおー————！

なにやらハイになつた生徒たちから雄叫び?が。

それに笑みを顔に貼り付けて手を振る。

「ありがたい」と、「」と題名へ。いただったので、斜手部の瓦わらに挑戦をさせてもらひむと頃の、「

これまた上かる声。

さつきより女子の声が多いような気がしたが、気にしない。
むしろ、男の雄叫びより聞き苦しくなくて結構だ。

しかし、勇敢なことに、彼女が先に名乗りをあげた。彼女のその勇気に敬意を表し、先に彼女の挑戦を見抜けたかと思つ、

「おい、宮ノ内」

俺の言葉に沸く体育館を横目に、
菱目川先輩がマイクに拾われない
ように囁く。

それを流し見て、頷く。

大丈夫だと。

「用意してください」

舞台の真ん中に置かれる瓦。

その数一枚。

男共には1～3枚の中から選べるようになっていたのだが、どうやら珠姫には一番少ない枚数しか用意されないようだ。さすがにセイラくんは、考慮されたらしい。

しかしだ。

ちらりと珠姫を見れば不満そうな顔。

多分…いや、絶対他のやつらには珠姫が不満なことが分からなかつただろう。

それほどに表情はちらりとも動いていない。

だが、俺には分かる。

…。

俺、意地悪（悪魔？）だって思われるかもな…。

そつ思いつつも、珠姫の不満を解消してやることにした。

「み、宮ノ内？！」

横に積んであつた瓦を2つ手に取つて、珠姫の前に置かれた瓦に載せてやる。

舞台下からも非難の声。

高知の声が聞こえたのは気のせいだろうか？

…いや、気のせいじゃないだろうな。

苦笑いしながら離れれば、珠姫が周囲を気にせず、瓦に近づいた。足を軽く開き、腰を落とす。

この動作を見て、近くで菱目川先輩が、そして離れた場所で本条先輩が目を瞠るのが見えた。

そう、それは知ってる人が見れば分かる素人とは違う動き。

「はつ！」

瓦に一度軽く右手を当てて、一瞬のうちに上げて振り下ろした。見事に瓦が割れる。

歓声が上がるところのはずだったが、体育館は異様な静けさに満ちた。

きっと、俺以外のやつらには、この結末は想像してない事態だったのだろう。

分からぬでもない。

俺はマイクを菱目川先輩に返す。

だが、菱目川先輩の動作はとても緩慢だった。お構い無しに手にマイクを握らせる。

うん、働けよ。お前等の出し物の最中だらうが。
こつちを見た引きつり気味の菱田川に笑顔で頷いた。

「すつ…素晴らしい…なんと可愛らしい猛者が居たもんだつ…皆、
拍手…」

あ、ヤケになつてゐる。

そう思つても、フォローする氣もなく傍観する。

声につられて皆が拍手しているが、顔は驚愕に染まつたまま。

「よ、よければ何か一言」

マイクが珠姫に向けられる。

珠姫が何か言うのだろうか？

いつもだつたら何も言わないだつと想つが、今日の珠姫はいつも
と違う。

だから、ちょっと分からぬ。

どうしたいのかとか、どう行動するとか、珠姫の顔を見れば大抵分
かるが、言動までは俺も神様じやないから分からぬんだ。
じつと珠姫を見ていれば、口が開いた。

「皇ちゃんを困らす人は許さない」

あれ？もしかして俺がヒロインか？

固まつた体育館をそのままに、珠姫が俺の側に戻つてくる。

褒めてくれといわんばかりに、俺を見てくる。

促されるそのままに頭を撫でてやれば、気持ちよさをうな田を細める珠姫の姿。

ここが何処かも珠姫にとって問題がないらしい。

俺も感覚が麻痺していたんだろう。

こんな衆人環視の真っ只中で珠姫の頭を撫でているんだから。

ここに居ようと田線で言えば、頷きが返つてくる。

その場を離れて菱田川先輩に近づけば、まだ硬直したまま。

マイクをその手から抜きさつて前を向けば、同じように固まつた生徒たち。

ところどころに居る教師たちは大半が笑っていた。

うん。これぞ桜ヶ丘高校の先生たちだ。

生徒と同じよつこに固まつてるのは、新任だな。

「あ～と…予想外のことに対する固まっている諸君。人は見かけによらないってことを知つて、君たちはひとつ賢くなつた。良かったな。…そういうわけで、筒井珠姫に下手にちょっとかいをかけないことを俺はここで助言しておこう」

「富ノ内～」

横で俺の名前を呼ぶ声が聞こえるが無視だ。

せっかく珠姫が作った機会？だ。
有効に使わなければ損だろ？

珠姫が俺を守りとした結果でもな。

「彼女と進展のあるお付き合いをしたいやつは、俺のところに直談判しに来る前に、自分を鍛えることを勧める。しかし、力のみが強さではないとも言つておこう。…君たちの未来に期待している」

「富ノ内 つ～？」

菱目川先輩が若干涙目だ。

なんだ？

気のいい先輩でも、男の涙では俺はひとつ動かさないぞ？

「じゃあ、俺はそのラインに達しているところだな」

聞きたくなかった声。

自失したままいればいいものを。

「片畠先輩」

「俺は3枚、瓦を割れる。そりだらうへ。」

「… そうだな」

片畠が視線をやつたその場には本条先輩。

少ししてそれに同意が返り、やつの顔に歪んだ笑みがあがる。

やつは分かつてない。

いつにも分かつてない。

事実、片畠が瓦を3枚割ることができても、付き合つ資格があるかどうか。

もつ、一度告白して、断られていいことを。

ほんの先ほど言つたように、強さにも色々あつて、力だけが強さじゃないのだ。

やつにつっこむあの耳は、ただの飾りなのだらうか?

片畠には、じつにはなんだが、力しかない。

そんなやつに預けられるものなど、なにひとつない。

口にせよ、やつを見ていたら瓦を示された。

「で、お前はこれが割れるのか?」

瓦わりの話はもう終わったもんだと想つてたんだけどな?

。。

片畠の指示で、空手部員が舞台の中心地に瓦を設置する。

「うむ、やせつ瓦を割らないところないよ。」

しつかりと瓦が3枚：4枚積まれている？！

何故だ？

視線を片畠にやれば、にやりと笑われる。

お前の歪んだ笑顔なんて見たくないんだが。
よければ永遠にその笑みは封印してくれて先ハ。

「俺は、4枚割れるぜ」

ああ... あらこいとですか。

：OK、理解した。

自分の力を誇示したいらしい。
脳まで筋肉で出来ているらしい。

可哀相過ぐる。

「…分かりました。…おい？」

神妙に領けば、舞台袖のすぐ近くに居た珠姫が。

そして、やつてくれた。

俺のために積まれた4枚の瓦の上に、プラス3枚置く珠姫の姿に、
俺は苦笑も出なかつた。
いや、口元は多少引きつっていたと思う。

「珠姫さん？」

「ん」

「これを割れど？」

「ん」

答えが分かつていても、人は問わなきや いけない時がある。
それが今だ。

しかし、無常にも領き返されてしまえばそれで終わりだ。

「…そつか」

珠姫が満足したように、俺がさつき置くように提示した場所に戻つ
ていく。

ははは… 賢いぞ、珠姫…。

そのまま何もせず、そこに居てくれればよかつたのに。

盛大なため息をついたとして やめた。

いつのまにやら硬直から復活した生徒たちは、固唾を呑んで舞台の上の俺たちを見守つている。

見守つていろ？

いやいや、そんな易しい視線ではない。

ちらりと時計を見れば、あと少しで空手部の時間が終わる。
他よつ少し長めに時間をとつておいてよかったです。

前田にきた時間延長の願いをつやむやにせず、調整していたおかげ
だった。

無言で見守る？周囲の視線を無視して瓦の前に立つ。

珠姫が先ほどして見せたのと回じよつて、足を軽く開き、腰を落と

す動作をする。

息を深く、深く、吸つて、吐く。

何度かそれを繰り返し、瓦の一番上に手を添える。

一瞬の間。

「せいつーー！」

ドゴッ！？

。。

。。

。。

大きな歓声。

俺はやり遂げた。

良かつた。

最近、道場に行く暇がなかつたので、鈍つている。なので、全て割れるか心配だつたんだ。

当初の予定よりハードルを上げられて焦つたが、何とかなつて良かつた。

珠姫が置いたはいいが、割れなかつたでは恥ずかしすぎた。

：よかつたぜ。

さて、ここはひとつ、でかい釘を刺しておかなければ。

そう、俺を凝視したまま固まっている片畠に、盛大に釘刺しておかなければ安心できん。

俺にここまでさせたんだ、追い込ませてもいいはず。

「残念ながら、俺のほうが出来るようですね。申し訳ありませんが、力という単一の強さしか誇れない先輩では彼女を任せられません。一昨日来てください」

「なつ…」

よし、伝えることは伝えた。

伝わったよな？

てか、これで分からなかつたら救いようがないといつか…なあ？

「菱田川先輩、マイク」

「あ、ああ」

「本条先輩、最後のシメですよ」

マイクを投げれば、危なげなく本条先輩の手におさまる。

「せつかくの出番、取つてしまつてしません

「構わん」

ここで初めて本条先輩が笑った。

うわ。珍しい。

めったに笑わないことで本条先輩は有名なのだ。

これで俺の運が向けばいいんだが。

それよりも、もしかすると運を使つてしまつたのか？

珍しいといつても、男の笑みで運を使い果たしてしまつたなんてことになついたら、枕を涙で濡らすぜ…。

俺の幸運が残つてることを全力で祈つてゐぞー神さんつ！！

「力の強さと、心の強さを同時に鍛えられる部活だと思つ。まあ、たまに勘違いする奴も出でては来るが…。興味を持つた者は、一度武道館に見学に来てくれ。我々はいつでも歓迎する」

本条先輩の芯の通つた声がしっかりと耳に落ちてくる。

いい声だな。

なにかをやゆつた言葉が入つていたが、俺は知らん。

今こそ！スルースキル発動！

彼の言葉を最後に、空手部の出し物は無事、幕を閉じたのだった。

「すまん」

全ての部活紹介が終わって、全員での片付け。あつといつ間に片づけが終わり、手足となつて働いた役員たちは帰つた。

反省会はまた後日だ。

そして今は、生徒会室に居る。

そんな生徒会室で、俺は高知に頭を下げられていた。

ズビシツ

「たつー！」

下げる頭にチョップをくれてやる。

トップが軽々しく頭を下げるな！

桜ヶ丘高校のトップの自覚があるのか無いのかはつきりしやう……。

「素直に謝つてんのに、何してくれんだよー！」

分かつてない。

いや、分かつててやつてるのか？

「謝るよりも何か奢れ」

「…了解」

俺の言葉に黙つたと思つたら、苦笑と共に頷かれた。
調子が狂うからやめて欲しい。

「いや〜、でも凄かつたね」

「… 星埜先輩」

「口ニ笑つて話に参加してきたのは星埜先輩で、その横で苦笑い
している遠山先輩も居る。

「富ノ内」

「何です？遠山先輩」

「お前、空手習つてたんだな」

「あ〜…まあ…そんなどころです」

遠山先輩に歯切れ悪く答える。

俺が習つてるのは空手ではなくて古武術。

これといって、人に触れ回るようなものでもなかつたので、今まで
誰かに古武術を習つているなんて、言つたことは無かつた。

これからも触れ回る気はない。

古武術を習い始めたのは必要に駆られたからで、仕方なかつたから
だ。

そり、珠姫を守るために。

珠姫は小さいころから美少女っぷりを發揮していたから、面倒」とに遭遇する機会が半端なかつたんだ。

もれなく俺も巻き込まれるわけだから、身を守る方法を身につける必要性があつたわけだ。

なもので、本当に幼い時からやつてている。

うん? 小さいときにはそんなものは無理だつて?

まあ、入つた当初は確かに身体に負担のかかる鍛錬など全然したことはない。

だが、それだけが鍛錬ではないのだ。

精神鍛錬。

そういうのを中心にしていた。

あと体力作り。

これらのおかげで、何かあつたときでもまずは頭が動く。頭が動けば身体も動く。

まあ、そういうことだ。

「?あの後は、何事も無く終わつたし、よかつた、よかつた

深く突っ込み、無事にオリエントーリングが終わったことを喜んでくれる遠山先輩は素敵だと思つ。

ん？

いや、これはフラグとかいうものでは断じてないぞ！
心配りの出来る遠山先輩を褒めただけだ！

「これでやつらは大人しくなるかな？」

「どうでしょ？…自分たちでまた種とはいえ、恥をかかされた訳ですし、報復してきそうつな気も」

脳内で否定するに必死な俺を置いて、星埜先輩と高知が話している。

「それなんですが、俺に考えがあるんです」

慌てて会話に参戦する。

「ほお？」

「何かいい案ありか？」

「ああ。せつかぐだし、性根を叩きなおしてもいいつかと」

「は？」

俺の返事に意味が分からぬといった顔をする高知と遠山先輩。

その隣でひとり星埜先輩が笑顔だ。
や、それ怖いんですつて。

しかし、俺も星埜先輩に負けず劣らずに意地の悪い笑みを浮かべた。

片畠だけじゃない。

片畠に賛同する他の空手部員もまとめて性根叩きなおしてくれるーー！

オリエンテーリングから2日が経つた。

今、俺は武道館の前に居る。

そう、空手部の活動場所だ。

俺の横には高知ともう1人。

高知と視線を合わせて頷きあう。

高知を先頭に、俺たちは武道館に足を踏み入れた。

練習に勤しむ空手部員たち。

オリエンテーリングのおかげか、予想以上に入部希望者が入り、それなりに人数が揃っていた。

俺たちが入つていくと、武道館の中がざわつき、皆一様に練習を止める。

「高知？」

武道館に居た部員たちを代表する形で、本条先輩と菱田川先輩が寄つてきた。

今の状況が分からず戸惑っているのが分かる。

それも当たり前だ。

事前の取り次ぎなど誰にもしももらつていないのでから。

「練習中に失礼します」

高知が頭を下げる。

「おつと、俺も下げねば。」

「高知くん！ 宮ノ内くん！」

ここで、武道館の奥から新たな登場人物が。
顧問の内山先生だ。

笑顔で出迎えてくれる。

なんか、ほつとするのは何故だろ？

「わざわざすまないね」

「いえ。我々生徒会は、生徒たちのためにあるのですから、気にしないでください」

「でも、言わせてくれ。 ありがと」

「…」

おつとりとした内山先生と高知の会話を聞いてたら和んでしまう。
さつせと本題に入らせてもらおつ。

「内山先生、こちらが赤坂伸さんです
「こんにちは」

あかさかしん

俺の紹介と共にビシッと挨拶をする赤坂さん。

彼の名前を聞いて、本条先輩たちを含めた数人が驚いたように目を見開く。

「こんにちは。今日はわざわざありがとうございます」

「いえ…これからよろしくお願ひします」

「いやいや、それはこちらがお願ひすることです！お忙しい身なのに、この度は引き受けくださり、本当に助かりました」

「何処までお手伝いできるか分かりませんが、精一杯務めさせていただきます」

内山先生と赤坂さんがお互いに深く頭を下げるのをオレと高知は見守り、本条先輩たちはワケが分からず困惑顔で見ていた。

2人の挨拶が終わり、赤坂さんが空手部のやつらに向き直った。

その瞳は静かだったが、何か相手を射抜くものがあった。

空手部員たちが一様に固まり、次いで姿勢を正す。

「赤坂伸だ。5年ほど前にこの空手部で主将をしていた。今は実家の道場で師範をしている。今回、縁あって君たちの指導にあたることになった。よろしく頼む」

彼の言葉に空手部員たちがざわついた。

内山先生が彼の横に並ぶ。

「こ」の赤坂さんが主将を務めたとき、桜ヶ丘高校は全国に行き、ベスト4入りを果たした。大学に進学し、その間も多彩な戦績を残して卒業。社会人となつた今、これからを期待された人物の1人だ

「やはり…」

「すげ…」

内山先生の説明に皆が驚きに目を瞠っている横で、本条先輩が瞳を輝かせているのを発見した。

これも珍しいワンショットだ。

本条先輩のファンがいたら騒いで大変だな。

俺は女たちのように騒ぐ気はせんがな。

「し、しかしつ！内山先生つ！…オレたちは自分たちで…」

慌てたように声をあげたのは片煙だ。

てか、懲りもせないのか。

それに馬鹿丸出しだ。

「今まで顧問としての私が不甲斐ないばかりに不自由をさせた。よく指導する者がいない中、頑張ってくれたね。ありがとう。しかし、やつと指導にあたってくれるという人物が見つかった今、自分たちを高めるために頑張つて欲しいと思つ」

：上手いな、内山先生。

横で高知も感心してる。

そして、片煙も反論する言葉も無いのか、口を閉じた。

内山先生も結構やる。

癒し系なだけじゃなにってことか。

覚えておこう。

「では、まずはそれぞれの強さを見たい。乱取りをしようと思つ。準備をしてくるので、用意して待つていてくれ。主将は？」

「はい。本条といいます。よろしくお願ひします」

折り目正しく頭を下げる本条先輩に、赤坂さんの印象もよかつたようだ。

男らしい笑みに迎えられる。

武道館の隅に寄つて、その様子を見ながら、俺は横で話している高知と内山先生のほうへ耳を傾けた。

「何とかなりそうですね」

「そうだね。」

嬉しそうな内山先生に、一仕事終えたよつな高知。

いつの間にやら、いつもどおりの内山先生に戻つてゐる。

「しかし、よく赤坂さんを引っ張つてこれたな、皇？」

おっと、話を振られたか。

「内山先生までそんな尊敬した眼差しはやめて欲しい。

「はあ……まあ……お世話になつた道場の先生に頼んでみたら思つた以

上に人脈が広くて……な

歯切れ悪く答える。

そう威張れるものじゃないんだ。

人の力を借りまくつだからな。

それも、最近ご無沙汰してたから、思った以上に搾られて大変だった……。

こっちの仕事が一段落したら、三分小まめに通うように命令されたし……。

……やべ、落ち込むわ。

思った以上の犠牲を払わされたことに気が付いた。
これはなんとしても、片煙らをしつかり矯正してもらわねば……！

心で今後の予定を立ててれば、本条先輩と話しつた赤坂さんが近づいてきた。

「宮ノ内くん、どうだい、一緒に？」

「は……いい？！ついいえ！遠慮しておきます、はい！」

笑顔でとんでもない」と言われた！

引きつりながらも断る。

「冗談じゃない。

正直な思いだ。

何故にこんなとひりで汗など流さねばなりとつ！

「そりか…残念だな」

「は…はは…」

そんな残念そうな顔はやめてくれ！

高知が何か言つてきたらどうしてくれるんだ…！」

「おい、皇」

「だが、断るつ…！」

「…何もまだ言つてないんだが」

「…」

タイムリーに高知に呼ばれて、つい力強く断つてしまつた。

ははは、ドンマイ オレ！

「はははは…すいませんね。会長」

「…分かつた。俺が悪かつたからその笑顔はやめてくれ」

よし！俺は勝つたぞ…！」

何か勝負したつもりも無いがな。

…うん、壊れつぶりがひどくなる前に退散したほうがよさそうだ。

約束もあるし。

「内山先生、申し訳ありませんが、今日はこれから予定がありまして」

「え…ああ…うん。今日はありがとう…！」

「…赤坂さん、これからよろしくお願ひします。色々と

「おひ。期待に添えると感ひ。任せてくれ」

内山先生に暇の言葉を向ければ、なんとも可愛らしき返事。
…オレより年上の男のクセに。
そしてそれが似合つから困る。

いや、そのほややとした空氣で生徒たちを癒してくれ！

赤坂さんもニシと笑つて頷いてくれた。

話はじゅやじゅちやんと通つてゐるよう何よりだ。

無視された形になつた高知がブツブツ言つてゐるのを無視…したい
ところではあるが、思い留まる。

「高知」

「なんだよ」

「話、聞いてただろ。今日はこれから用事があるから後は頼む」
「急だな。…分かつた。」いつまほまかせり

「おお。頼もしい」

「当然。で、何の用事だ？」

「あ？ああ…珠姫の携帯を購入することになつたんだな。今から携
帯ショップに行くんだ」

お許しも出たことだし、早く買いに行かないと真さんが怖いからな。
今か今かと待つてゐるやうだ。

母親いわく。

ジリジリと携帯を目の前に佇む真さん。
うわ…想像出来るから余計怖い。

「んなつーおいつー俺も行くぞつ」

想像でブルつていれば、先ほどの発言を翻した高知が詰め寄つてくれる。

近い。

男と接近なんて[冗談ではない]。

ぐこつと押しやる。

「阿呆。今さつき『まかせる』と、頬もしい返事をしたくせに、何ふざけたこと言ってやがる」

「ずりいぞー先に用事について言つてくれれば、言わなかつた！」

生徒会長様が何言つてやがるんだ…。

「ともかく一緒に」

「断る」

一言の下に切つて捨ててやる。

「人でなしー鬼ー冷血漢ーー！」

「ほお？」

嗤つてやる。

そうすると、途端に面白いくらいに固まる。

高知をそのまま放置して、俺は内山先生と赤坂さんに頭を下げて武道館を後にしたのだった。

「怖いな」

「そうですねえ。でも、この会長にして、あの副会長ありますよ？」

「ああ…確かに。ぜひともまた話をしたいですね」

「ええ。指導に来てくださいれば、また機会もありますよ」

俺が去った後、ほのぼの（？）と話す内山先生と赤坂さんの姿と、未練がましく武道館入り口を見やる高知の姿が、武道館の中でもられたとか。

「ありがとうございました～」

携帯ショップの紙袋を片手に、珠姫と歩く。

「家に帰つたら、使い方教えるからな」
「ん」

家に一番近い携帯ショップに行つた。
機種は俺と同じで、色違い。

これなら、俺も珠姫に教えやすい。

日も暮れかけて、薄暗くなつてきている。
街灯が道を照らし始める。

珠姫がオレの制服の裾を引っ張つた。

何事かと立ち止まり、視線をやれば、珠姫の視線は小さな公園へ。

その公園は珠姫と幼いころによく遊んだ場所だった。

懐かしい。

傍に居る珠姫と公園を交互に見て、長い月日が経つたのを実感する。
珠姫と離れてから俺がここで過ごしてきたように、珠姫も離れた場所で長いこと過ごしてきた。

その事実が確かにあるのに、俺は今、昔と回じよつて珠姫と一緒にいる。

何故か不思議を感じる。

珠姫が横に居るという当たり前の日常を過ぐしている今の俺には、珠姫が横に居なかつた時間が夢の中の記憶のよつて曖昧に思えた。

「公園寄りたい」

ボウツとしてれば、珍しく珠姫が言葉で意向を伝えてきた。

導かれるままに公園に足を踏み入れる。

時間が時間なだけに、人つ子一人居ない。

小さな公園の敷地に、詰め込まれたかのよつて「ブランコ」と滑り台があつた。

昔は砂場もあつたのだが、衛生面からなくなつてしまつたと、この公園で遊ばなくなつて数年後くらいに何処かで聞いた。

水のみ場があつて、それで全部だ。

公園を囲うよつてどんぐりの木が茂つている。

時期的にどんぐりはまだ無い。

よくどんぐり集めをして遊んだ事を思い出す。

「そういえば……」

思い出した。

細かい理由は思い出せなかつたが、公園でどんぐり集めをしているときには、何歳も年上の悪ガキに絡まれた日の事を。

珠姫に手を伸ばしてきたやつらから俺は珠姫を庇つた。

生意気だと押されて尻餅をついた。

「これはもう抗戦するしかないと、意識をかえて飛び掛ろうとしたとき、俺の後ろからどんぐりが飛んでいた事を鮮明に思い出す。一番前に偉そうに立っていた悪ガキの顔に当たつてどんぐりが地面に落ちた。

やつらの顔は面白いほどに間抜け面になっていた。

「珠姫がどんぐりを投げてくるとは思つてなかつたんだろうな……」

あの後は怒涛のようだつた。

珠姫が集めたどんぐりを次から次へとやつらに投げた。コントロールが良く、顔めがけて投げられるどんぐりが、思いのほか痛かつたらしく、逃げ惑つやつらに異変に気付いた大人がやってきて、その場はおさまつた。

「大概、珠姫もやられっぱなしじゃ無いんだよな」

笑いがこみ上げた。

思い出している間に、珠姫がブランコに移動していた。

「皇ひやん」

呼ばれてブランコに近づけば、座るよつに言われる。

…「ブランコで遊ぶよつな年でももうないんだが。

珠姫に従つて座れば、その膝の上に珠姫が乗つてきた。

「もうひとつあるんだから、そつち乗ればいいのに」

「やだ」

「さいですか…」

抵抗するのも面倒で、そのまま軽くブランコを揺り出す。

「イヤ…

連結部分のところから擦れる音が聞こえた。

「皇ちゃん」

少しの間ブランコを揺りして黙り込んでいたらまた名前を呼ばれた。

「なんだ」

ブランコを揺らすのをやめずに聞えば、珠姫が俺に預けていた身体をより一層押し付けてきた。

「好き」

珠姫の声が静まりかえった公園に落とされた。

「…やうか
「ん」

幼いころから毎日の「」と珠姫に贈られてきた言葉。
そういうえば、再会してから初めて言われた。

まあ、年齢的に毎日言われたら困っていたと思つが。
久しぶりに耳にしたストレートな親愛の情に、顔に笑みがのぼつた。

「俺も珠姫が好きだよ」

「ん」

俺たちはそのまま公園で少しの間、ブランコで揺れ続けた。

一応、この回でオリエントーリング編は終わりです。
この後、いくつかのこぼれ話をアップした後、次の話を始めるまで、
エンドマークをおさせていただきます。
長くあけるつもりは無いのですが、もしかすると、再開まで少しか
かるかもしれません。

よろしければ、お付き合いで頂けたら幸いです。

珠姫の携帯購入によって、じまられたお話を。

「ん」

「…なんだ。その手は？」

お弁当を食べ終わつて氣の置けない仲間たちと話をしているところに高知がやつってきた。

短い言葉とともに差し出された手。その手を見て、視線を上にあげる。

ワケが分からん。

珠姫とは違つてお前の意図は分からないんだから、きちんと口で説明しろよ。

じろりと睨めば、高知も負けずに睨んできた。

本当に、ワケが分からん。

急に勃発した緊迫した雰囲気に、クラスメイトたちが何事かと注目していく。

それに顔をしかめたのは俺だ。

「その手は何だ。口ではつきつと言え」

もう一度、問う。

そつすれば、何故分からないんだとばかりに、ため息をつかれた。

ため息をついたいのはこちらのやつだ。

本当に、何故こいつはこんなに偉そななんだ？

「ケータイ」

「……は？」

「携帯。携帯電話！ 昨日買いに行つたんだろ。珠姫ちゃんの」

「あ？ ……ああ。やうだな。買つに行つてきたな」

しかしそれがどうしたのだ？

そう思つたのは俺だけだつたらしく。

俺の発言に周りがざわめいた。

何なんだ？

「約束だろ。珠姫ちゃんのナンバー教えろよ」

騒ぎ始めた周囲を放つて、高知がもつ一度詰め寄つてくる。

「なんで？」

「なんでお前？」

「あいつの件は片付いただろ。教える必要がない。だから俺は教え
ない」

「なつ」

やつと理解ができる、返事を返す。

当然だよな？

あの時は緊急事態だつたからあんな事を言つたが、事態が落ち着けば、俺が勝手に珠姫の携帯番号を教える権利は無い。

たとえ俺がここで珠姫の保護者のように認識されてもだ。だからそう言つてやつたのに、俺の答えが予想外だといわんばかりに驚かれた。

ワケが分からんやつめ！

「皇！」

「駄目だ」

「皇……！」

「俺に聞かずに、珠姫に直接聞いてくれればいいだろ？が。そこまで俺は制限しないぞ。出来るだろ、有能な生徒会長様？」

少々意地の悪い方は「愛嬌だ。

珠姫の携帯には今、澪さんと真さん、父さんと母さんと血色、そして俺の携帯くらいしか登録されてない。

いや、多分今頃は篠川の携帯は登録されていることだらう。彼女が珠姫の番号を勝手に流出しないことは分かっているから、安心だ。

それに、きっと下心満載のやつらが来て、ばつさり斬つて捨ててくれて、いることだらう。

そして、珠姫も購入した今でも携帯に興味が無いから、ほほ放置だらう。

（…携帯持つ意味があるのか？いや、でもまた変なやつが出てきたら…）

もう購入してしまつてから考へることでもないと思いつつも、考へ

てしまのは人の習性か。

いや、俺の習性か？

深みに入りそうな思考はシャットダウンする。

高知の様子を窺うと、プルプルと震えている。

どうしたんだか？

声もかけずに見守れば、若干涙目でこちらを睨んでくる。
そういう仕草は可愛い女の子がするべきではないのか？
そう考えた俺は悪くない。

「ああー…やつてやるぜっ！…お前なんかの手なんて借りねえっ…！
？」

一方的に宣言して、高知が教室を飛び出していった。
これから珠姫のところに行くのか？

やる気満々だな。

うん。強く大きくなれよ！

見送った俺を欲望に満ちた目をしたやつらが待ち構えていたのだが、
俺はこの時気付かなかつた。

見事逆碎して帰つて来た高知が、俺に泣きついてくるまで後、數十

分。

珠姫の携帯番号を巡つて新たな苦難の日々がやつてこようつとま、このときの俺は髪の毛の先ほどこも思つてはいなかつた。

斯くも世の男たちは、おろかな生き物らしい。

1. じばれ話の2（前書き）

これまた携帯購入による、いじばれ話。

「み、澪さ～～んつ……」

ある日、とある県のとあるマンションの一室で、喜色に満ちた声をあげながら走る男の姿があった。

生憎、幸運なことに、それを見たのはただ1人であったが。

「近所迷惑よ。マニア」

「うん、じめん。でね！ 澪さん、聞いてよ……」

相手の非難の言葉にあつたりと謝つたが、本当に悪いと思つているのか分からぬほどに、男のテンションは高く、やはり嬉々として手に持つた携帯を目の前の女性のほうへ向ける。

男のテンションに、このままでは言つても無駄だと判断した女性

筒井澪はため息をついた。

目の前で携帯をかける男は筒井真。

澪の旦那様である。

「ああ……珠姫からメールが来たのね」

「そつーそつなんだよ……元気だつて……」

男が何をそんなに喜んでいるかというと、携帯を初めて購入した最愛の娘である珠姫から、初のメールが届いたからだった。

現在、仕事の都合で、泣く泣く離れて生活している珠姫からのメール。

それも初メール。

常々、『最愛』と恥ずかしげもなく他人に話すほど娘である。これが飛び上がつて喜ばすにはいられない真であった。

それを冷めた目で見つめる妻の視線も気にならないのか、たつた一言『元気』と書かれたメールを愛おしいものを見るように見ていた。たつた一言の素つ氣無いメールに、万感の想いが込められているかのように見つめる夫に、澪は呆れしかなかつた。

事の起こうは一週間程前。いつも恒例となりつつある、珠姫を預かってくれている宮ノ内家の電話からだつた。

昔からの親友である亜紀恵のおつとつとした柔らかい声が、受話器から聞こえてくる。

「え…携帯？」

『そーなの。皇紀が珠姫ちゃんに携帯を持たせたいって言つてるの』

「…皇くんが？」

受話器から聞こえた『皇紀』の名前。

皇紀とは、富ノ内家の愛息子の名前だった。

そして娘の大事な人の名前もある。

澪も実は、かなり前から珠姫に携帯を持たせようか悩んでいた。

と化す可能性のほうが高く、購入には踏み切れずにいた。

そこに聖紀の名前である。

脳に言葉の意味が届いて、慌てるあまりに畠紀恵の言葉を途中で遮るよつて口を開いてしまひ。

(皇くんが珠姫について…素敵よー！理想の展開だわっーーー！)

沈黙にも気付かず、澪は今後の事を思つて知らず笑みをのぼらせる。

『澪ちゃん？』

「……く？……つーーー、ごめんなさいーーすごい理想的な話だつたから

『や。あ、二二。』と許可が認められた。

くわ

「ええ。お願い。それと、購入した携帯を珠姫が扱えるようにレクチャーオ願いしますって言っておいて！」

『……分かつたわ』

その後、珠姫の様子について聞いて受話器を下ろした。

「澪さん、何かいことでもあったの？」

後ろから聞こえてきた声に笑顔のまま振り向く。妻の嬉しそうな顔を見て、真も笑みを見せる。

「うん！…とってもいいことがあったわ」

「そ、うなんだ！…何があつたの？」

「え……またのお楽しみ？」

「ウソ……教えてくれないの？」

からかいがいのある夫に、澪は無邪気な顔を裝つて、首をかしげた。案の定、情けない顔をした真に口口口口と笑う。

「澪さん～～～ん」

「ふふふ。嘘よ。実は、珠姫が携帯を持つことになつたの」

「え……う、嘘つ……？だ、だつて、持たせても無駄だつて…」

「本当よ。だつて、皇くんからの要望だもの」

「うわつ……で、電話……電話しなくちゃ……」

話を聞いて真は転げるよつに電話に飛びついた。これには澪も驚いた。

「ちよつ……マコ…」
「う～ん。う～ん。早く出で～～～…」
「…」

短縮を押したのだろう。

受話器を耳に当てて、相手が出るのを今か今かと待つ真。それを啞然と見ながら、澪は口を開けたまま凝視する。

「あーも、もしもしつ……皇輔さん！ほ、僕だよ……真つ……！……うん！珠姫が携帯を持つことになつたつて聞いて、連絡したんだつ……そう！皇くんに頼みたいことがあつてねつ。あの、僕、珠姫からのメールが欲しくて……うんつ！お願いします……あります……！」

真の天にも駆け上りそつたテンションに先ほどの自分の喜びも彼方へ。

正直、ドン引きしながら、亜紀恵の夫である皇輔と真の（真の声だけ）会話を聞いていた。

ホクホクとした顔で受話器を下ろした真にため息が出る。

（マコは本当に珠姫ラブで困っちゃうわ……いや、私も珠姫大好きだけど……珠姫がお嫁に行くときどうするのかしら？）

満面の笑みでこちらを振り返る夫を見ながら、澪はもう一度ため息を吐いたのだった。

いつまでも携帯画面を見て幸せそうな顔をする真を放つて、キッシュに移動していれば、澪の携帯がメールの着信を知らせた。早々と登録した珠姫のための着信音だ。

どうやら真に遅れて澪にもメールを送ってきたらしい。

これといって夫より後になつたメールに文句を言つつもりの無い澪は、携帯を開く。

操作してメールを見れば、夫と同じように「元気」の一言。クスッと笑う。

しかし、その下に添付のマークが。

夫との違いに首をかしげながら添付を開けば、澪の顔に輝かんばかりの笑顔が咲いた。

「澪さんにもメール来たんだね！ 良かったねーー！」

やつと興奮がおさまつた真が後ろからやつてきて、澪の開けた携帯に注目する。

澪は勢いよく振り向いた。

それに目を瞠る真。

「来たー超可愛いーーー！」

ギュッと携帯を抱きしめて先ほどの装つたものではない、無邪気に笑う澪に、真は目を奪われる。

そして、我に返り、澪の言葉を咀嚼する。

『超可愛い』

それははどうだうか？

首を傾げて澪に問う。

「二二二二と携帯画面を真に向けてくる。画面を見た真は固まつた。

澪の携帯画面には、記憶の中より断然大きくなり格好良くなつた皇紀と、愛しい珠姫のツーショットが写つていた。

そして、何よりいつも無表情に近い珠姫が、嬉しそうに笑っていた。

! ! ?

近所迷惑極まりない言ひ声が、とあるマンションの一室であがるのであった。

いじめられ話②（後書き）

次も携帯の話になります。
書き始めたら止まらない（苦笑）

「珠姫ちゃん」

「？」

「真くんにメール送つてあげた?」「ん」

珠姫は頷いて携帯画面を向ける。

そこには「元気」の文字。

亜紀恵は想像通りのメールに笑いを隠せない。
そして、そんな素つ氣無いメールだろうと、狂喜乱舞していくだろう真も想像できた。

「澪ちゃんには?」

「これから」

「やうなの」

珠姫の返事を聞いて、亜紀恵はある事を思つてヒヤヒヤと笑つ。

「真くんと同じにするの?..」

「ん」

「せつかくだし、ちよつと足なー?..」

「?..」

「写メ?つけて皇紀に聞いた?..」

「んん」

珠姫が聞いてないと頭を振つて否定する。

その様子を視界におさめて、皇紀を探す。

皇紀はソファで、暢気にサッカー中継を見ている。

「携帯で撮る写真のことなんだけど、それをメールにつけて送ることができるのよ。せつかくだから、澪ちゃんに送つてあげましょ？」

？」

「ん…」

（あら。そんなにノリ気じゃないわね…なら）

「皇紀と一緒に写つてこらやつを送つてあげましょ。気に入つた写真があれば、待ち受け画面とかにも出来るわよ？…ああ、待ち受け画面つていうのは、この開けたときに最初に見える画面のことよ。携帯を開ければ、皇紀の写真があらわれる！…どうかしり…」

「撮る！」

軽々と珠姫のやる気を引き出しつつ、畠紀恵はまくそ笑む。

操作方法を軽く教える。

まずは実践あるのみだ。

珠姫を引き連れて、テレビに夢中の皇紀に近づいていく。

「珠姫ちゃん」

「ん」

「…つわつーな、なんだ！！珠姫つ

田配せひとつ、珠姫が頷いて皇紀の膝に突進する。

珠姫の行動に驚いたのは皇紀だ。

抵抗する暇もなく膝を占拠される。ギコウツと抱きついてくる珠臣

モニカと抱抱(ハグ)の珠姫に皇紀は月を泣かせやっていた。

「ナイスよ！珠姫ちゃん！！」

「つー母さんの仕業かつ!! 何してんのつ?！」

「携帯買つたんだから、せつかくだし、写真機能を珠姫ちゃんに教

「 」

いいじやない！珠姫ちゃんが田でも早く携帯に馴染んでくれ

「かつかつた女」

文句を言おうとして機先を制されて黙り込み、しぶしぶ頷く皇紀に、
亜紀恵は心の中で拳を握る。

「よし。じゃあ、そのまま動かないでね。珠姫ちゃん撮るからそのまま可愛い顔ちょいだいね」

「母さん、それじや何処かのエロカメラマン」と

口を閉じがまへ

1

ガラリと変わった雰囲気と、むしろ変わらず微笑む亞紀恵に皇紀が黙り込んだ。

「ハイ、チーズ！」

ピロリン

可憐らしい音が部屋に落ちる。

「 ちよつと笑みが足りないわね」

「 …」

「 もう一回撮るわ。 皇紀」

「 …なんでしょうか、お母様？」

「 ギューシと珠姫ちゃんを抱きしめてあげてちょうだい？」

「 …」

ため息をひとつ。

しかし、皇紀に否やは許されていなかつた。

「 うんー可愛いわーー」

ホクホクと満足そうに笑う亜紀恵と、これまで皇紀に抱きしめても
らつて嬉しそうな珠姫は、台所に移動する。

皇紀は、ぐつたりとソファに身体を預けてる。

テレビ画面で続いているサッカー中継を見る気力は無いようだ。

「 じゃあ、珠姫ちゃんこの写真を玲ちゃんに送つてあげましょーー」

「 ん」

「 それが終わつたら、待ち受け画面の設定も教えてあげるわ」

「 ん！」

嬉々として、メールを打つべく携帯をたゞたゞしくも操作する珠姫
を優しい瞳で見守る。

(これで、珠姫ちゃんが携帯を大事にしてくれるといのだけど…)

富ノ内家の家庭内平和を守る田紀恵は日々これらを担当しているのである。

この後、血も凍らせよといわんばかりの真の抗議の電話が富ノ内家へかかるつて来るのだが、それはまた違う話。

ただ、一言付け加えるのならば、田紀が「母さん、勘弁してよ…」と、ソファに深く深く沈んだといつ事実だけだった。

何処までひっかかるのか…。

「珠姫、おはよっ」
「おはよう」
「なにか嬉しいそうね？」

いつもの時間に学校に登校した篠川綾香は、出入り口のドアから教室の中を見回し、これまたいつものように窓際の席に座る筒井珠姫を見つけて、挨拶をしつつ、前の席に鞄を置き、椅子に座った。

まあ、当然だ。

そこが彼女の席であつたからだ。

挨拶をすれば返つてくる返事とは別に、今日の珠姫はいつもの無感情さを捨てて、少々フワフワと浮いたような雰囲気を纏つているようを感じた。

他の者にはいつもどおりに見えたことだろうが、友達宣言をしてからここ数週間、彼女を近くで見てきたのだ。

ちょっとした雰囲気の違いくらいは分かるようになつたと綾香は自負している。

「携帯買つた

「わお」

珠姫がなんてことない風に携帯電話を購入したこと口にしたわけ

だが、綾香はそれに思わず驚いた。

「予想より早かつたわね…。で、ナンバーは教えてくれるんでしょう?」「ん

ピラリと、一枚の紙片が目の前に置かれた。
それには、珠姫の番号である「ナンバー」とアドレス。
綾香は口元を弓なりにあげる。

「ありがと」

紙片をつまみあげて礼を言つ。

「で、どんな携帯買つたの?」「ん

紙片を胸ポケットに収めて聞けば、これまた机に置かれた携帯。
チエリーピンクの装丁に、上蓋にキラリと輝くビーズの花が咲いて
いた。

「可愛い。買つてすぐに弓つたの?」

「亜紀さんがしてくれた」

「亜紀さん?」

「皇ひやんのお母さん」

「…」

突然出てきた知らない名前に誰かと聞けば、さらりと珠姫の愛しい
人の母の名前が出てきて、さすがの綾香もすぐには返答できない。

「そ、そつ…」

動搖を隠せず、少しどもりながらもかえせば、無言で頷く珠姫がいた。

（幼馴染とは聞いたけど、かなり親密なのね。親公認のかしら？）

まだ出会つて少しの、それも無口に近い珠姫の事情を、実は綾香はそれほど知らない。

根掘り葉掘り聞くのも、綾香の意に反していた。

これからでも話を聞くための時間はたつぱりあるのだからと綾香は急いでいない。

「携帯見てもいい？」

「…ん」

考えるそぶりを見せたが、頷いた珠姫に礼を言つて、携帯を机から持ち上げた。

買ったばかりの傷ひとつ無い装丁に、自分もそろそろ新しい携帯に替えようかしらと思いつつ、パカリと開けた。

その途端、視界に入つてきたものに綾香はフリーズした。

開けた携帯の画面には、珠姫と皇紀のツーショット写真。

しかしそれだけで綾香が固まるはずは無い。

2人のツーショット写真は、ただ一緒にフレームの中に納まつているというだけじゃなく、珠姫が、皇紀の中に抱き込まれているというので、それに伴い、珠姫が惜しみなく笑みをこぼしていたからであった。

「つー…つつー…つつー…?」

携帯を握り締めて、声を出さずに身悶える綾香。

その姿は、いつも彼女からはかけ離れた姿で、教室に来ていた生徒たちの視線を奪うには十分だった。

しかし、綾香の奇行は終わらなかつた。

携帯を片手に、机に突つ伏し、バンバンと机を叩き始めたのだ。

「…………つ…………？」

その奇行は少しの間続いた。

「はあはあはあ……」

ぐつたりと疲れた。しかし、それよりも満足げな顔をして乱れた息を整える綾香がいた。

深く吐いて、深く吸つてを繰り返して、やつと落ち着く。

「携帯」

「あ……ごめん」

手を出されて反射的に謝りながらその手のひらの上に携帯をのせる。ハツと気付けば、携帯は珠姫のポケットの中。

「ああ……珠姫」「ん？」「今待つつけ画面のデータ……ちゅうだい？」
「だめ」

「ええっ！－やだ！欲しいっ！」

「ぜつたい、だめ」

「その画像があれば絶対、私、幸せになれるからっ－ねつ－－ちよ
うだい？？」

「これは珠姫の」

この日、ずっとこの光景が繰り広げられるわけだが、その光景に、
同じクラスの生徒だけでなく、ほぼ全ての生徒が、珠姫の携帯を購
入したことについて知り、その携帯の待ち受け画面に興味を持つこ
とになる。

皇紀がそのことについて知るのはもう少し後のことだった。

「皇～～～！！」

「ぐど～～！」

「冷たい！」

「ああ。冷たくて結構だ」

ここ数日続いているこの攻防、今のところひりひりも譲る気が無くて終わることなく続いている。

「～～～～～～～～～～～～！」

唸る高知から顔を逸らすと、そこには悪友たちの姿。

「なんだよ」

「お前等も飽きないねえ」

「高知に言えよ」

「まあまあ

「皇が教えてくれれば終わる話だつ一つにー」

「五月蠅い。黙れ」

ツンドラ気候も真っ青な冷たい声がすべてを凍らす。さすがの高知も黙り込む。

「あ…ははは…」

「まったく。どいつもこいつも個人情報の守秘義務つてもんを分かつてないのか」

「…」

「そ、それよりもだ！俺、聞きたいんだけど」「何？」

まだツンドラ気候からも抜け出せない鋭い目から視線を逸らしつつ、彼らはここ数日大きくなつていいく噂の真相が知りたくて口を開く。

「あー…実はな、姫さんが携帯を購入したことをほぼ全校生徒が知つていいんだが」

「そりやあ、何処かの馬鹿が大騒ぎしてるとからな」

『姫さん』といつのは珠姫のことだ。

最近、2・3年生では珠姫はこう呼ばれるようになつてきた。
名前とその容姿的なものをもじつてているようだ。

ちらりと皇紀が高知を見る。

気まずげな顔をするのに、少しだけ溜飲が下がる。

「いや、高知が原因とも言えないっぽいんだが」

「…はあ？」

「俺が聞いた話だと、お前たちが騒ぎ始めた日の朝には、1年の学年は皆、姫さんの携帯購入の件を知つていたらしい」

1年。

その言葉に、どこから情報が広がったのか、察知してしまつた皇紀だった。

どつぶりと重いたため息を付く。

「……でだ」

「まだ何かあるのか……」

「おう。実は、その姫さんの携帯に垂涎のお宝待ち受けが

「

ガタンッ！！

最後まで言わせることなく、椅子が乱暴に引かれた音が間に割つて
入る。

「

「」、皇？」

「……ま、待ち受け……画面？」

「ひつ！」

ゆらりと立ち上がった皇紀に、周りに集つていたやつらが「こだつて
一步後ろに下がつた。

そんなことはお構いなしに、皇紀はひつ一度聞く。

「待ち受け画面がどうした？」

「ひ、姫さんの友人の篠川さんが叫んだって……言つんだ……」

「……なんて？」

「それを見れば、『絶対、私、幸せになれる』からって……」

「……」

ゆつくりと席を離れる皇紀。
それに伴い割れる人の波。

「こ、皇？」
「み、宮ノ内つ？！」

辺りの人間の関心の視線など放つて、皇紀は教室を飛び出したのだった。

「珠姫」

「皇ちゃん！」

皇紀が珠姫の教室について名前を呼べば、振り向いた珠姫が嬉しげに笑つて、席を立つ。

珠姫の席の前に座つて、珠姫に向かつて拝む仕草をしていた綾香はその姿勢で固まっている。

「篠川、用があるんだが。今、大丈夫だよな？」

「は……ははは……はい……」

乾いた笑いとともに振り向き、悄然と頷いた綾香と珠姫を連れて移動する。

気付けば、また人の波を割るように移動する皇紀たちがいた。

「で？弁解はあるか？」

「…無いです」

「ほお？」

「…」

「俺は篠川をそれなりに評価していたんだが？」

「…すいません」

「ああ…で？」

「…田先の欲望に負けてしまつて」

未だ悄然とうなだれたまま、綾香は口を開く。
皇紀の顔は怖くて直視できない。

声だけでも氷点下なのだ。

今回の騒動の原因となつた身としては、綾香には何も申し開きの言葉は無かつた。

いや、言いたいことはあつた。

「あ、あのま…」

「…？」

「…」

「…」

「…」

「はつきりと言え」

痺れを切らした皇紀に、ヤケになつたのか、綾香はキッと睨んで捲くし立て始めた。

「あの待ち受け画面は何なんですかっ！…あの待ち受け画面が悪いんですっ！…あんな待ち受け画面、反則ですっ！…何ですか？…あの写真はっ！…富ノ内先輩が、あんな写真を待ち受け画面に許すから悪いんですっ！…！」

「…」

ゼエハア、息をこぼす綾香を見下す。いつもの冷静沈着な姿は片鱗ひとつ残つていない。

「…珠姫。携帯」

「ん」

端的に言つて、手を出せば、珠姫が手の上に自分の携帯をのせた。

パカッと開けば、その待ち受け画面は記憶にあって、記憶に無い画像が曝し出されていた。

皇紀にその写真がいつ撮られたのかについての記憶はあつたが、その仕上がりについては見てなかつたので、知らなかつたといつ」とである。

「…」で初めて見たと言つていい。

「これが…」

皇紀の「」の言葉は、今回の騒動（？）全てを理解したことへのものだつた。

（これが漆さんに送られた画像なんだろうな…）

皇紀が、真から命のほどはじつとこつべき言葉を聞かされた原因といつべき画像。

皇紀には、母親の高笑いが聞こえてくるような気がした。

（あのひと…やつてくれたよ…）

もう、何度もかの諦めの極致だった。

「珠姫」

「？」

「この待ち受けはやめなさい」

「や

「珠姫」

「やあー！」

皇紀の言葉には大抵従う（？）はずの珠姫がイヤイヤと、首を振る。何度目か分からぬため息をつく。

（仕方が無い）

皇紀は覚悟を決めた。

「分かった。……じゃあ、もう俺の部屋への出入り禁止

近づき、珠姫の耳元で囁く皇紀の声は、綾香には聞き取れなかつた。耳に落ちた言葉に、珠姫が無表情を消して、ショックを受けたような顔をした。

綾香はその変化を目の当たりにして驚く。

いつもではありえない、目に見える変化だつた。

「やだああ…」

涙まじりの声。

「その待ち受けがあれば大丈夫だろ？、俺が居なくても」

そつけない言葉。

「ちが、うー。」

「……じゃあ、その待ち受けやめるか？」

「……ん…」

とても悲しそうな声に、綾香はすぐにでも駆け寄り、抱きしめたいと思う。

しかし、いつの間にか第三者的な立ち位置の綾香には、介入は許されていなかつた。

「…いいこだ」

「…」

グリグリと頭を撫でられて尚、悲しそうな珠姫に、皇紀が軽く息を吐いてもう一度、口を耳に寄せる。

「 」

変化は劇的。

華のような笑顔。

そして、皇紀の胸元に押し付けられた頭。

「篠川

「…は、はい！」

「すまないが、あの待ち受けのデータはやれん。すまないな」

「あ…は、い…」

皇紀の言葉に残念と思いつつも、先ほど見た珠姫の笑みで今回は満足した綾香だった。

珠姫に視線をやれば、錯覚かと思つほどに、珠姫はいつもの無表情に戻っていた。

「…元に戻つてゐる」

納得したつもりでも、納得できない心もまだあって、つい言葉が零れた。

皇紀がそれに笑つたのを見て、慌てて綾香はいつもの顔を取り繕つた。

「…」の度は、「迷惑おかげしました」

「いや。こちらも迷惑かけた」

皇紀と分かれて珠姫と教室に戻りながら、綾香は思い出す。

(やう言えぱ、さつき、宮ノ内先輩なんて言つて珠姫を納得させた
んだるうへ。)

思い出したら気になつて仕方なかつたが、聞いても珠姫が何も言わ
ないだるうと思つたので、聞くことはしない。

当分の間、皇紀の台詞を思い描いて悩むことになるのだが、この時
の綾香はその事を知る由もない。

じょれ話〇五（後書き）

次で携帯のお話は終わります。

1. 携帯電話の6（前書き）

携帯電話はいままでです。

「 」

今日の真は絶好調だつた。
仕事の道具を操るその手も素晴らしい。

「筒井さん、なんか機嫌いいよね?」

「そうだな」

「最近そわそわしてたり、落ち込んだり多かったから、いいことじ
やないですか?」

「確かに」

同僚達がコソコソと話をしている。

しかし、真はそれに気付かない。

「筒井が落ち込むと、何故か機械の調子とかが一気に悪くなるから
なあ……」

「本当に……」

数週間前の事を思い出して、彼らは一様にブルリと身体を震わした。

「……」のまま機嫌がいいといいな

「ですね…」

「だね」

彼らは知らない。

真が、愛娘からのメールに一喜一憂している事を。

そして、妻に送られてきたように、自分に元も【】メを送るように要求して、今日待望のメールが来ることを。約束を取り付けられ、期待でいっぱいなのだ。そりやあ、機嫌もうなぎ上りだ。

「ふんふん」

真の笑顔が眩しい。

そんな時だ。

ピロッピロッ～ン

メールの着信音が聞こえてきたのは。

真の目の輝きが先ほどよりもっと眩しくなる。

仕事道具を放り出し、急いで携帯を開くその顔には喜びしかない。

現在、夕方を通り過ぎ、夜に向かう時間。

珠姫からのメールが来ておかしくない時間だった。

「珠姫からだ！」

『やくそく』とこう文字と、添付のマーク。

にまにまと笑いが止まらない。

周囲に自分がどう見えてるかなんて、
添付マークを押す。
真は全然気にしなかつた。

喜びの表情のまま、フリー^ズした。

画面の中には、愛娘の大好きな人。
そう、それは構わない。

しかし、最大の問題があつた。

そう、珠姫の大好きな皇紀単体しか写つてなかつたからだ。携帯にまだ慣れていない珠姫が一生懸命取つたのであらうつちよつとななめつた皇紀の姿。

考えれば、微笑ましい状況が浮かびそうであるが、真が求めていたのはそんなものではなかつた。

真の心の叫びがあがつたのはそれからすべてのことだった。

そして、その後、周囲に置かれていた機械といつ機械が、変な機械音を残し電源を落すことになる。

真の同僚達が、すきつ腹を抱えて復旧作業に追わることになるのだが、それはここで語ることではない。

お気に入り登録ありがとうございます。
かっこでも楽しんでおられるよう頑張ります。

オリエンテーション前に約束していたバケツパフェなるものを現在、食べに来ていた。

キヤイキヤイと辺りは賑やかだ。
ザツと見回して、女しか居ないのを確認。

「…早まつたか？」

つい咳きが零れ落ちる。

目当ての店が、本日割り引き『ティー』だつたらしく、篠原が珠姫を連れて誘いに来たのだ。

ああ、約束したな。

と、軽く了承して、学校を出た。

高知に途中会うことも無く、3人で目的地へと向かう。
やつならば、この機会を田ぞとく見つけて途中参加するのではない
かと思つていいたのだが、そんなことはなかつた。

だから現在、賑やかなるこの店内に男一人。

視線が四方八方から寄せられていくような気がしたが、きっと気のせいに違いない！

：高知、なぜこんな時に！そ顔を出さないんだつ！役立たずめ！！

7

「やっぱこれかな～？珠姫、これでいい？」

卷之三

無言を貫く俺を放置して、珠姫たちは今回の目的である大型パフェを選ぶ。

どうか、種類が二つはあることに驚いた。
そして、バケツパフェとかいうものの見た目に、そのままガン見し
ちまた。

マジで、なんだせ?

絶対見たらその情景に呑まれるつて。

追々半端ねえ

「こ、これを3人で食べるのか？」

はい、頑張りましょう!!

h

3人で囲んだテーブルの中心に置かれたブツに、嬉々として手を伸ばす2人。

唖然としたままそれを見送る。

「黒ちゃん

珠姫がコーンに盛られたアイスクリームを俺に差し出してきた。

異常がわかるだろうか？

パフェを食べているはずなのに、コーンに入ったアイスを食べようとしているんだ。

何故？

何故に、普通にパフェにアイスクリームの一球がぶつさわれているんだ？！

パフェなのか？

それとも普通のアイスなのか？

はつきりしてくれよつ！—

心の中で、休む間もなく突っ込みを入れながら、渡されたアイスクリームを逆らわずに食べる。

その合間にも、大きくカットされて飾られたフルーツを手にとつて、俺の口に珠姫が持つてくる。

「あーん？」

ザワリ

「…」

パクリ

モグモグモグ

周りからの視線が痛い。

何故にまで注目する

動物園に生まれたパンダの赤ちゃんのお見舞の日みたいに、この場合、そのパンダの赤ちゃんは俺だ。

視線を黙殺するべし！

卷之三

一 美味しいですか?」

に、ひとりと艶やかに笑う篠原に殺意を覚えたりはしないぞ！

口の中が空ぐ間にせらるるノイーんを視線で止める

甲子年 食六

そして、そんな残念そうな目

「珠姫も食えよ」

俺に食べさせるのに必死で、自分がおろそかになつてゐるにも気付かない珠姫に呆れつつ、パフェにスプーンを持つ手をのばす。ジッとその手を見る珠姫。

10

「…ほり」

いつも通りに根負けして、すぐつたアイスを珠姫の口に運んでやる。素直に口を開ける珠姫。

先ほどと反対に、親鳥のようにパフュの中身を運ぶ。一生懸命に咀嚼する珠姫に、つい、楽しくなつて、自分で食べる事を忘れた。

「富ノ内先輩」

「…ん?」

呼ぶて我に返る。

視線を移せば、仄かに頬を染めた篠原の顔があつた。

「それぐらいで…私が居たまれなくなつてきました…」
「?」

ワケが分からん。

考える合間に珠姫の口へスプーンを押し込んだ。珠姫も何か言うわけでもなく、口を動かしている。

この後、何かの限界に達したらしい篠原の懇願に、俺と珠姫が各自にバケツパフェの完食に精を出すことになるのだが、それはもうすこし未来の話だった。

じまれ話〇7（後書き）

あと一、二つでじまれ話終了予定です。

HP部のやの後。

と、いつもサワコとしか書いていない（汗
これまでお話を終了です。

前にも書きましたが、次の話ごくまでもHPマークにしておく予
定です。

しかし、秋には再開予定です。（すぐやるのよつな気がしますが…
よければまたお付き合っていただけたらと思ってます！

部活紹介のオリエンテーリングが終わって、2週間が経つた。

「どうも空手部が変わってきたらしいぞ」

昼飯を食べ終わって窓いでいるところに落とされた言葉。

情報を持ってきたのは悪友と呼ぶべき一人だった。

そいつはよくこんな風に何処からとも無く情報を仕入れてくるやつだった。

「へえ？」

俺的にはもう終わった件だったのだが、その後の話は少々琴線に触れた。

続きを促す。

情報を持つててくれた友の話を要約すると、以下のことだった。

空手部に新しく来た指導者なる人 赤坂さんのことであるが、弛みきった部員たちを全て床に沈めて（！？）一喝し、空手部に新たな風を起こしたことだった。

空手部で幅を利かせていた3年の片畠などは、これたらしい。

いや、とても見たかった。

：まあ、それはさておき、数日之内に内部の濁といつべきモノを一切合切かきだし、綺麗にしちゃつたらしい。
師匠に頼んでもらつただけの人材であつたようで、とても喜ばしい出来事だ。

心の片隅で気にしていた空手部の件が無事解決したと、懸案事項の項目から外したのであるが、これが新たな面倒」とを運んでくるなどと、この時の俺は思つても見なかつた。

「富ノ内、頼む」

「勘弁してくださいよ… 本条先輩」

空手部の話を聞いた数日後、俺のクラスに本条先輩が訪れたのだ。
あ、一緒に菱田川先輩も居る。

本当にどこに行くでも一緒なんだな。

だが、今はそれどころじゃない。

「一度だけでいいんだ。赤坂さんと試合をしてくれ」

本条先輩の真剣な瞳が素敵だ！とか俺は絶対言わない！！
てか、そんな視線を俺に送らないでくれっ！

周りで起こつた女たちの悲鳴に近い声が耳に痛い。

「これってどんな責め苦だよ？」

そう、現在俺は本条先輩から、空手部に指導に来てくれているO.Bの赤坂さんと試合をするよう迫られている。

何度も言つたかわからないが、俺が説いてるのは空手ではないのだ。畠違いの願いを言われても困る。

さつきから俺と本条先輩の押し問答がかれこれ数十分。

俺の昼休みに、平穏は無いのか？

そう嘆きたくなる。

「畠違いなことは分かつている。しかし」

「分かつてているのなら、無理やり試合させようとしたしないでください。それに相手はあの赤坂さんですよ。俺にぼこぼこにやられると？」

「そんなことにはならないつ！赤坂さんはいい勝負になるだろ」と言つていた

「あの人は…」

絶対楽しんでる。

間違いない。

それも、本条先輩をけしかけてくるなんてどんな仕打ちだよ。けれども、俺の答えは決まつている。

「本条先輩に頼まれたら断りにすべし」「富ノ内！」

喜色が本条先輩の顔に上がる。

てか、最近本条先輩の色々な顔を見まくりだな。
本条先輩のファンに睨まれないよな…。

「ですが、お断りさせていただきます」

あげて落とす。

こんなことはしたくなかったが、俺の答えは変わらないんだから仕
方が無い。

だから、そんな愕然とした顔はやめて欲しい。

「やるな。富ノ内」

「菱田川先輩…楽しそうですね」

「いんやあ？俺だって断られて困つてゐるぜ」

どじり辺が困つてゐるというやつ。

文章として書き出して、提出してもらいたい。

そつ思いつつ、「困つてゐる」と、それなりに好印象をもつた先輩
方に言われたら、救いの手を伸ばすしかない。

「赤坂さんには直接、断つておきますよ」

断つることに変わりはないが、これなら先輩方にも被害はいかないだ
らう。

ホッとした顔をする2人 ではなく、とても残念そうな顔をした
2人？

何故に？

先輩たちの為を思つて言つた言葉のはずが、どうやらこれとこつて

助けの言葉にはならなかつたらしい。

「本条先輩？菱田川先輩？」

「あー…まあ、そうしてくれると、ありがたい話ではあるんだが、な」

「？」

「俺たちも、宮ノ内と赤坂さんの試合を見たいと思っていた…とも残念だ…」

「…」

…。

しょんぼりと肩を落とす本条先輩から視線を外して、俺は盛大なため息を零すのであった。

「趣味悪いですよ、赤坂さん」

「何がかな？」

放課後になり、生徒会での雑務を終えて俺は武道館に来ていた。

そつなく挨拶をして、空手部の練習風景を眺めながら赤坂さんに対峙する。

赤坂さんは終始穏やかな笑顔だ。

それが何より恐ろしい。

「で、ここまで来たのはやつぱり俺と試合をするため ではなく、
断るためかい？」

「それ以外の何があるというんですか？」

「手厳しいね」

「笑いながら言われても、説得力ありませんよ。…先輩方に頼まれた俺が、仕方なしにここに来ることは予想済みでしょ」「ははは…。まあ、君が彼らの頼みで俺の願いを聞いてくれるなら、此方としては万々歳だつたんだけど。そろは上手くいかないね」

「…」

憮然とした顔を隠すことなく赤坂さんの次の言葉を待つ。

「では改めて。富ノ内、俺と戦ってくれないか？」

「お断りさせていただきます」

「一言か…」

「格闘マニアに付き合つてる暇は無いんですよ」

「…本当に君は手厳しいね」

取り付く島など作らない。

俺は戦いたいといった理由から古武術を廻つたわけではないのだから。

「赤坂さんと俺はスタンスが違いますよ。俺は必要に駆ら

れて武術を習い始めた。だから、その為にしかこの手を使わない

「彼女のため…かい？」

「聞いたんですか？…そつとも聞えますね。だけど、それだけでも

ない

「それは

「言ひ必要の無いことです」

「…そつか

「…そつか

ちょっとシリアスな感じになってしまったが、これで終わりだ。

赤坂さんには赤坂さんの想いがあるように、俺には俺の想いことがある。

譲ることと譲れないことはどうして出でくる。

そして、今回のこととは申し訳ないが、今の俺には、譲らなければならぬことには思えなかつた。

ただそれだけだ。

「了解だ。では、またの機会を待とうかな」

からりと笑う赤坂さんは、やつぱり俺より長く生きている分か、硬くなりかけた雰囲気をやんわりと普通に戻してくれた。

「…そりですね。機会があれば

まあ、あれだな。

俺は赤坂さんを気に入ってしまったたらしく。

『機会なんてあつません』ときつぱりと叫び、そのまま、じつさがらいには。

それが伝わったのだろう。

赤坂さんが軽く肩を叩いてきた。

「せつかくここまで来たんだし、練習見て行ってくれや」「嫌ですよ。男どもが暑苦しく汗流すといの見て何が楽しいんですか」

俺と赤坂さんは少しの間、気のおけない友人のようなやりとりを交わしつつ、練習に勤しむ空手部員たちを見守るのであった。

いいまで読んで下せりてありがとうございました！

少しでも楽しんで頂けたら幸いなのですが。

皇紀と珠姫のドタバタラブストーリー（いっそくなつた！？）はまだ
続きます！

少しでも早く再開できるように頑張りますので、再開して頂いた際には、読んで頂けたらと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1959q/>

皇帝と眠り姫の運命論

2011年8月26日08時45分発行